

# ヨハネの手紙 第一ノート

2023 版

Dr. Thomas L. Constable

## 紹介

### 著者

この書簡には、ヘブル人への手紙と同様、筆者の名前は記載されていませんが、そのはるかに初期の歴史から、教会では使徒ヨハネがこの書簡を書いたと信じられてきました。何人かの古代の作家はこの本をヨハネの著作と呼んでいました。<sup>[1]</sup>現代の批評家はこの見解に異議を唱えています、それを破壊はしていません。<sup>[2]</sup>

### 元々の手紙の受信者

この手紙の最初の受取人はクリスチャンであったことは確かですが、具体的に誰であったのか、また彼らがどこに住んでいたのかということについての情報は言及されていません。(2:12-14, 21; 5:13)。彼らは教会の指導者だったのかもしれませんが(2:20, 27)。初期の教会の伝統によると、ヨハネはパレスチナを離れた後、ローマのアジア属州の首都エペソで長年奉仕していました。黙示録2章と3章から、彼がそのローマの属州の教会とクリスチャンのことをよく知っていたことが分かります。おそらく彼の手紙の読者はその州に住んでいたのでしょう。<sup>[3]</sup>この手紙はおそらく、1つの会衆だけに宛てられたものではなく、複数の会衆の間で回覧されるように設計されたものだったと思われます。<sup>[4]</sup>対照的に、ヨハネの2番目と3番目の手紙には、筆者の名前、宛先、挨拶が含まれています。

ヨハネがこの手紙の中でほのめかした偽教師や教えは、彼がアジアに存在した状況、すなわちユダヤ教、グノーシス主義、教義主義、ケリントス(著名なグノーシス主義者)の教えなどについて書いたことを示唆しています。これらについては研究論文の中で説明します。これらの哲学はアジアを越えて広がりましたが、ヨハネの生涯を通じてそこに存在していました。

「第一と第二ヨハネを引き起こした異端は、その時代に知られていた他の異端の現れと並行して考えることはできません。しかし、それは複数のそのような運動とのつながりがあります。」<sup>[5]</sup>

「このようにして、第一ヨハネの筆者は、エペソとその周辺の多数の家庭教会からなる共同体に言及していました。…その共同体は、三つのグループに分かれていました。それは以下の人々から構成されていました。(a) ヨハネのキリスト教徒で、彼らが受け取ったイエスの使徒的福音 (b) ユダヤ人の背景を持つ異端的な傾向のある会員 (c)ヘレニズム (および/または異教) の背景を持つ異端の信者2つの「異端」グ

グループに関連する問題 (b) と (c) は主に神学的であり、(ひいては) 倫理的なものでしたが、終末論と空想学(聖霊に関連するキリスト教神学)に関する関連する困難も存在した可能性があります (2:18 と4:1を参照...)。ヨハネ共同体の生活は、第4のグループの人々の存在によって特徴づけられていました:分離主義者たち。最初の3つのグループのメンバーはヨハネの仲間内にいましたが、反キリスト教脱退主義者はヨハネの仲間から離脱し始めていました。これらはヨハネ共同体の異端的な傾向のある信奉者でした。場合によっては、彼らは何も知らされていないとしても、本物の信者だったかもしれません。しかし、他の場合には、彼らは実際には神に属していなかったため、(しかし彼ら自身はヨハネの教会に正しく属していたと信じていた)おそらくヨハネの教会にも正しく属していなかった可能性があります(第一ヨハネ2:18-19参照。2:22-23も参照)。<sup>[6]</sup>

## 日付

これは、これまでの新約聖書の中で最も難しい本の一つです。この本の中で、日付を特定するのに役立つかもしれない数少ない参考文献の1つは、2:19です。ヨハネが偽教師たちが使徒の中から去ったという意味では、60年代という可能性もありそうです。これは、西暦66年から70年のユダヤ人の反乱によってユダヤ人がユダヤから散り散りになる前の、西暦60年から65年頃と考えられます。この場合、ヨハネはエルサレムから手紙を書いたと推定できます。<sup>[7]</sup>しかし、多くの保守的な学者は、ヨハネがこの手紙を書いたのはずっと後の西暦85年から97年頃であり、その頃、彼は明らかにヨハネの福音書(西暦85年頃から95年頃)と黙示録(西暦95年頃から96年頃)を書いたと考えています。<sup>[8]</sup> 私個人的には、ヨハネ第一が想定していると思われる、ヨハネの福音書が書かれた後の90年代の説を信じています。<sup>[9]</sup>

「実際、この書簡は全体を通じて福音を背景としており、福音なしではほとんど理解できません。」<sup>[10]</sup>

人類に対する神の最後の啓示の言葉であるとされるヨハネの黙示録の性質と結論を考慮すると、おそらくヨハネはその書より前に書簡を書いたのではないかと思われます。したがって、第一ヨハネの日付は90年代初頭、西暦90年から95年であることが私には最も可能性が高いように思えます。<sup>[11]</sup>

## 執筆場所

ヨハネは後年エペソとその周辺で奉仕したため、この手紙を書いた場所としてはエペソが最も可能性が高いと思われます。<sup>[12]</sup>

## 特徴

「この書簡は主に論争[攻撃]ではなく、読者を真理とキリストにある生活において啓発するための手紙である。それでもなお、グノーシス主義者の誤りは常にヨハネの頭の中にある。」[\[13\]](#)

「ヨハネは議論的ではなく、瞑想的です。彼は、論理的な結論というより、直観的な認識によって得られる真実を伝えています。彼は論理的ではなく神秘的です。彼は、議論による実証ではなく、彼自身の経験の中で得た真実に着目しています。」[\[14\]](#)

「ヨハネのペンには哲学者が持つ羽ペンというより、外科医のナイフのようだ。」[\[15\]](#)

「聖ヨハネは、果てしなく続く真っ直ぐな道に沿って進歩することを好まなかった。彼は、彼の象徴である鷲のように、旋回飛行を愛していた。」[\[16\]](#)

「…私たちは第一ヨハネ書を読むべきであり、パウロの手紙のように議論の流れを理解しようとするのではなく、むしろその構造と修辞形式[説得したり印象づけることを意図した形式]であることを認識しなければなりません。[話したり書いたりする能力の誇示によって特徴づけられる]流行的な修辞の一部。」[\[17\]](#)

## 概要

ヨハネの執筆のスタイルからこの本の概要を説明するのは困難です。彼はある主題から別の主題へと非常に滑らかに流れていくため、彼の思考に明確な区切りが見られないことがよくあります。対照的に、パウロは通常、主題の変化を明確に認識しました。したがって、以下の概要では、テキスト内の通常とは異なる場所でいくつかの分割が行われています。必ずしも章の分割や節の分割ではありません。以下の概要では、ヨハネの世界では頻繁にみられる典型的な熟考的な演説の構造を示しています。[\[18\]](#)

- I. 紹介: 手紙の目的 1:1-4
- II. 神との交わりの光の中で生きる 1:5-2:11
  - A. 神の光の中を歩むことで道を歩み続ける 1:5-2:2
  - B. 光の神を知ることによって目標に到達する 2:3-11
- III. 敵に抵抗する 2:12-27
  - A. 霊的な進歩に感謝する 2:12-14
  - B. 霊的な敵を認識する 2:15-27
    - 1. 世を乗り越える 2:15-17
    - 2. 反キリストに対抗する 2:18-27
- IV. キリストの裁きの座を待ち望みながら生きる 2:28-4:19

- A. 自信を持ってキリストと向き合うことに留まる 2:28
  - B. 神の子供たちを認識することを学ぶ 2:29–3:10a
  - C. クリスチャンの愛を認識することを学ぶ 3:10b–23
    - 1. 愛ではないもの 3:10b–15
    - 2. 愛とは何か 3:16–18
    - 3. 愛が信者に与える影響 3:19–23
  - D. 愛の神を認識することを学ぶ 3:24–4:16
    - 1. 神が内在することが肯定される 3:24
    - 2. 神の霊が認められる 4:1–6
    - 3. 神の内在が認められる 4:7–16
  - E. キリストの裁きの座で大胆に行動する 4:17–19
- V. 従順に生きる方法を学ぶ 4:20–5:17
- A. 兄弟愛の意味 4:20–5:3a
  - B. 兄弟愛の強化 5:3b–15
  - C. 兄弟愛から生じる結果 5:16–17
- VI. キリスト教の確信 5:18–21

ロン・ビガルケは、第一ヨハネの構造を狂信的であるとみなしました:[\[19\]](#)

- "A プロローグ: 永遠のいのち (1:1–4)
- B 3 人の証人 (1:5–2:2) (罪を否定することは神を嘘つきとみなすことです) (歩く)
- C 神の愛と信者 (2:3–17)
- D 偽キリストたち (2:18–27)
- E 信者の確信 (2:28–3:10) (罪を犯さない)
- F 愛は永続することが証明される (3:11–18)
- E' 信者の確信 (3:19–24) (神の命令を守る)
- D' 偽預言者たち (4:1–6)

C' 神の愛と信者 (4:7-21)

B' 三人の証人 (5:1-12) (イエスを否定することは神を嘘つきにすることです) (証言)

A' エピローグ:永遠のいのち (5:13-21)<sup>[20]</sup>

### メッセージ

この手紙のメッセージを一文に要約するなら、こうなります。「神との交わりは永遠の命の本質である」。パウロはピリピ人への手紙 3:7-14 で、彼の人生で最も重要なことは神との関係である、と書いています。ヨハネは、信者が神との交わりに感謝できるようにするために、またその交わりを深めるためにこの手紙を書きました。

「この手紙全体、『神との交わりへの入り口』を上書きするのは不適切ではないだろう。」<sup>[21]</sup>

ヨハネの福音書と第一ヨハネの手紙はどちらも永遠のいのちについて扱っています。<sup>[22]</sup>ヨハネが福音書を書いたのは、読者が「イエスが神の子キリストであること、そして信じることによってイエスの名において命を得ることができると信じられるように」するためでした(ヨハネ 20:31)。<sup>[23]</sup>ヨハネは、クリスチャンが使徒たち、父なる神、イエス・キリストと交わることができるようにこの手紙をクリスチャンに書きました(第一ヨハネ1:3)。彼は、私たちが持っている永遠のいのちの豊かさを経験するためにこの手紙を書きました(ヨハネ10:10参照)。しかし、この手紙の主題は永遠の命ではなく、神との交わりです。神との交わりは永遠の命の本質です(ヨハネ17:3参照)。

この手紙はイエスの屋上の部屋での談話(ヨハネ14-17章)から生まれました。同様に、ヤコブの手紙はイエスの山上の説教(マタイ5-7章)から生まれ、ペテロの最初の手紙はイエスの弟子論談(マタイ10章)から生まれ、黙示録はオリベット談話(マタイ10章)から生まれました。マタイ24-25)。屋上の部屋での談話では、イエスは使徒たちの内に住まわれるために聖霊を送った後、使徒たちと神との関係がどうなるかを説明されました(ヨハネ14:16-17)。ヨハネはこの手紙でその啓示を詳しく説明しました。

この手紙には、ヨハネが同義語として使用した用語がいくつかあります。それは、神との交わり、神を知る、神のうちにとどまる、神を見るということです。これらの用語はすべてクリスチャンの経験を表しています。それらはすべて、私たちと神との関係をあらゆる親密さの角度から説明しています。

私たちと人々の関係はさまざまです。より親密なものもあれば、それほど親密でないものもあります。神との交わりも、多かれ少なかれ親密さの問題です。私たちが交わりの中にいること、あるいは交わりから外れていることについて話すとき、私たちは神との関係を過度に単純

化しています。たとえば、子供と両親との交わりが完璧であるか、存在しないことはほとんどありません。通常はこれらの両極端の間のどこかにあり、日によって異なります。

ヨハネが書いた目的は、読者に神との親密さをさらに深めるよう促すことでした。親密な関係が深まれば深まるほど、私たちの交わりは深まり、経験的に神をより深く知ることができ、神の臨在のうちにさらに近くに留まることができます(ヨハネ14:21-24参照)。神との親密さが増すほど、私たちは永遠の命をより多く経験するようになります。すべてのクリスチャンは永遠のいのちを持っていますが、すべてのクリスチャンがそのいのちを、神が私たちに意図されたとおりに喜びを持って経験しているわけではありません(ヨハネ10:10)。同様に、生きているすべての人間には命がありますが、すべての人が豊かな人生を送っているわけではありません。

この手紙は、交わりの生活について2つのことを明らかにしています。第1に、この手紙はこの生活の源を明らかにしています。その源は2つあります：

最初の源は客観的です。神は交わりの生活の模範を備えておられ、その模範こそがイエス・キリストなのです。私たちはキリストにおいて、神の子としての私たちを特徴付ける神の特徴である二つの特質を体現しています：

これらの特質の最初のもものは光です。イエス・キリストは常に神の聖さの光の中を歩まれました(1:5-6;2:6)。彼は決して神から隠れることはありませんでした。彼はまた、神の意志の光に完全に従ったのです。彼は従順で、罪がなく、純粹で、聖別されました。これらの特徴の2番目は愛です。イエスも神の愛を常に表わされました(4:10参照)。イエスはご自身の態度と言動において常に完全な愛を示されました。彼の言葉と行為は神の愛の啓示でした。イエスはご自身よりも他人を優先されました。彼は神聖であると同時に無私でもありました。

この手紙によると、交わりの生活の第二の源は主観的なものです。神は交わりの生活の型を備えただけでなく、そのための力も備えてくださいました。イエス・キリストは、私たちが倣うべき外的な模範であるだけではありません。しかし、さらに役立つのは、神が私たちの内に置いた内なる力であり、私たちの生活の中で働いているということです。永遠の命によって、私たちはイエスを受け取ることができるのです(5:11-12)。そしてイエスと受け取ることにより、次の2つのことが起こります：

まず、光を手に入れます。私たちは今まで見たことのない霊的なものを見ます(2:20)。私たちはどのように歩むべきかが分かるようになります(2:27)。私たちは罪に対して敏感になります。第二に、私たちは愛を得ることができます。私たちは暗闇の中で手探りしている他の人々が必要としているのを見て、彼らに奉仕して手を差し伸べ、彼らを光の中に導きたいと願うようになります(4:7)。私たちが神の命を分かち合うとすぐに、私たちは神の愛を持って愛し始めるようになります。私たちは愛を鍛えることはできますが、永遠のいのちを持つ人は皆、自分の中に愛を持っています。

復習すると、この手紙は交わりの生活について 2 つのことを明らかにしています。1つは、この生活の源、つまり外側にみられる様子と内に働く力です。これらは両方ともイエス・キリストから来たものです。

この手紙はまた、神との親密な交わりの生活の結果を明らかにしています。これらも次の 2 つです：

まず第一に、クリスチャンにとって親密な交わりは価値があります。この価値は、神が人々に生きるよう意図したとおりの人生を私たちが実現するということです。私たちは、神が最初に人間を造られたときに意図したとおりの人生を体験することができます。私たちは、神との交わりの中で歩む(すなわち、神のうちにとどまる)度合いに応じて、人間としての可能性を発揮します。神との親密さは私たちの人格を完成させます。

そして第二に、神にとっても親密な交わりには価値があります。神は人々との交わりを楽しめます。神の創造と救いの目的は、人々と交わりを持つことでした。神は、ご自身と親密な交わりを持って歩むすべての人の中に、ご自身を明らかにできる人、つまりご自身の目的を達成できる道具を見出しておられるのです。忠実な信者は周囲の人々に神を明らかにします。神は、忠実な信者に懲らしめを与える必要はありませんが、彼らを通して他の人や自分自身を祝福することができます。

ヨハネはまた、読者に対し、交わりの生活における責任を果たすよう呼びかけました。光に関して、私たちには 2 つの責任があります：

まず、私たちは光に従わなければなりません(1:7)。それは、私たちが得た神のご意向を認識し、積極的に応えていくことを意味します。私たちは真実に対して冷淡になることがあります。霊的な事柄に多くの時間を費やしているとき、これは特に危険です。信者は神との関係を日々培う必要があります。私たちは皆、霊的生活の庭の草取りをし続ける必要があります。

第二に、私たちは光を求めなければなりません(1:9)。私たちは罪の闇を捨て、光の中を歩み続ける必要があります。神の光の輪が動くこともあるかもしれません。私たちは神の御心を新たに理解できるようになるかもしれません。それが起こったとき、私たちは神に従いその光の中へ入る必要があります(詩篇119:105参照)。

愛に関しても、私たちには次の 2 つの責任があります：

まず、私たちはその衝動に応じなければなりません。神がそうするようにわたしたちを動かされたときに、愛を表現しなければ、私たちの愛する能力が損なわれてしまう可能性があります。愛を差し伸べようという聖霊の促しに抵抗すると、私たちは失われた者たちに対する情熱を失ってしまう可能性があります。私たちは自分を優先するのではなく、犠牲を払う覚悟が必要です。しかし、愛の衝動に応じて他人に奉仕するなら、私たちの愛はさらに深まり、

強まります。愛を持って誰かに手を差し伸べるよう聖霊が促しているのであれば、私たちは聖霊を消してはいけません。

第二に、私たちは愛の聖さも守らなければなりません。私たちは偽りの慈善活動に注意する必要があります。真実の愛は原則を犠牲にすることは決してありません。神は決して光を犠牲にして愛されたわけではありません。愛は決して罪を正当化するものではありません。

結論として、私はこの手紙のメッセージを 2 つの応用例として提案したいと思います。1 つは個人に対するもの、もう 1 つは教会に対するものです。

まず最初に、私たち個人のクリスチャンに一つお願いしたいと思います。私たちは神との親密な交わりの中に生きているかどうかを簡単に試すことができます。あなたの人生にある光と愛をチェックしてください。聖い光ははっきりと輝いていますか、それとも暗闇の中を歩いていますか？あなたの愛はまだ明るく燃えていますか、それともあなたの人生は神の言葉を学ぶだけのレベルまで悪化してしまったでしょうか。学習は、生きること、つまり神との親密な交わりの中で生きることを目的とする手段の一つにすぎません。あなたは何で人々にあなたのことを覚えてもらいたいのですか？あなたの知識でしょうか、それとも愛ですか？第一コリント 13 章を考慮すると、私は自分の知識よりも愛によって覚えられたいのです。

第二に、イエス・キリストの教会として一つをお願いをしたいことがあります。私たちは自分の優先順位を神の優先順位と一致させる必要があります。親密さは神が私たちに与えられた目標です。神は妥協する多数の弟子よりも、少数の献身的な弟子を好みます(イエスの 12 弟子を参照)。神にとっては、大きな教会よりも純粋な教会の方が大切です。牧師は、会衆の規模を拡大するためだけに、光の中を歩み、愛のうちに歩むよう人々に勧めることをやめるべきではありません。牧師は奉仕活動に力を入れずに、できるだけ広く訴えかける必要があります。私がここで言っているのは、聖徒たちに装備を与えるという教会の奉仕のことで、福音を伝えるとき、私たちはできるだけ広く訴えるべきです。<sup>[24]</sup>

## 説明

### I. はじめに: 手紙の目的 1:1-4

「この文章は、第二と第三ヨハネに見られるような、手紙に特徴的な形式的な特徴をまったく欠いて始まります。結論にも手紙の典型的な特徴がまったく欠けているため、書面による説教や演説としてこの文章はあまり手紙ではないと結論付けなければなりません。」<sup>[25]</sup>

ヨハネはこの手紙を、なぜ自分が書いたのかを聴衆に説明することから始めました。以前は神を見たことのある人にしか不可能だった神との交わりを読者が楽しめるように書いた、と彼



は言いました。この交わりはイエス・キリストの受肉の現実に基づいており、それを経験する人々に完全な喜びをもたらすと彼は説明しました。

「新約聖書の中で、これほど強烈に受肉の完全な現実を保持している作家はいない。」[\[26\]](#)

1:1 始まり(ギリシア語アルケー)は、万物の始まり(2:13-14、ヨハネ1:1)、創造の始まり(3:8、創世記1:1)、またはイエスのことを指していると推定されます。受肉(2節、ヨハネ1:14参照)。また、イエスの地上での宣教の始まり(使徒1:22-24)、キリスト教の福音の始まり(マルコ1:1-4)、またはクリスチャンとしての読者の経験の始まりを指すこともあります(2:7、24; 3:11)。イエスの地上での宣教の始まり、特にイエスの教えの宣教の始まりは、ヨハネがその始まりについて語り続けたことと最も一致しているように思われます(1節b、3a節参照)。

「…彼[ヨハネ]は、人、つまりイエス・キリストという人に具現化されたメッセージを宣言しています。」[\[27\]](#)

「第一ヨハネ書[2:7、13、14、24(2回)、3:8、11、第二ヨハネ5、6参照]で頻繁に使われている『初めから』という表現は、大部分が、この教義は冒頭(2:7、24;3:11)で宣言されており、後に登場した異端の教師たちに対してではなく、読者がその教義に忠実であり続けるよう促すことを目的としている。」[\[28\]](#)

「人間にとっての霊的生命の源は、第一に、すべての生き物の自然的生命の源であったものである。ここにヨハネ神学の礎石がある。それは存在の連帯、見えるもの、見えないものの統一を前提としている。それは世界の二元論的で独断的な概念をすべて最初から排除する。」[\[29\]](#)

ヨハネはおそらく、使徒たちが最初にイエスの弟子になった時からイエスとともに経験したことすべてについて言及していたのででしょう。ヨハネの動詞(聞いた、見た、見た、触れた)は、調査対象に徐々に近づいていることを示しています。交わりの本質は親密さを増すことです。私たちと神との交わりは、真の交わりとなるために、神に近づき、常にもっと熱心に神を見つめることを必要とします。人間レベルでの交わりについても同様です。

「見ることは救い、見つめることは聖化する。」[\[30\]](#)

ヨハネは、彼の読者に自分が比喩的に話しているのではないことを理解してもらうために3つの基本的な感覚(聴覚、視覚、感覚)を使いました。対象の

現実を強調し、彼は個人的な経験を引用し、イエス・キリストの人間性を裏付ける検証可能な証拠を訴えました(ルカ24:39参照)。一部の偽教師はイエスの人間性を否定しました。[\[31\]](#)

「極端な独信主義[すなわち教義的グノーシス主義]は、イエスは決して人間の形として存在したのではなく、単に長期にわたる神教にすぎないと考えたが、穏健な教義主義[すなわちケリントスのグノーシス主義]は、イエスをヨセフとマリアの生みの子であり、洗礼の時にキリストが降臨したと考えた。」[\[32\]](#)

動詞の時制(ギリシャ語本文では完了形)から明らかなように、イエス・キリストとの個人的な出会いの具体的な事例(ルカ 24:39 参照)はヨハネに印象を残し続けました。

ヨハネは編集上、個人的に自分自身を表すために「私たち」を使用したと考えられます。あるいは、「私たち」にはすべてのキリスト教徒が含まれるとも考えられます。しかし、「私たち」はヨハネと他のイエス・キリストの目撃者、つまりイエスの使徒たちを表している可能性が高いです。[\[33\]](#)この手紙の中で、ヨハネは自分以外の人々に代わって語り、さらに他の信者たちに、彼ら全員が経験したり認めたりしたわけではないことを説得しようとしていました(ルカ1:2参照)。[\[34\]](#)

いのちのことばとは、おそらくイエス・キリストについてのメッセージ、すなわち福音を指しているのでしょう。[\[35\]](#)ヨハネは福音書の中でイエスをことばと呼び、イエスがいのちであると主張していると描写しました(ヨハネ14:6)。いのちのことばという言葉は、いのちそのもの、そしていのちを擬人化する人についてのメッセージを表す可能性が高いと思われます(2節、ピリピ2:16、使徒5:20参照)。ヨハネがキリストについて「彼」ではなく「何」と語ったのは、おそらくここで彼がキリストという人ではなくキリストについてのメッセージの内容を強調したいという意図からでしょう。

1:2           ヨハネの福音書における言葉と同様に、ここでのいのちはイエス・キリストの称号です(ヨハネ1:1)。「いのち」はヨハネがここで書いたクリスチャンの経験を反映しており、「ことば」(ギリシャ語ロゴス)はイエスが宣言し、ヨハネが第四福音書に記録した事実を反映しています。ヨハネの福音書では恵みと真実が御ことばを説明していますが(ヨハネ1:14)、光と愛は彼の書簡の中でいのちを明らかにしています。

1節の一連の動詞の進行(聞いた、見た、見つめた、触った)は、交わりの本質であるイエスに対する熱心な注意を反映しています。2節の動詞の進行(現れた、見た、証しする、伝える)は、イエス・キリストを熟考し、主との交わり

を楽しむこと、すなわち証しをすることの結果を示しています。人はまず、現れたキリストを見るのです。そして、見たので、その人は証言することができます。最後に、人は自分が見たものによって、人生のメッセージを他の人に伝えたいと思うようになります。

この聖句では、いのち(イエス・キリスト)の永遠性が強く強調されています。いのちの質(永遠)と御父との平等の強調がこの点を強調しています(ヨハネ 1:2 参照)。化身が見えてきました。

永遠のいのちは、この手紙の中で非常に主要なテーマであるため、ある作家は、第一ヨハネの注釈に「永遠のいのちの手紙」と題するほどでした。<sup>[36]</sup> ヨハネの著作では、永遠のいのちは救いと同義でもあります。<sup>[37]</sup>

1:3           この手紙の受取人である「あなたがた」は、ヨハネが彼らに言及した方法から考えると、真の信者であったに違いありません(2:12-14、21、27、5:13参照)。彼らは使徒たちとは異なり、生身のイエス・キリストを知りませんでした。ヨハネは、使徒の目撃者たちが楽しんでいたようなキリストとの親密な交わりに入り、それを楽しみ続けることができるように彼らに手紙を書きました(使徒10:40-41参照)。<sup>[38]</sup>

「この聖句は、この手紙の目的を紹介しています。『あなたがたも私たちと交わりを持つためです。そして、私たちの交わりは父とその御子イエス・キリストとのものです。』」<sup>[39]</sup>

「この手紙の主なテーマは神との交わりです。」<sup>[40]</sup>

「比較の基礎として重要なことは、第一ヨハネがさまざまな方法で自分の好みの考えを表現できることを認識することです。十分に一般的であり、1章3節と6節にしか見られない『神との交わりを持つこと』と並んで、次の1つが挙げられます。最も一般的なフレーズは、『神のうちにいる』(2:5;5:20)または『とどまる』(2:6、24;3:24;4:13、15、16)です。…ヨハネのみに見られる神との交わりのもう一つの表現は、『神(あるいは御子)を持つこと』です(第一ヨハネ2:23、5:12、第二ヨハネ9)。最後に、『神を知る』ということも同じこととなります。2:3 では完了時制で表現されます(2:5 を参照)。2:13、14(1:3 参照)も同じ意味です。」<sup>[41]</sup>

「ここで私たちは、何の躊躇もなく、キリスト教徒の生活の最高の善である説明を与えられます。実際、ここに、すべてのキリスト教的経験とすべてのキリスト教的努力の目的全体、究極、目標があります。これ

は、これは、いかなる疑問の余地もなく、キリスト教の福音とキリスト教の信仰の中心的なメッセージです。」[\[42\]](#)

親睦には、情報、共通の知識体系、およびそのデータの相互承認が必要であり、それに基づいています。ヨハネはこの情報を読者と共有するために手紙を書きました。

「したがって、当時の哲学的異端が曖昧にしたり否定したりしがちだった2つの基本的な真理が、ここでは冒頭で明確に述べられています。(1) 人格の区別と父と子の尊厳の平等。(2) 歴史上の人物イエス・キリストと永遠の神の子との同一性。」[\[43\]](#)

『交わり』という言葉をあたかも『クリスチャンであること』以上の意味であるかのように扱うのは、重大な解釈上の誤りである。」[\[44\]](#)

偽教師たちはイエス・キリストについての真実ではない情報を説いていました。ヨハネは彼らの欺瞞と戦うためにも書きました(2:26)。

「…この書簡は…著者が支持できない信念や実践を持つ人々の離脱(2:19)による影響に対処している信仰共同体に向けて書かれています。」[\[45\]](#)

「私たちがイエス・キリストのことを正しく考えるときにのみ、私たちは神と一致することができます。私たちが神のことを正しく考え、神に対して正しい態度をとっているときにのみ、私たちは互いに交わりを持つことができます。この条件においてのみ、私たちは世界の救いのために神と協力して何かを成し遂げることができます…」[\[46\]](#)

1:4           ここでの「私たち」はおそらく編集者です。「これらのこと」とは、ヨハネがこの手紙の中で書いたことを指します。彼の読者は完全な(完全な)喜びを経験するだけでなく、読者が神との親密な交わりに入り、それを継続するにつれて、ヨハネも同様に経験するでしょう(第三ヨハネ4章参照)。喜びは神との交わりから得られる産物です。喜びがなければ、交わりもありません(ヨハネ15:11、16:24参照)。

要約すると、ヨハネはイエス・キリストとその地上での宣教の使徒的目撃者として書きました。彼は、今日の教会に依然として蔓延している読者に対する2つの危険について指摘しました。1つは、キリストへの共通の信仰がなくてもクリスチャンの交わりは可能であるという思い込みです。もう一つは、イエス・キリストとの関係がなくても神との関係を築くことができるという仮定です。[\[47\]](#) ヨハネがこの手紙を書いたのは、受肉したキリストの使徒的目撃者たちがそ

うしたように、読者が神を見た者だけに可能となる神との交わりに加わり、継続できるようにするためでした。

「彼は牧師としての心を持っており、彼が責任を感じている人々が福音の完全な祝福を経験していない限り、完全に幸せになることはできない。」[\[48\]](#)

これらの節は、5章13節ではなく、この手紙の包括的な目的の記述を構成しています。第一ヨハネには 5 つの目的の記述 (1:3, 4; 2:1, 26; 5:13) と10の命令事項 (2:15, 24, 27, 28; 3:1, 7, 13; 4:1 [2 回]; 5:21) があります。そのどれもがヨハネが執筆した目的を提示していると推定できます。しかし、1章3節と4節には、彼の最も包括的な主目的と副次的目的が書かれています。[\[49\]](#)

「本の序文の中にその本の鍵が見つかるというのは通常真実です。この手紙の最初の 4 節で鍵が見つかることができます。」[\[50\]](#)

## II. 神との交わりの光の中で生きる 1:5–2:11

「使徒が表明した懸念は、読者が使徒仲間と、ひいては父と御子との交わりを持つかもしれないということなので(1:3)、この交わりが実際にどのようなものであるかを特定するのは理にかなっていません。ヨハネはその書簡の中で、神との真の交わりの性質について論じています。」[\[51\]](#)

### A. 神の光の中を歩むことで道を歩み続ける 1:5–2:2

ヨハネは、神に従い続けることの重要性を強調することで、神の交わりの光の中で歩む(生きる)とはどういうことかを説明し始めました。一部の律法主義者グノーシス派は知識が美德や道徳よりも優れていると信じており、ここでのヨハネの啓示はその誤りに反論しています。

「真の宗教の本質は、神との交わりである。したがって、多くの人があるような交わりを持っていると主張するが、特に、イエス・キリストが神の子であり、その血だけが神との交わりで私たちをその中に入れ、維持していることを否定する異端者はそうだ。」[\[52\]](#)

「読者が父と子との交わりを持ちたいのであれば(3節)、何がそれを可能にするのかを理解しなければなりません。読者は、神が自分のうちにどのような方であるのか、したがって神の被造物としての自分自身がどのような者であるのかを知らなければなりません。そこで著者は、まず神の道徳的性質を光の観点から説明し(5節)、次に自分の知識と神との交わりを誤って誇る人々の3つの主張を否定しています。偽物の立場とは、行動は神との関係における無関心の問題(6節);(2)神を知っている人にとって不道徳な行為は罪として問題にならない(8節);(3)神の知識は信者の人生の罪さえも取り除かれる(10 節)ということです。神との交わりや光の中を歩むことの真の「試

練」または証拠は(1)互いに交わり(7節)、その後のキリストの血による清め、(2)赦しと清めの両方をもたらす罪の告白(9節)、そして(3)もし私たちが罪を犯した場合、私たちの罪の代弁者であり犠牲であるイエス・キリストがいるという信頼です(2:2)。[53]

J.シドロー・バクスターは、この書簡の7つの対照に注目し、重要な条項は次のとおりであると信じていました:[54]

- ・ 光と闇 (1:5-2:11)
- ・ 父と世 (2:12-17)
- ・ キリスト対反キリスト (2:18-28)
- ・ 良い行いと悪い行い (2:29-3:24)
- ・ 聖霊対間違い (4:1-6)
- ・ 愛と敬虔なふり (4:7-21)
- ・ 神に生まれたものと他のもの (5:1-21)

1:5 この節は、その後の 6 節から 10 節の内容、そしてある意味では、この手紙の残りの部分全体の基礎となっています。シュナッヘンブルクはこれを1:6から2:17のメッセージとみなしました。[55] ヤーブローはこの聖句をこの書簡の主要な個所であるとみなしました。[56] これは、以下の 3 つの職業が満たさない基準を示しています。

「この聖句の単純な真実の知らせほど人間の心に安らぎを与えてくれるものはありません。」[57]

この聖句に示されているメッセージは、イエス・キリストが使徒の目撃者たちに明らかにした真理です。

ヨハネが神を説明するために用いた光の姿は、神が明らかにする能力と、神の聖性の光が明らかにするものに対処する神の能力の両方を強調しています(ヨハネ1:4-5、7-9、3:19-21、8:12; 9:5; 12:35-36、46; 黙示録21:23参照)。ヨハネは他の箇所でも、神を霊(ヨハネ4:24)として、また愛(第一ヨハネ4:8)として描写しました。神に関する 3つの比較はすべて、神の非物質性と本質を強調しています。神は罪を晒し、また罪を定められます(ヨハネ1:5; 3:19; 12:35 [2回]、および第一ヨハネ 1:5-6; 2:8-9、11 [2回] では闇と呼ばれています)。光の姿は、神の素晴らしさと栄光、神の真実さ、純粹さ、自己伝達的な性質(詩篇 27:1、36:9、イザヤ49:6、ヨハネ1:9参照)、神の特質を強調しています。イエスに力を与える活動(ヨハネ8:12; 12:35; エペソ5:8-14参照)と、要求する神の権利(ヨハネ3:19-21参照)。

「有限の理解を無限に超えていない神は神ではない。神を有限の思考の範囲に貶めることは、精神的な偶像を生み出すことである。」[58]

光と闇のモチーフは、ヨハネの時代のヘレニズムとユダヤ人の思想生活と文化の両方に共通していました。<sup>[59]</sup> ヨハネにとって、これらの概念は主に倫理的なものでした(エペソ 5:8-14 参照)。

「この比喩的な呼称[つまり光]が他の性質を含んでいても、それは明らかに知的で道徳的な、つまり啓発と聖さを含んでいます。光が明らかにし浄化するのと同じように、神はその本質によって、ご自身のもとに来る人々を照らし、浄化されます。神の性質 神との交わりの条件を決めるのです。」<sup>[60]</sup>

「神のうちに闇が存在しないように、闇に属するものはすべて神との交わりから排除される。」<sup>[61]</sup>

「すべての物質的な生命と成長が光に依存しているように、すべての霊的な生命と成長は神に依存している。」<sup>[62]</sup>

ヨハネは、ここで行ったように、自分の発言を実際ではないものとして言い換えることで、頻繁に明確にし、強調しました。

1:6           ヨハネは、偽教師の教えを代弁するために、6節、8節、10節の「言うなら」というフレーズを使ったのかもしれませんが。

「おそらく、これらの主張はヨハネが手紙を書いていた教会の人々の本当の発言であり、教会内で問題を引き起こしていた人々の見方を反映しているのでしょう。」<sup>[63]</sup>

無律法主義者のグループであるニコライ派はそのような主張をしました。<sup>[64]</sup> 現代において、聖書に表現されている神の御心を行うことは重要ではないと主張する人は誰でも、この主張をしています。

「ヨハネは、御子のうちに啓示された神の輝かしい性質に相応しい、あるいは相応しくない、人間の間違いや不正行為に対するアプローチについて読者に注意を喚起しようとしている。」<sup>[65]</sup>

ここでのヨハネの主張は、光(聖性)である神との交わりを公言しながら、神に従わない(闇の中を歩く)クリスチャンは嘘をついているということです。実践的な罪人は、神との関係を持つことはできますが(つまり、真のクリスチャンであること)、聖なる神との親密な交わりを持つことはできません。神は聖書を通してこの真理を明らかにされました。神との交わりを回復する必要がありますが、罪を犯すたびに神との関係を回復する必要はありません。キリストへの信仰は、私たちが神の子となり、永遠のいのちを得るという結果をもたらします。

行動、特に従順はヨハネにとって真の知識の非常に重要な部分であり、それは私たちにとっても同様であるに違いありません(ヤコブの手紙を参照)。

ここでフェローシップ(コイノニア)と訳されているギリシャ語は、2つ以上の当事者が共通のものを共有することを意味します。それは、個人が体験する救いを分かち合うという意味ではありません。

一部の解説者は、「神との交わりを持つ」や「光の中を歩む」という言葉を救いを説明するものとみなしています。[\[66\]](#)この見解の支持者は、クリスチャンが信仰を貫かないなら、その人はクリスチャンではないと言います。この解釈は、働くことで福音を遠回しにする可能性があります。

ある作家は、光の中を歩くことが御父に近づくための基準を表していると主張しました。この見解によれば、人が光の中を歩いているかどうかの基準は、良い行いではなく、ヨハネが光(啓示)と定義している、イエス・キリストによる帰属された義と罪の赦しの啓示を信じることです。このように、イエス・キリストを信じるなら、人は光の中を歩むこととなります。暗闇の中を歩く人はイエス・キリストを信じていないため、御父に近づくことができません。[\[67\]](#) 私はこの見解を支持しません。

ヨハネは以前、自分の目的はクリスチャンである読者(2:12-14、21、27)が、当時分かち合わなかった使徒の目撃者たちとの交わりを楽しむことであると述べました(3節)。

「…真の『交わり』はすべて使徒の教義に基づいています。」[\[68\]](#)

1:7 光の中を歩くとは、神の意志の光が規定する領域の中を歩くことを意味します。ここでの光とは、5節にあるように神そのものを意味するのではなく、神が生き、活動する領域を意味します。考え方は、どのように歩くかというよりも、どこを歩くかということです。もしヨハネが、光の中でではなく、光に従って言ったとしたら、神との交わりのために罪のない完全さを要求していたでしょう。私たちは、神のご意志についての知識が深まるにつれ、自分が持つ光に心を開いて反応しなければなりません。

「どうやってこれを行うのでしょうか?もし私が明るい部屋に入ってその中を歩き回るなら、私は光の中を歩いていることとなります。私は光が私だけでなく私の周りのすべてを照らしながら、その光が照らす球体の中を移動していることとなります。この聖句によれば、神は光であるだけでなく(5節)、神は光の中にいるので、光の中を歩むことができます。本質的には、神の臨在の中で生きること、神がご自身について明らかにしてくださったことにさらされて生きることを意味するに違い



ありません。これはもちろん、祈りにおいて率直に、また神が啓示される神の御言葉に対して心を開くことによって行われます。対照的に、『中を歩む』とは『暗闇』(6節)とは、神から身を隠し、神について私たちが知っていることを認めようとしません。』[\[69\]](#)

「[光の中を歩く]というのは…神が心に照らして下さる光に応答することです。それは、あらゆる罪が罪であると認識されたらすぐに告白するという態度です。このような告白はクリスチャンに神との道徳的合意を即座にもたらします。』[\[70\]](#)

文脈から考えると、「お互いに」は明らかに、仲間の信者と私たちではなく、神と私たちが指しています。私たちは神の宿る光を共有します。別の見方では、ヨハネは、他のクリスチャンとの交わりを無視すれば神との交わりを楽しむことはできない、ということを書いたかったのです。[\[71\]](#)

この聖句によれば、光の中を歩む信者には次の2つのことが同様に当てはまります。それは、私たちが神や他の人々との交わりを楽しんでいること、そしてすべての罪からの清めを経験していることです。

「これ(すべての罪)は人間の罪深い性質全般を指しますが、クリスチャンが『光の中で』生きているときにさえ起こり得る間違っただけの行為も含まれる場合があります。』[\[72\]](#)

「罪の赦しだけを考えるのではなく、罪を取り除くという考えです。罪は取り除かれ、浄化の働きが継続的に発揮されます。』[\[73\]](#)

神は、決して私たちが罪の罪に定めさせないという意味で、回心時に私たちが清められます(ローマ8:1、第一コリント6:11、エペソ1:7参照)。しかし、私たちは、罪深い日常生活がもたらす汚れから継続的に清められる必要があります。汚れは神との交わりを妨げるためです(ヨハネ13:10参照)。イエスの血はイエスの死の換喩です。[\[74\]](#)換喩とは、作家があるものの名前を、それに関連付けられた、またはそれによって示唆された別のものの名前として使用する比喩表現です。私たちが清めるのは、イエスの血の犠牲、つまりイエスの死の際に注がれる血の力です(ヘブル9:22参照)。何らかの魔法的で文字通りの清めのプロセスによって私たちが清めるのは、イエスの肉体的な血ではありません。

キリスト教徒の中には、イエスの肉体的な血が文字通り人間が罪を犯したときに清めるものであると信じている人もいますが、これは聖書では裏付けられていません。神の文字通りの血は天国に運ばれてそこに保管されており、そこから超自然的に信者に適用されると信じている人もいます。これは、ヘブル

語からの文字通りの解釈と推論に基づいた結論です。9:24-25、彼らが信じているこの一節は、イエスが文字通りの肉体の血とともに天国に入ったことを意味します。一方、霊的には、キリストの歴史的な肉体的な血の犠牲が信者を罪の汚れから清め続けており、この清めのプロセスは信者が神との交わりを続けるために絶対に必要であると信じています。

旧約聖書では、イスラエルの信者は神の前に霊的に清さを保つために繰り返し犠牲をささげなければなりませんでしたが、イエス・キリストの完全な犠牲は、光の中を歩む信者に対して永続的な(途切れることなく、途絶えることなく)効果をもたらします。

「ここでヨハネが念頭に置いているのは、ヘブル人への手紙(ヘブル人への手紙 9:14; 10:2, 22)で強く主張されており、ヘブル人への手紙の中で主導的な位置を占めている、罪悪感と道徳的汚れからの良心の浄化です。キリストの救いの自己犠牲がもたらす救いの恩恵です。」[\[75\]](#)

1:8 この2番目の主張(6節参照)はより深刻で、最初のものであり、その結果はさらに悪いものです。自分には罪がないと言うなら、私たちは嘘をついているだけではなく、自分自身を欺いているのです。6節の主張は神を私たちのレベルに引き下げようとしています。8節の主張は人間を神のレベルに引き上げようとしています。[\[76\]](#)

クリスチャンが神との交わりを楽しんでいると主張する場合、彼は自分には一時的または永続的に全く罪がないと考えるかもしれません。しかし、私たちの罪深さは罪深さの意識以上のものなのです。私たちが罪を犯している範囲については、非常に限られた認識しかありません。私たちは行為だけでなく思考の罪も犯します。任務だけでなく不作為の罪も犯します。また、自分の性質や行動から生じる罪も犯します。この聖句は、あらゆる形態の完璧主義の異端に対して警告しています。

「罪がない」という表現を、罪のない性質または罪のない原理を意味すると解釈する人もいます。[\[77\]](#)しかし、これはヨハネが罪を抱くという言葉を用法で使用したことと調和していないように思えます(ヨハネ15:22、24、19:11参照)。それはおそらく、罪に対する罪の意識を持たないことを意味します。[\[78\]](#)

聖書が明らかにしているように、私たちがこのように主張する場合、神の真理は私たちを完全に支配しているわけではなく、私たちの思考をコントロールしているわけではありません。「私たちの中に」は、私たちが事実を精神的に把握しているということではなく、事実が私たちをコントロールしていることを示唆しています。ポケットの中にペニー(1セント玉)が入っているのではなく、胃

の中にアルコールが入っているように、それらは私たちの中にあります。それらは私たちの行動に影響を与えます。救いの信仰と知的な同意の間にも同じ対照が存在します。

1:9           この節は8節の逆です。私たちが認識している罪を認めることは、罪を犯していないということと反対です。「告白(ホモロジオ)」と訳されているギリシャ語は、文字通り同じことを言うことを意味します。したがって、告白するということは、私たちの罪について、神が罪について語っているとおりになること、つまり、それは単なる間違い、失敗、誤りではなく、確かに罪であり、神に対する違反である、ということの意味します。ある学者は、これは公の告白であると書きました。<sup>[79]</sup>しかし、それを本文に読み込む正当な理由はないようです。

『自分の罪を告白し非難する者は、すでに神と共に行動している。神はあなたの罪を非難する。もしあなたも罪を非難するなら、あなたは神と結びついていることになる』とアウグスティヌスは言う。<sup>[80]</sup>

私たちが自分の罪を告白するなら、神は私たちが告白した罪を赦し、さらにあらゆる不義から私たちを清めてくださいます。したがって、私たちが気づいていない罪を神が赦してくださらなかったのではないかと心配する必要はありません。罪は神に対して負債を負いますが、赦し(ギリシャ語アフィエミ)は負債を帳消しにし、告発を却下します。罪は罪人をも汚しますが、神の浄め(カタリゾー)がその汚れを取り除き、私たちを再び聖なる者として下さるのです。神はご自身の正義にかなった赦しを確実に約束してくださいます(イエス・キリストが私たちの罪のすべてに対して刑罰を支払ってくださったからです)。

一部の解説者は、神はすでにクリスチャンを赦しているのです、この聖句はクリスチャンには適用できないと教えています。したがって、私たちはすでに持っているものを求める必要はありません。<sup>[81]</sup>この視点では、私たちが回心時に受け取る司法上の赦しと、回心後に必要となる家族の赦しを区別できません。たとえば、裁判官は法廷で自分の息子の罰金の支払いを受け入れ、法律の法的要求から息子を解放しても、家に帰っても息子を懲らしめることができます。イエスは信じる弟子たちに、裁判官ではなく父に赦しを請うように指示されました(マタイ6:12、ルカ11:4)。

神が回心の際に私たちの罪に対する罰を取り除いてくださったという事実(第一コリント6:11、エペソ1:7、4:32、コロサイ2:13)は、私たちの罪を頻繁に告白する必要性を取り除くわけではありません。繰り返しますが、問題は神に受け入れられることではなく、神との交わりです。改心(司法的、法医学的、立場上の)赦しによって、私たちは神の家族の一員として受け入れられるようにな

ります。継続的な(親、家族、実地的な)赦しによって、私たちは神の家族の中で神の子供としての親密な交わりを経験することができます。

「罪は交わりを中断するが、関係を変えることはできない。」[\[82\]](#)

「今述べた状況は、バラムの靈感による次の言葉に表現されているように、神がイスラエルを完全に受け入れたことに似ています。『神はヤコブの不正を観察しておらず、イスラエルの邪悪も見えていない』(民数記23:21)。しかし、実地的なレベルでは、イスラエルは失敗に満ちていました！」[\[83\]](#)

真実の告白をするには、告白には罪から離れる(悔い改め)ことが含まれなければならないのでしょうか？真実の告白には、私たちの罪について神と同じことを言うことが含まれるため、それには悔い改めが含まれていなければなりません。神は、罪は間違っているとだけ言われただけでなく、私たちが罪から立ち直るべきとも言われました。特定の罪行為に罪というレッテルを貼るだけでは、それについて神が言っているのと同じことを言っていることにはなりません。もし私たちが自分の罪について神が何とおっしゃっているのかを言いたいのであれば、その罪から目を背けると進んで言わなければなりません。

「神への、そしてお互いへの罪の告白(ヤコブ5:16)は、バプテスマのヨハネ(マルコ1:5)以降、新約聖書全体で勧められています。」[\[84\]](#)

「神に対して簡潔に報告しなさい。罪を告白するのに日曜日の朝まで待つのはいけません。」[\[85\]](#)

別の見方では、この聖句は真実の教師と偽教師を区別する方法を説明しているというものです。したがって、この聖句は約束ではなく、試練でもあります。この見解によれば、真の教師は罪を告白しますが、偽教師は罪を告白しません。[\[86\]](#) この解釈は、この手紙の主な目的は信頼できる教師を特定すること(2:26)と信者の信仰を確認すること(5:13)であるという確信から生じています。

1:10           ここでの誤った主張は、私たちが犯した罪は実際には罪ではないということです。これは3番目で最も重大な主張です(6、8節参照)。それは神の罪の啓示を脇に置いたまま、何が罪で何が罪ではないかについての権威を人々に与えているのです。この主張は、神は人間に対する判断を間違っており、したがって嘘つきであると言っていることになります。原告は神の御言葉を無効であるとして却下しています(例えば、詩篇14:3; イザヤ53:6; ヨハネ 2:24-25; ローマ3:23)。

6 節、8 節、10 節のこれら 3 つの誤った主張はそれぞれ、その直前の 5 節、7 節、9 節の真実の否定です。最初の 2 つの誤った主張のそれぞれに対する修正は、それらの主張の直後の節に続きます。

真実	虚偽の主張
神は光(5節)	たとえ暗闇の中を歩いていたとしても、私たちは神と交わることができる(6節)
光の中を歩むことは神との交わりのために必要(7節)	私たちは罪を犯しても罪はない(8節)
神との交わりを回復するには告白が必要(9節)	私たちは罪を犯していない(10節)

「クリスチャンの日常生活にとって第一ヨハネ1 章 5 節から 10 節以上により重要で基本的な聖書箇所を見つけるのは難しいでしょう。なぜなら、ここでは、いくつかの短い節で、『イエスが愛した弟子』が私たちのために捧げたものだからです。神との重要な歩みの基礎となる基本原則です。」[\[87\]](#)

「では、神との交わり原則とは何でしょうか？簡潔に言えば、それは神に対して心を開くこと、そして神の御言葉に照らした完全な誠実さです。」[\[88\]](#)

「キリスト教の宗教は罪人の宗教です。キリスト教徒の生活とは、絶えず悔い改め、救い主を信じ、感謝し、愛する生活です。」[\[89\]](#)

2:1 罪深い行為の必然性に関するヨハネのこれまでのコメント(6-10節)は、彼の読者を2つの結論に導いたかもしれません。私たちはこの世で罪を終えることは決してできないため罪と闘う努力は無駄だということ、または罪から逃げるといことです。罪から逃れるのはとても簡単なことなのに、いったいなぜわたしたちは罪に陥るのをおそれるのでしょうか？[\[90\]](#) ヨハネは、ここで読者たちに、決して罪を犯してほしくないと断言しました(ヨハネ 5:14 参照)。これはヨハネがこの手紙を書いた目的の 1 つであり、ヨハネの 5 つの目的表明のなかの 3 番目に当たります(1:3, 4 参照)。たとえそれが完全に可能ではないとしても、罪を避けることは重要です。

「これまでのところ、ヨハネの手紙はその目的を發表し(1:1-4)、光としての神の性質を肯定し(1:5)、キリスト教のコミュニティのための人生における神の性質の意味を探求し(1:6-10)、口と心から生じる適切な、または不適切な返答に焦点を当てています。この箇所 [2:1-8] では、ヨハネは、このような短い羅針盤の中に彼が築いた広く、しかし驚くほど深い基礎から生まれた数多くの痛切な訴えの最初のものを読者に直接向けています。」[\[91\]](#)

ヨハネは、ここで「子どもたち」と訳されているギリシャ語(テクニヤ)を、家族への愛情を表す言葉として使いました。それは生まれたばかりの子どもたちを意味します(2:12、28;3:7、18; 4:4; 5:21;ヨハネ13:33;ガラテヤ4:19参照)。「私の」はさらに優しさを加えています。(第1章の「私たち」の記述を比較してください。)これらの用語(「私の小さな子供たち」と「私」)は、受信者が必ずしもヨハネの個人的な改宗者であると結論付ける必要はありませんが、彼らは彼にとって非常に大切な人たちであることがわかります。この手紙は、彼らが成熟したクリスチャンであったことを示しているため、彼らは小アジアのさまざまな家庭教会の指導者であった可能性があります。

「第一ヨハネは家族の手紙であることを覚えておいてください。それは神の家族の関係を強調しているのです。」[\[92\]](#)

「罪を犯してはいけない」とは、二度と罪を犯してはいけないという意味ではありません。罪人にとって、たとえ赦された罪人であっても、罪を犯すことは避けられませんが、誘惑に遭うたびに、私たちがつまづかない可能性はあります(第一コリント10:13)。「If」は、議論のために起こると想定される条件(ギリシャ語の第3級条件)を導入しています。

私たちの人生が大きな問題や罪もなく順調に進んでいるとき、神との親密さをさらに深めようと努力するのは難しいことです。神との関係において、凡庸に満足するのは簡単です。しかし、神は私たちが、大きな失敗をせずに人生をうまく過ごせるほど神聖であるというだけでなく、神が聖であるのと同じように神聖であることを望んでおられます。人生の目標として聖さを追求するという志と能力を私たちに与えてくださるのは神だけです(ピリピ 2:13)。

イエス・キリストは私たちのとりなし手(法廷の友人、調停人、弁護人)として、父なる神の御前で罪を犯したクリスチャンの大義を弁護されます(ローマ8:34、ヘブル7:25、9:24参照)。この奉仕は、罪を犯した後に単に罪人を助けるといっても広いようです。それには、イエスがペテロの信仰がなくならないように祈ったときのように、必要なときはいつでも、罪人の大義を御父に訴えることが明らかに含まれています(ルカ22:31-32)。しかし、ここで強調されている

のは、私たちが罪を犯した後のイエス・キリストの助けです。イエス・キリストは義人であるため、神とともにおられる完全なとりなし手なのです(使徒3:14、7:52参照)。

「擁護者」と訳されたギリシャ語はパラクルトンで、英語に音訳するとパラクルテです。それは、他の人の側に助けを求められる人を意味します。イエスは上の部屋の談話で聖霊を説明するためにこの言葉を4回使用しました(ヨハネ14:16、26; 15:26; 16:7)。[\[93\]](#) 彼は聖霊を自分と同じ「もうひとりの助け主」と呼びました(ヨハネ14:16)。新約聖書の中でこのギリシャ語が登場するのはここだけです。

「デモステネスは、自発的に介入して裁判官に自分に有利な判決を下すよう個人的に促す被告人の友人を指すために、この言葉[パラクルトンという言葉]を使用しています。それがここでのこの言葉の意味です。なぜなら、「父とともに」と1章9節では、この事件の裁判官として神に言及しているからです。ヨハネ14:16、26; 15:26; 16:7、聖霊がパラクレテである場合、私たちには別のケースがあり、この用語は法医以外の、つまり私たちを助けに来る人の広い意味で使用されているからです。」[\[94\]](#)

「ここ地上では聖霊が私たちの慰め主であり、天ではキリストが私たちの慰め主です。」[\[95\]](#)

「この聖句の前半でヨハネは罪に対してあまりにも寛大な態度を期待しているが、後半では厳しすぎる見方の可能性に反論している。」[\[96\]](#)

「医師が患者にこう言うかもしれません。『あなたの悩みは頑固です。あなたの血液には毒があり、それを根絶するには長い時間がかかります。しかし、私はあなたを落胆させたり、あなたを不注意にするためにこれを言っているのではありません。逆に、あなたが注意を払い、療法の使用に熱心になるようにするためです。』」[\[97\]](#)

2:2 イエス・キリストは、祭司として私たちの罪をただ償ってくださっただけではありません。神ご自身が犠牲となって、ご自身を満足されるのです(ローマ 3:25 参照)。七十人訳聖書の翻訳者たちは、ここで「宥め」と訳されているのと同じギリシャ語(ヒラスモス、満足、4:10参照)を使って、契約の箱の上の慈悲の座を訳しました。イエスの遺体は、神が罪に対する怒りを鎮めた場所でした。1:5 — 2:2 節はすべて旧約聖書の幕屋を暗示しています。イエスの死は私たちの罪を消し去った(取り消され、却下され、免除された)だけでなく、汚れの清めをもたらし、罪に対する神の怒りを神に受け入れられる捧げ物によって満たしたのです。[\[98\]](#)

この聖句は、イエス・キリストがすべての人のために死なれた(無制限の贖罪)という事実を強く裏付けています。主イエスはご自分の死において、すべての人(「全世界」)にとって十分な救いを与えられましたが、それは主を信頼する人々にとってのみ効果的です(第二コリント5:14-15、19。ヘブル2:9;黙示録 22:17)。言い換えれば、キリストの死によって永遠のいのちがすべての人に与えられるようになりましたが、すべての人に自動的に与えられたわけではないということです。「私たちの」とはすべての信者の罪を指し、「全世界」とは選ばれた者だけではなく全人類を指しています(4:14、ヨハネ1:12、29、3:16参照)。<sup>[99]</sup> 特定の救い(または限定された贖い、つまりイエスが選ばれた者のためだけに死んだ)に固執する人々は、全世界の意味を選ばれた者だけの世界に限定しているのです。

「ヨハネ共同体の思想と用語には、『選民の世界』などという概念が入り込む余地は全くありません。』<sup>[100]</sup>

ヨハネはこの箇所(1:8-2:2)で、人生の中で罪と向き合うときにのみ神との交わりが可能であることを読者に思い出させました。これは信者(1:5-2:1)だけでなく未信者(2:2)にも当てはまります。ヨハネは、読者が神との交わりを体験しやすくするために、神との交わりの根底にある4つの基本原則を明確に述べました。人は罪を放棄し(1:8-2:2)、神に従い(2:3-11)、世俗性を拒否し(2:12-17)、神の臨在の光の中で生きるために信仰を保たなければなりません(2:18-29)。

## **B. 光の神を知ることによって目標に到達する 2:3-11**

「著者は、発展する異端的傾向への答えとして、教会の会員たちに、真のキリスト教の信仰と実践の性質、そしてそれらが相互作用する方法について説明しています。これを行うために、彼はまずテーマとして選び、勧告として次のことを選びました。『光の中で生きる』ことの必要性(1:5-7)、真にキリストのような存在に必要な最初の(否定的な)条件は、罪の放棄であると著者は示唆しています(1:8-2:2)。彼は今、(肯定的な)条件について議論し始めています:それは従順、特に愛の法則に対する従順です(2:3-11)。』<sup>[101]</sup>

「光の直接的な効果は罪を暴くことですが、その主な目的は義務を明らかにすることです。』<sup>[102]</sup>

ヨハネは神との交わりについてのコメントから、神を知ることについての議論に移りました。彼がそうしたのは、読者が神を知ること、そして神との親密な交わりを持つことの根本的な重要性を理解できるようにするためでした。これらの概念は事実上同義です。<sup>[103]</sup>ヨハネは、神との交わりについて述べたのと同じように、神を知ることについても言いました。神との交わりがよりと神についての知識の増加は切り離せないものです。神との交わりは常に神についてのより完全な知識につながるはずで、これがその結果であるはずで



交わり（ギリシャ語 koinonia）はあまり一般的ではない用語で、ヨハネ第一章には 1:3（2回）、6、7 の 4 回しか出てきません。Knowの方が一般的です。ジノスコ（経験的に知っている）は 24 回登場します： 2:3、4、5、13（2回）、14、18、29。 3:1（2回）、6、16、19、20、24； 4:2、6（2回）、7、8、13、16； 5:2、20。アイダ（知的知識）は 15 回出現します： 2:11、20、21（2回）、29。 3:2、5、14、15。 5:13、15（2回）、18、19、20。ヨハネはこの手紙の中でギノース（経験的知識）という名詞を使用しませんでした。

「再び反対派による知識に対する誤った主張が最初に述べられ、今回は『言う人』という条項が導入されています（4節、6節、9節を参照）。これらの主張はそれぞれ再び否定され、証拠または『テスト』が行われます。神についての真の知識は、神の命令に従い（5節）、神に似て歩み（6節）、兄弟を愛すること（10節）について述べられています。」[\[104\]](#)

2:3           ヨハネは、神についての経験的な知識（父と子、1:3）、つまり私たちがどれだけ神を本当に知っているかを測定できるテストを提案しました。彼はこう言いました。「神の明らかにされたみこころに対するあなたの反応を見てください。」あなたは神の戒めをどの程度守っていますか？神の戒めを守るということは、それを観察すること、あるいは擁護すること（ギリシャ語 tereo）を意味します。その反対は、それらを捨てることです（4節、3:22、5:3 参照）。言い換えれば、私たちは彼らに従うべきなのです。

「この国の医療患者の3分の1が医師の指示を無視していることを示す研究結果が南カリフォルニア大学から発表されました。…信者が神から命じられたことを行うという点で、状況はそれほど変わりません。」  
[\[105\]](#)

すべての信者はある程度神を知っています（ヨハネ17:3）。しかし、ある人たちは他の人よりも神をより完全かつ親密に知っています（ヨハネ14:7-9、21-23）。時々、長い間結婚していて離婚した人が、自分の配偶者について「私は彼女（または彼）のことをまったく知りませんでした」と言うことがあります。明らかに、彼らはある意味ではお互いを知っていましたが、お互いについての知識はそれほど完全でも親密でもなかったのです。ヨハネが言いたかったのは、神についての私たちの個人的な経験的知識が私たちの生き方に影響を与え、従順に生きているか不従順な人生を歩んでいるかということが、私たちがどのように神を本当に知っているかを明らかにすることでした。

「神を知るということは、単に哲学者が神を知っているように神を知ることではなく、友人が神を知っているように神を知ることであった。ヘブル語では、知るという言葉は夫と妻の関係、特に夫婦の関係について使われる。それは性行為のようにもっとも親密な関係をを表すときに使われることばである（創世記4:1参照）。」[\[106\]](#)

「この聖句は、私たちが本当に救われているかどうかを知る方法として受け取られることがよくあります。しかし、その見方は、すべてのヨハネ神学に直接当てはまります。それによると、私たちは永遠のいのちを得るためにキリストを信じることによって救われます(ヨハネ3:16); 5:24; 6:35 およびパッシム; 参考文献は数多くあります) … クリスチャンが本当に信じたかどうかを知らずにキリストを信じることができるという考えは完全にナンセンスです。私たちがこれを知ることができることは常識であり、完全に聖書的です[ヨハネ9:35-38;11:25-27参照]。

[107]

「したがって、第一ヨハネ2章3節が示唆するテストは、神やキリストについての救いの知識に関するものではなく、神とその御子に関する経験的な知識に関するものです。多くの解説者がそうしているように、これを誤解することは、次のような基礎を築くこととなります。この書簡の完全な誤読です! このような誤読は今日の注釈書では実際によく見られることであり、主にこの書簡に関するロバート・ローの研究に遡ることができます。」[108]

「神についての[経験的]知識のしるしは、神の命令への従順と、神がご自分の民に期待している生き方を認識することです。」[109]

「言い換えれば、神を『知る』ということは、正しい思考プロセスの問題ではなく、真の霊的な関係の問題なのです。神についての知識と神との交わりは、キリスト教の経験の補完的な側面です。」[110]

2:4           この聖句で取り上げられている告白は、文脈(1:6、8、10)に照らして考えると、明らかに神との密接な関係を持つことの別の主張であり、救われているという主張ではありません。[111]もしある人が神をよく知っていると言いながら、明らかにされた神の御心に従わないとしたら、その人は嘘をついていることとなります。彼は神を深く知らず、神との親密な関係もありません。さらに、神の真理は神の人生を支配する影響力を持ちません(1:8、10参照)。

「私たちはヨハネの話し方(つまり、彼の憎しみに聞こえる非難、例えば4:20)が好まないかもしれませんが、彼は単に、牧会の使者として、目覚めの呼びかけを必要としている神の民への神の目に映る事実を述べているだけなのかもしれません。」[112]

イエスはマタイ 23:13-33 とヨハネ 8:55 で同様の言葉を使い、ヨハネは 2 人の「雷の子」のうちの 1 人でした(マルコ 3:17)。

「…神の命令を守らない人は、たとえ口頭で何を主張しても、神を経験的に知っているわけではありません。」[\[113\]](#)

「聖ヨハネは、キリスト教の従順の規則にノモス[律法]という言葉を決して使いません。この言葉は、モーセの律法、ヨハネ1:17、45、および福音書の全15回において用意されています。しかし、ほとんどの場合、エントーライ[戒め]が使われます。」…[\[114\]](#)

4 節、6 節、9 節にはさらに 3 つの主張が含まれています (1:6、8、10 参照)。

主張	条件
私は主を知るようになった(4節、ヨハネ17:3参照)。	神は約束を守る(5節)
わたしは彼の内にとどまる(6節、ヨハネ15:4参照)	主はイエスが歩まれたように歩まれる(6節)
私は光の中にいる(9節、ヨハネ12:46参照)	彼は兄弟を愛している(10節)

「神を知ること、神の内にとどまること、そして光の中にいることについての3つの主張(神ご自身が光の中にいるのと同じように、7節)は、子を通して父と正しい関係にあるという1つの主張の並行バージョンです。」[\[115\]](#)

2:5a 一方、神の言葉すべて(戒めだけでなく、4節)を注意深く守るクリスチャンは、自分に対する神の愛を理解し、感謝するようになったという証拠を示しています。神の愛は、クリスチャンがそれを認識し、それに応答し、クリスチャンとして積極的に行動に意図移し効果をもたらしているという意味で、神の愛はその人の中で完全になるのです。ここでは、私たちに対する神の愛ではなく、神に対する私たちの愛が視野に入れられています(15節、4:12、5:3参照)。[\[116\]](#) 神を愛することは、神を知ることと平行しています(3-4節)。クリスチャンが単に神に従うことを超えて、神を喜ばせたいと願うとき、その人の中の神の愛は望ましい効果をもたらす、それは真に全うされるのです。

「…神の戒めを完全に守ることは、神への愛を全うすることです。」[\[117\]](#)

『神のうち(英語ではIn Him(彼の中))』(en auto)と言う表現は、パウロの『キリストのうちにある』(en Christo)という概念と同等ではありません。ヨハネ 13 章から 17 章(特に 15:1-8)にあるキリストの教えに照らすと、彼の中の言葉は、『永続的』な教師と弟子の関係を指します。』[\[118\]](#)

聖書研究者たちは、ヨハネが愛について頻繁に言及しているため、彼のことをよく愛の使徒と呼んでいます。ヨハネ第一には愛についての言及が46以上も出てきます。動詞「アガペー」はこれらの聖句の中で 28 回現れます: 2:10、15 (2 回)、3:10、11、14(2回)、18、23; 4:7(2回)、8、10(2回)、11(2回)、12、19(2回)、20(3回)、21(2回)。5:1(2回)、2(2回)。名詞「アガペー」は18 回出現します: 2:5、15。3:1、16、17;4:7、8、9、10、12、16(3回)、17、18(3回)。5:3。同様に、多くの人々がパウロを信仰の使徒と呼び、その主な強調の理由から、ペテロを希望の使徒と呼んできました。

「キリストへの愛と主の言葉に従うことは、多くの人によって繰り返し主張されていることですが、それらは決して信仰を救うための試練ではありません。むしろ、それらはイエスに対する真の心からの弟子であることを試すテストなのです。』[\[119\]](#)

2:5b-6 ヨハネが用いた「神のうちに(英語ではin Him)」と言う表現は、パウロが記した「キリストのうちに(英語ではIn Christ)」と言う表現とは異なります。パウロはこの言葉を使って、すべての信者と自分の義によるキリストとの関係を説明しました。救われていない人はキリストのうちにいません。しかし、ヨハネは、二階の部屋の談話でイエスと同じように、すべての信者ではなく、キリストにとどまる信者のグループを説明するために、イエスと同じように「キリスト」を使いました(ヨハネ15:1-8)。ヨハネ 15:8 でイエスは、「あなたがたが多くの実を結び、わたしの弟子であることを証明することで、わたしの父は栄光を受ける」と言われました。彼は「だから、信者であることを証明しなさい」とは言いませんでした。イエスは、ご自分の戒めに従うことと、ご自身の愛にとどまることを結びつけました(ヨハネ15:10)。

「したがって、彼の内に『とどまる』かどうかの試練は、以前と同様に、主張者が神に従順な人生を送っているかどうかである。』[\[120\]](#)

キリストのうちにとどまるという用語や表現は、神との交わりや経験的に神を知るという用語と同様に、神との親密な関係を持つことと同義です。ヨハネが言いたかったのは、イエス・キリストが神のうちに住み、御父に従うことによってその証拠を示されたのと同じように、神のうちに住む信仰者は神に従うということでした。ヨハネは、「とどまる」(ギリシャ語 μένω)と訳された言葉を第一ヨハネで

24回使用しました(2:6、10、14、17、19、24[3回]、27[2回]、28; 3:6、9、14、15)、17、24 [2回]、4:12、13、15、16 [3回])。これは、この手紙において信者の永続的な関係が大きく強調されていることを示しています。

残念ながら、NASB (2020 年版) の翻訳者は、ギリシャ語のメノを「存続」ではなく「残留」と訳しました。これは、クリスチャンは神との緊密な関係を築く必要があるというよりも、単にありのままに在ることが必要であることを意味します。

すべてのクリスチャンの義務は、神の命令に従うこと(4-5節)だけでなく、神が歩まれたのと同じように歩むこと、つまり神の御子の模範に従うこと(6節)でもあります。

「私たちが神のように行動しない限り、神のうちにとどまると主張することはできません。」[\[121\]](#)

「キリストが歩まれたように歩むことは、私たち自身の力では達成できないことです。それは超自然的なことです。[神の助けなしには]人がキリストに倣うことは不可能です。」[\[122\]](#)

むしろ、私たちはキリストが私たちを通してご自身の命を現わすことを許さなければなりません。

「ヨハネ共同体の模倣とは、弟子として、完全に献身的に支持する者また取りなす者として従うことを意味します。」[\[123\]](#)

次の数節は、キリストのように行動するとはどういうことかを説明します。

2:7           ヨハネが 3 節と 4 節を書いたとき、他にどんな戒めが考えられるでしょうか？彼はこの節で、読者が馴染みのない新たな責任については言及していないと説明しました。彼は、彼らがクリスチャンとしての経験の初めから知っていた古い戒めについて言及しました(すなわち、互いに愛しなさいという戒め、9-11節、ヨハネ13:34-35参照)。[\[124\]](#)互いに愛しなさいという命令は、新約聖書の中に少なくとも十数回出てきます。ヨハネ13:34;15:9、12、17;ローマ人への手紙 13:8。第一テサロニケ4:9。第一ペテロ1:22;第一ヨハネ 3:11、23;4:7、11-12。そして第二ヨハネ5。

「キリストの生涯は自己犠牲の愛の生涯でした。したがって、キリストに倣うことの証拠は愛の中に表れます。愛とは、愛する人の中に最高の善を求めるものです。そして最高の善は神の御心であるため、愛は神の御心を行っているのです。」[\[125\]](#)

2:8           しかし、別の意味では、この古い戒めは新しいものでした(文字通り、新鮮、カイノス神)。ヨハネは、この手紙の中で、黒か白のコントラスト(のどちらか)という言葉でよく書きましたが、7節と8節では、両方と、そしてについて述べています。受肉により、神の光はかつてないほどに明るく世界に現れました(ヘブル人への手紙1:1-3)。古い戒めは、イエスが発足させた新しい時代に属するという点で新しいものなのです(ヨハネ14:6)。

「それは最近の革新ではありませんが、キリストにあって経験されたように質的に新しいものです。」[\[126\]](#)

新しい命令は、この意味でキリストとクリスチャンにおいて真実です(ギリシャ語アレーテス、啓示)。イエス・キリストがまず初めに御父への従順を実証され、そして今、クリスチャンの神への従順がそれを実証しています。キリスト教の愛は、それを模範としたイエスと、その模範に従う弟子たちの両方に現れる真理なのです。

この真の光(キリストの福音)は罪の闇を消し去り、その光が最終的に増加して闇が完全に消滅するまで、それは続きます。イエス・キリストがその偉大な戒めを新たに発布されたとき、神は以前にそれを与えられていたにもかかわらず、それを新しい命令と呼びました(レビ記19:18)。そして、キリストが世の光として来られたことにより、それは新しい意味で重要な戒めとなったのです(ヨハネ13:34-35)。

2:9           この聖句には、ヨハネが話していたことの具体的な例が含まれています。それは人の行動によってそれが偽りであることが明らかになるという神との親密な交わりについてのもう一つの主張です(1:6、8、10;2:4、6)。他のクリスチャンに対する憎しみは、その人が神との緊密な交わりの中で歩んでいないことの確かな兆候です。

明らかに、本物のクリスチャンであっても他のクリスチャンを憎むことはあります。一部の解説者のように、憎んでいるのは未信者に違いないと主張するのは未熟な考え方です。ヨハネは憎む者と憎まれる者を兄弟とみなしました。この手紙ではクリスチャンの共同体が視野に入れられているため、ヨハネは救われていない隣人というよりはむしろ兄弟クリスチャンを意味していました。

[\[127\]](#)

「もし聖書が憎しみの感情は救われていない状態の確かな兆候であると教えているなら、実質的に教会全体で救われる人は誰もいません。しかし聖書はそのような教えをしていません。」[\[128\]](#)

しかし、ヨハネは、イエスが時々言っていたように、比較的な意味で憎しみについて語っていた可能性があります(マタイ6:24;24:10;ルカ14:26;16:13;申命記21:15-17;第二サムエル19:7;箴言13:24;マラキ1:2-3;ローマ9:12参照)。大袈裟に言うならば、愛を示さないことは憎しみを示すことと同じです。  
[129]

この主張をする人は闇の中にいます。そのような人は光である神との親密な交わりを楽しんでいるとは言えません。「今まで」ということは、この状態が終わる可能性があることを意味します。

2:10 「…自分の兄弟を愛している人は光の中に留まり、光の中にいれば自分がどこへ行くのかが分かるので、絶えず誘惑に負けることを避け、また(結果として)他の人をつまずかせることも避けることができる。」[130]

「…福音の光は理解を照らすだけでなく、心を温め愛へと導く。」[131]

「愛の欠乏は、最も多くの犯罪の源である。」[132]

この聖句におけるつまずきの原因は心の中の憎しみです。憎しみは、憎む人を神と歩む上でつまずかせる原因となります(ヨハネ11:9参照)。

2:11 憎む人の罪は、次の3つの方法でその人に影響を与えます。(1)その罪はその人を暗闇の中に閉じ込め、神の交わりから外します。(2)それは目的のない行動に導き、そこでその人は非常に大きな霊的危険にさらされ、つまずく可能性があります(ヨハネ9:41参照)。(3)それはまた、精神的な混乱を招きます(ヨハネ12:35参照)。兄弟を憎むクリスチャンは、部分的または全体的に、人生における霊的な方向性の感覚を失います。クリスチャンにとって、他のクリスチャンに対する憎しみを持つ人生ほど危険な人生はありません。

「ヨハネは、誰かが暗闇の中を歩いていると言うことで、その人の倫理的、精神的な生活が暗くなるということの意味している。」[133]

「暗闇の中で生きることの罰は、単にものが見えないというだけではなく、失明するということだ。」[134]

ヨハネは、人が人生において罪を放棄し(1:5-2:2)、神に従順である場合にのみ、神との親密な交わりが可能であると主張しました(2:3-11)。

### III. 敵に抵抗する 2:12-27

「この箇所では…ヨハネは修正主義者たち[誤った教義を教えていた読者の人々]に対して直接言及しています。そうすることで彼はこの書簡の全体的な目的を明らかにしています。これらの「反キリスト」が現れたことがこの手紙に記されています。適切に言うならば、使徒たちは、読者が神との継続的な交わりが脅威に晒されることを心配していました(1:3参照)。もちろん、読者がどれほど誤解されようとも、彼らの永遠の救いが危険に侵されることはありませんでした。しかしこれから先の内容で、彼らの救いの保証が脅威さらされたことことをみていきます。」[\[135\]](#)

### A. 霊的な進歩に感謝する 2:12-14

ヨハネは手紙のこの部分を、読者の霊的能力を肯定することから始めました。ヨハネは神との親密な交わりを育むよう励ますために、彼らに霊的な祝福を思い出させました。

「12節から14節は、ヨハネが読者を『偽者の教授』とみなしていないことを明らかに示しています。この手紙が人の救いの真偽を判断するための「テスト」を提示しているとするならば、この手紙を誤って解釈していることになります。」[\[136\]](#)

「彼の読者はクリスチャンであり、彼らの信仰の力を部分的に経験しているので、彼は彼らをより高みを目指すように駆り立てているのです。彼の目的は、彼らの『喜びが満ちあふれる』ことです(1.4参照)。」[\[137\]](#)

このペリコープ(テキストの箇所)には、3つの文からなる2つのシリーズが含まれています。それぞれの文は「私があなたに手紙を書いているのは...からです」と言う表現で記されています。

2:12-13b ヨハネは、幼い子どもたち、父親、若者の読者に呼びかけたとき、誰を念頭に置いていたのでしょうか？おそらく彼は、物理的にこれらのカテゴリーに当てはまる人々のことを指していたのでしょう。もしそうなら、彼の女性の読者や、これらのカテゴリーに属さない他の読者はどうなるのでしょうか？

おそらく彼は、霊的に成長中の子供、男性、若者である聴衆のことを考えていたのでしょう。[\[138\]](#)これが彼が言いたかったことであるなら、なぜ彼はこの不自然な順序で彼らに話しかけたのでしょうか？最初の可能性についても同じ質問をすることができます。

おそらくヨハネは、最初にすべての読者を幼い子どもたちとみなして語りかけ(1、28節、3:7、18節、4:4、5:21節、ヨハネ21:5参照)、その後、より成熟した人々、年配者(父親)、そして最後に未だ成熟段階にある人々または年下の人々(若者)に対して具体的に話していたのでしょう。[\[139\]](#)しかし、彼が3つのグループに対して言ったことは非常に類似しているため、彼が3つの異なるグループに対して話している可能性の方が高いと思われます。



おそらくヨハネは、すべての信者を特徴づけるべき各年齢層に典型的な特質を説明するために、人生のこれらの 3 つの段階を使用したのかもしれませんが。<sup>[140]</sup>彼は、読者の中の子どもたち(新しい信者)、父親(成熟した信者)、そして若い男性(未熟だが新しい信者ではない人々)に霊的成長の観点から話しかけていたのだと考えられます。

もう1つの問題は、ヨハネが、述べられた条件が各グループに当てはまるから書いたということなのか、それともその条件が各グループに当てはまるようになるために書いたのかということです。ギリシャ語の助詞「hoti」は、因果関係と宣言的意味のいずれかを持ち、ヨハネは両方の意味を意図していた可能性があります。ただし、因果関係の意味がもう少し強いように思えます。<sup>[141]</sup>

ヨハネの読者の中の霊的な子どもたち(新しい信者)は、天の父からの赦しを知っていました(1:5-2:2参照)。新しい信者が自分の救いについてまず最初に感謝することの 1 つは、赦しです。

父親たちはイエス・キリストを通して神との交わりを経験していました(2:3-11参照)。父親とは、他の人を信仰に導き、したがって彼らの霊的な父親となったクリスチャンではなく、キリストと何らかの交わりを持った人を意味します(ヨハネ1:1参照)。

読者の中の霊的に若い男性たちは、霊的な敵であるサタンに対してある程度の勝利を収めたことを知っていました(2:15-23参照)。<sup>[142]</sup>

ヨハネは、これら3つの経験を、クリスチャン生活における適切な経験に順序として言及しました。つまり、クリスチャンは通常、新しい信者として赦しに感謝し、次にキリストとの交わりに感謝し、そして悪に打ち勝つのです。

「父親に続いて若者という呼称が付けられているのは、読者が幼子として(罪の赦しの)父親として(神の知識の)貴重な経験をすることで、サタンと戦う準備ができた精力的な若者となるからである。」<sup>[143]</sup>

2:13c-14 次に、同じ 3 つの人生を段階を用いて読者の進歩を説明することで、ヨハネは読者の他の特徴を再度指摘しました。おそらくヨハネは、読者の信仰の成長と強さに気づいていることを読者に確かにするために、一連の記述を繰り返したのでしょう。そうすれば彼らも勇気づけられるでしょう。

最初の 3 つのシリーズ(12-13b 節)で、わたしたちは霊的成長の各段階における最小限の霊的経験をします。3つのシリーズの2つ目(13c-14 節)で、各段階でさらに高度な霊的体験をします。霊的に幼い子どもたち(ギリシャ語、テクニオン、生まれたての子どもたち)は、神が自分たちの罪を赦してく

ださったことを知っています。しかし、子どもたち(ギリシャ語でパイディオン、教わった者たち)は、御父をさらに親密に知っていきながら歩むことができるようになります。ヨハネは、読者の中の新しいクリスチャンは、神が自分たちの罪を赦してくださったことをただ感謝をしながら進歩している、とほのめかしました。彼らは教えられ、経験の中で父なる神をある程度知ることを学んできました。

父親についての二つの記述は同じです。なぜなら、ここにはバリエーションがないからです。キリストを知ったとき、前進するためにできる唯一のことは、キリストをより深く知ることです。

ヨハネは当初、若者たちが悪者を倒したと言っていましたが、勝利を得た後の彼らの状態については何も語りませんでした。彼らは弱くなり、脆弱になってしまったのかもしれませんが。しかし、彼らについての2つ目の記述では、彼らは強く、神の言葉は彼らの中に住み続けていたと付け加えられています。これはより強固な霊的状态です。彼らは神の言葉に留まることで強くなったのです。

ヨハネは、次の方法でこれらの聖句の進歩の感覚を強調しました。彼は最初の文のかたまり(12-13b 節)では現在形の動詞を使用し、進行中の行動を強調しました。次に、2つめの文のかたまり(13c-14 節)では、霊的により成熟した状態を暗示するアオリストの時制動詞を使用しました。

「ヨハネの主要な著作すべてにおいて、福音書(ヨハネ16:33)、第一の手紙(第一ヨハネ 4:4; 5:4-5)および黙示録(黙示録 2:7, 11, 17, 26; 3:5, 12, 21; 5:5; 12:11; 15:2; 21:7)同様に、克服というテーマは現在形であり、すべてにおいて、最高の勝利者であるキリストを通してその民は打ち勝つことができます。」[\[144\]](#)

新約聖書には動詞ニカン(打ち勝つ、征服する)が28回出てきますが、そのうち24回はヨハネの著作にあり、名詞ニケ(勝利)は新約聖書の5章4節にのみ登場します。したがって、勝利はヨハネ共同体にみられる独特の称号なのです。[\[145\]](#)

この節の節でヨハネは、読者が全員未熟であるとか、全員が成熟していると言っているのではありません。イエスは、彼らが主をより深く知り、主とのより親密な交わりを追求するよう励ますために、彼らの霊的な状態と進歩を認めていたのです。

前に述べたように、ヨハネがこの手紙を書いたのは、読者が自分たちが真の信者であるかどうかを判断できるようにするためだという解釈が多くの注釈者が主張する第一ヨハネの一般的な解釈です。ヨハネが手紙全体を通して提起した質問は、「[霊的に存在するかどうか

の]人生のテスト」だったと彼らは言います。<sup>[146]</sup>しかし、今考察した聖句(12-14節)では、ヨハネは読者の救いを試すために書いているとは言っていません。彼は、彼らが本物の信者であったから手紙を書いたと言っていたのです。ヨハネは、再生の試練ではなく、交わりの試練を読者に問いかけてました。

「ヨハネの最初の手紙に対して、[人生の試練のアプローチよりも]絶望的に見当違いの、または完全に自滅的なアプローチを考案するのは難しいでしょう。もしこのアプローチの基礎となっている前提が真実であるならば、それは第一ヨハネの最初の読者、その後の世代の読者のどちらにとっても救いの確信を持つことはまったく不可能でしょう。著者ヨハネはキリストの命令への従順によって特徴づけられる「永続する」人生を繰り返し命じているので、課されたことに従順であったか、また耐え忍ぶことができたか、ということは地上での経験が終わるまで本当の確信が持てないのです。一方で、わたしたちは彼が自分が偽りのキリスト教徒であった可能性があることも考えなくてははいけません。現代の解説でこれほど露骨な間違いはほとんどありません。ヨハネは、読者が救われたかどうかを「試す」ために書いているとは言っていないだけでなく、[1:3-4で]その逆のことを言っているのです！」<sup>[147]</sup>

## **B. 霊的な敵対者を認識する 2:15-27**

ヨハネは、読者の霊的状态が非常に良好であると断言して読者を励まし(2:12-14)、次に直面しなければならない敵、すなわち世(2:15-17)と反キリスト(2:18-27)に目を向けました。

### **1. 世に打ち勝った 2:15-17**

「御父を愛せよ」(5節)、『兄弟たちを愛せよ』(9節から11節)は聖ヨハネの勧告の要約であり、『世を愛するな』は彼の警告と戒めの鍵となる言葉である。〔否定的な勧告〕。<sup>[148]</sup>

ヨハネは、クリスチャンが神をよりよく知ろうとするときに直面する世俗的な危険について読者に注意を促しました。彼がそうしたのは、彼らが神の助けを得てこれらの障害に備え、克服できるようにするためでした。

「著者は、読者が神との交わりを持っていると確信しています。わたしたちが恵みの中に生きていることを読者に力強く伝えることで彼らを安心させています。しかし同時に、読者が依然としてこの世からの誘惑にさらされていることにも注意を向けています。」<sup>[149]</sup>

「第一ヨハネではよくあることですが、パレネシス(読者がすでに知っていたこと、行っていたこと、あるいは避けるべきだと分かっていたことを思い出させるもの)の箇所は、一連の独断的な記述の後に続きます。」<sup>[150]</sup>

新約聖書では、世界（ギリシャ語 kosmos）という用語が少なくとも 3 つの方法で使用されています。場合によっては、世界は惑星地球、物理的な世界を指します（例：使徒17:24）。時にはそれは人類、人間の世界を指します（例：ヨハネ3:16）。また時にはサタンの影響を受けた人間の文化、つまり世の中のシステムを指します。ヨハネはここでこの言葉を三つ目の意味で使いました。

ヨハネは、12節から14節で行ったように、再び3組のペアを提示しました。

15節 世の愛…	御父の愛…
16節 …世から来る	御父から来る
17節 世は過ぎ去る	神に従う者は永遠に生き続ける

2:15           ギリシャ語の否定的な禁止「me」は、現在能動的命令動詞とともに発生し、何かをするのをやめる、またはそれをする習慣がないことを意味します。世界（コスモス）は、神を除いた不信者の価値観、優先順位、信念の体系を表します（ヨハネ14:30、ガラテヤ 6:14、エペソ 2:2、第二ペテロ 2:20 参照）。この文脈では、それは神が愛する創造の世界や人間の世界一般を指すものではありません（ヨハネ3:16）。

「彼[ヨハネ]にとって宇宙とは、人類の情勢に広く普及している霊的および道徳的秩序を意味する。そしてこの事物の体制は神に敵対し、神の愛から離れており、したがって根本的に悪であり、滅びる運命にある。」[\[151\]](#)

「世とは、神に敵対する組織システムである。」[\[152\]](#)

世は人々を神を私たちから引き離すために作られた道徳的かつ精神的なシステムです。それは、信者だけに限らず未信者も含めて、すべての人々を魅惑する制度であり、私たちの愛情、参加、忠誠を求めています（ヨハネ 3:16-17、18-19; ヤコブ 4:4 参照）。サタンはこのシステムを支配しており、信者はそこを避けるべきです（5:19、ヨハネ12:31、14:30参照）。すでに述べたように、ここでのコスモスは主に創造された秩序を指しているわけではありません。しかしその秩序も過ぎ去りつつあります（第一コリント7:31; 第二ペテロ 3:7-13; 黙示録21:1-4）。[\[153\]](#)

「世に敵対しているのは御父です（第一ヨハネ 2:15）。…肉に敵対しているのは御霊です（ガラテヤ5:16、25; ローマ8:12、13）。サタン、つ

まり反キリストに敵対しているのはキリストです(第一ヨハネ 3:8; ヘブル 2:14,15; 第一ヨハネ 4:2,3)。[154]

「もし」は、一部のキリスト教徒が世界を愛するだろうと仮定している表ですが(ギリシャ語で三級条件)、残念ながら現実的に当てはまっていることが多いです。「この世の何がそんなに悪いのですか?」という多く人からの質問に、ある作家は答えました。[155]

御父の愛とはおそらく、信者の御父に対する愛(客観的属格)であり、私たちに對する御父の愛(主観的属格)ではありません。[156]「彼の中で」は、やはり支配的な影響を反映しています(1:8、2:4参照)。

2:16 ヨハネは、世界システムの魅力を 3 つにまとめました。これは地獄の三位一体、世界の 3 つの顔、世俗的な誘惑の 3 つの源の図です(創世記 3 章、マタイ 4 章を参照)。情欲は渴望または欲望であり、文脈的には神の意志と調和しないため悪です。

肉の欲望とは、神の御心から離れて何かをしたいという欲望です。それには、すべての墮落した肉体的欲望と、人々の罪深い心に訴えるあらゆる罪深い行為が含まれます。目の欲望とは、神の意志とは別に何かを手に入れたいという欲望です。私たちの感覚に訴えかけるものであっても、私たちが望んだり手に入れたりするのに適切ではないものはすべて、このカテゴリーに当てはまります。人生の高ぶりとは、神の意志から離れた何かになりたいという願望です。それは地上の事柄において高慢なふりをするを指します。

最初の欲望は主に身体に訴え、2 番目は魂(精神または知性)に訴え、3 番目は霊に訴えます。おそらく、現代西洋文明における肉の欲望の最も一般的な現れは、不法なセックス(快樂主義、快樂の偶像化)です。おそらく、目の欲望の最も一般的な現れは、過剰な購入(物質主義、所有物の偶像化)です。おそらく、人生の傲慢さの最も一般的な現れは、人々、周りの状況、歴史、さらには神さえもコントロールしようとすることです(エゴイズム、権力の偶像化)。

「したがって、肉の欲望とは、私たちの人間性の内的圧力によって引き起こされるような欲望を意味します。目の欲望は、外部の物体や人によって私たちの中に引き起こされる欲望を意味します。人生の自慢は、所有物や力から来る傲慢さを示します」[157]

マシュー・ヘンリーは、肉の欲望を贅沢、目の欲望を貪欲、人生の自慢を野心と呼びました。[158]ゼーン・ホッジスは、肉体の欲望を「人々の罪深い心に訴えかけるあらゆる違法な身体活動」、目の欲望を「視覚的に魅力的である

が、欲望したり入手したりするのに適切ではないもの」、そして人生の誇りを「無駄な誇示」と定義しました。地上の生活の…(傲慢さ、見栄、または自己、所有物、業績についての自慢)。」[159]

「人間が感じる『欲求』は、大きく2つの種類に分けることができます。人間が個人的に利用したいと望むこと、そしてもう一つは他人を利用することなく楽しみたいと思うことです。肉体の欲求には 1 つの種類(食欲の充足など)が含まれます;他者の目の欲求(例えば、目的としての芸術の追求)。」[160]

「高慢は、私たちに神への依存を忘れさせ、自己賛美に導く倒錯した心の態度です。同時に、それは人々が仲間に注意を払うことから遠ざけるものです。」[161]

『人生の自慢』は、自身にとって重要なステータスの象徴や、自分のアイデンティティを定義するものに反映されます。私が名誉(または取得した)学位、私が仕えている教会の評判、年収、蔵書の大きさ、高価な車や家などの観点から他人に自分自身を定義するならば、そしてもしそうすることで真実を偽り、自慢することによって自分が誰も騙したことのない尊大な愚か者であることを示すなら、私はヨハネの言う人生の誇りに屈したことになるのです。」[162]

「したがって、聖ヨハネが『この世』のことだとしている『人生の虚栄心』とは、世俗的な所有物や利点を誇示することであり、『誇示』し、他人を小さく見せようとする性質である。」[163]

「神の種が落ちる土壌の 3 つのクラスには、同じ 3 つの敵が現れます。道端で聞く者、悪魔、いばら、世、岩の下の土、肉です。」[164]

これらの 3 つの基本的な欲求は御父からではなく世のシステムから来るものであり、信者はそれらから離れる必要があります。父は私たちの幸福を望んでいますが、世は私たちを滅ぼします(17節)。

『父から』(属格を伴うギリシャ語のek)は起源を意味するのではなく、ヨハネの場合と同様に自然を意味します。世界のすべてがそこから来ているという意味ではありません。むしろそれは、邪悪な行為は全く世俗的なものであり、それ自体が神のご意志に反していることを意味します。」[165]

「道徳は[救いの]保証の根拠ではなく、その実なのです。」[166]

キリスト教徒にとって三重の敵	
<b>問題</b>	<b>解決</b>
<b>世界</b>	<b>逃げる</b>
(第一ヨハネ 2:15-17)	(第一テモテ6:11; 第二テモテ 2:22)
肉の欲望	
目の欲望	
人生の自慢	
<b>肉</b>	<b>否定する</b>
(ローマ7:18-24)	(ローマ6:12-13; 8:13)
<b>悪魔</b>	<b>抵抗する</b>
(第一ペテロ 5:8)	(第一ペテロ 5:9)

ヨハネは、黙示録で地獄の三位一体を特定するのを私たちに助けてだけでなく、この書簡の中で「神であるそれぞれの人が、どのようにして他の人たちと協力し、また彼らを通して、私たちのための神の救いの計画を達成するか」について多くの啓示を与えました。[\[167\]](#)

第一ヨハネの三位一体		
“父なる神	御子なる神	聖霊なる神
私たちはキリストを通して御父との交わりを持っている(1:3)。	イエスは「いのちのことば」と呼ばれている(1:1)。	御霊は私たちの内に住まわれ、救いの確信を与えてくださる(3:24)。
神は光 (1:5)。	イエスの血は私たちを罪から清める(1:7)。	御霊は私たちに、イエス・キリストが肉体となって来られたことを告白させる(4:2)。
御父は御自分の子供たちに対して大きな愛を持っておられる(3:1)。	イエスは御父に対する私たちの弁護者(2:1)。	御霊はすべての信者に対する神の賜物(4:13)。

神は「私たちの心よりも大きく、すべてをご存じ」(3:20)。	イエスは私たちの罪に対するなだめの者(2:2)。	御霊は真理とイエス・キリストを証しする(5:6)。
神は愛(4:8)。	イエスには罪がない(3:5)。	御霊は父と子と一つ(5:7、8)。
神は「私たちの罪のなだめの供え物として御子を遣した」(4:10)。	神の御子は悪魔の働きを滅ぼされた(3:8)。	
神は信じる者のうちに住んでおられ、信者も神の中におられる(4:15)。	イエスは肉体となって来られた(4:2)。	
神はイエス・キリストを通して永遠の命を与えてくださる方(5:11)。	御子は世の救い主(4:14)。	
	御子は永遠の命の源(5:11)。	
	私たちが永遠のいのちを受け継ぐためには、神の御子を信じる必要があります(5:13)。』 <a href="#">[168]</a>	

2:17 私たちがこの世の欲望を追求すべきではないもう一つの理由は、このシステムがその欲望とともに消滅しつつあるということです。実際、私たちはヨハネがこの世の存在の終わりの時と呼んだ時代に生きています(18節)。世は一時的でつかの間のものにすぎません(第一ペテロ参照)。

しかし、神の御心を行う者は永遠にとどまるのです(継続し、耐え、生きます)。すべてのクリスチャンは永遠に生きるのです(ヨハネ10:28)、ヨハネは私たちが従順によって永遠のいのちを獲得すると言っているのではありません。しかし、私たちが神に従うとき、死後のみならず、今も留まる(つまり、神との親密な関係を楽しみ、神の永遠のいのちを豊かに経験する)こともできます。

「アブラハムが神への従順によって『神の友』という称号を得て(ヤコブ2:21-23参照)、その称号によって彼は今日、世界の3つの宗教で知られており、今後も永遠にいらされ続けていくように、従順なクリスチャンも(ヨハネ15:14-15)同様に、永遠のアイデンティティは、やがて神へ



の従順によって決定される、と結論付けるのは理にかなっていません。それぞれの永遠の『アイデンティティ』は、天から降る雪の結晶と同じくらいユニークなものになります。」[\[169\]](#)

この世の魅力に抵抗することは、どの信者にとっても難しいことです。ヨハネは、その魅力を考慮して、その誘惑の道筋を理解し、次の4つのことを覚えておくよう読者に勧めました。(1) 世への愛は、神への愛の欠如を示していること(15節)。(2) それは、愛に満ちた天の御父が私たちの福祉のために望んでいることとは異なる結果をもたらすこと(17節)。(3)それはほんの短い時間しか続かないこと(17節)。そして、(4)神との親密な交わりを妨げること(15節)。

## 2. 反キリストたちに抵抗する 2:18-27

ヨハネは、読者がこれらの誘惑に気づき、それから身を守ることができるように、読者が遭遇するであろう特別な欺瞞について警告する必要性がありました。これまでヨハネは、神との親密さについての真実を歪曲した偽教師たちに対してあまり直接的に扱ってきませんでした。今では彼はより直接的になり、彼らに反キリストというレッテルを貼っています。

ヨハネは、本文のこの箇所の冒頭で再び3重構造を使用しました。彼は、終わり(18-19節)、信者(20-23節)、そして光の中で生きること(24-25節)の3つのしるしまたはしるしについて説明しました。26-27節は、18-25節で与えられた啓示を要約し展開しています。

### 終わりのしるし 2:18-19

2:18           ヨハネはおそらく、「幼子たち」と訳された別のギリシャ語を使用しました(ペイディア、12節にもあります)。ここではそれが学んでいる子どもを意味しているからです。彼の読者は、彼がここで明らかにしたことを学ぶ必要がありました。

人類の歴史のドラマの中で、私たちも含むヨハネの読者全員が、最後の幕で私たちの役割を果たします。新約聖書全体を通じて、著者たちは受肉後、主がご自身のもとに再臨される前の現在の待降節間時代を終わりの時、あるいは終わりの日とみなしました。これは、主ご自身が再び歴史の中に侵入し、教会を携挙する前の最後の期間です。そして、新しい時代の第一段階は裁き(患難時代)、第二段階は祝福となります。第二段階では、最初は千年王国、次に新しい天と新しい地でイエス・キリストが、人類を直接統治するのです。

「その時とは、ヨハネの福音書の中で、イエスの地上での歩みの危機、イエスの死と御父への帰還の最高の時期を表す用語である。これは、ここでの聖ヨハネの意味を私たちに導くものである。…『最後の時』数時間の終わりが続き、それは期限切れの一日の終わりである。」

[\[170\]](#)

神に敵対して自分を高揚させる世界支配者(反キリスト)の出現に関する啓示は、ヨハネの聴衆にはよく知られていたことでした(ダニエル11:36-45; マタイ24; マルコ13; 第二テサロニケ2:3-5; 第二ヨハネ7; 黙示録 12-13)。[\[171\]](#)しかし、ヨハネが多くの小さな反キリストを書いている間にも、神に対して高揚する人々が現れました。ヨハネはこれを、反キリストの出現が遠くない証拠であると見なしました。反キリストとは、イエス・キリストとその教えに反対する人々、および/またはメシアであると公言する人々のことです。[\[172\]](#) 黙示録 13 章の最初の「獣」はメシアであると告白し、その章の 2 番目の「獣」はキリストに敵対します。[\[173\]](#)

「アンチ[反対]は置き換えや反対を意味することもあります。アンチキリストスという言葉ではどちらの考えも同じです(新約聖書ではここでのみ、2:22; 4:3; 第二ヨハネ7)。」[\[174\]](#)

「若者たちの敵は世であり、キリストのうちにある幼子の敵は偽教師である。」[\[175\]](#)

「キリストのうちにある幼子たちへの重要な助言は、神の言葉を養うことです[ヘブル人への手紙5:12-14、第一ペテロ2:2参照]。」[\[176\]](#)

2:19 キリストに敵対していた人々は「私たち」から出ていったのです。この手紙の他の箇所でも頻繁に見られる、「私たち」という言葉は使徒の目撃者を意味しているのかもしれませんが(1:1-5; 4:6を参照)。これは、これらの偽教師たちが使徒たちの中から出て行ったことを意味し、必ずしも彼ら自身が使徒であったということではなく、自分たちのメッセージは使徒たちが承認したものであると主張したことを意味します(使徒15:1、第二コリント11:5参照)。この手紙の他の箇所でも「私たち」とは信仰共同体を指していますが(1:6-2:2参照)、おそらくここでもそれを意味していると思います。偽教師の中には、地元の家庭教会の会員だったけれども、教義の違いを理由に教会を離れた者もいたと思われまふ。これらの人々が使徒や信者から物理的に分離したことは、最終的に彼らが彼らから教義的に分離されていることを示しました。

「この手紙の中での『反キリスト』への他の言及から、筆者がこの用語を使用するとき、彼が自分のコミュニティの異端的な元メンバーを意味していることは明らかです。つまり、何らかの形でイエスの正体を否定していた人々、そして神の救いの活動の事実は、神を通して世界に伝えられました。」[\[177\]](#)

「…この場合、後に異端的な思想や行動を許した人たちが一緒に逃げた可能性があります(オク・エサン・エクス・エモン、『彼らは私たちの

仲間ではなかった』と明らかに言えたとき)最初の段階にいた可能性  
があります。信者たちに、何も知らされていないとしても、イエスに対  
する真の信仰を持たせてください。』[\[178\]](#)

「今日の世界における偽りのカルトと反キリスト教の宗教制度の歴史を  
調査してみると、ほとんどの場合、その創設者たちが地元の教会から  
始まったことがわかるでしょう。彼らは『私たちとともに』いたけれども、  
『私たちの』ものではなかったのです。彼らは「私たちから」出て行っ  
て、独自のグループを立ち上げました。』[\[179\]](#)

「…誠実な告白をする人は信仰を貫くことが期待できますが、ヨハネ  
は他の箇所、貫徹しないと危険であると読者に警告しています[24  
節、第二ヨハネ8章を参照]。』[\[180\]](#)

信仰と善行に粘り強く取り組むのはクリスチャンにとって普通のことですが、そ  
れは避けられないことではありません。したがって、新約聖書には、信仰と善  
行を継続するためのすべての警告と勧めがあります。

キリスト教世界内の分裂は明らかな問題を引き起こしますが、神は教義上の  
違いや真理からの逸脱を明らかにするためにこれらの分裂を利用することに  
よって、そこから何らかの良いことを生じさせます。

## 信者のしるし 2:20-23

2:20-21 異端の分離主義者たち(19 節)とは対照的に、共同体内の忠  
実な信者たちは信仰を守り続けていました。言及されている油注ぎは明らか  
に聖霊であり、イエスは回心の際に各信者に聖霊を与えます(ローマ8:9; 第  
一コリント 12:13; ルカ 4:18; ヨハネ 6:69; 14:17, 26; 15:26; 16:13; 使徒4:27;  
10:38; 第二コリント 1:21-22)。ヨハネは、この油注ぎは読者に教えを与える  
ために宿っており、それは真実であると言いました(27節)。

「油注ぎは何かを神聖な用途に指定する。』[\[181\]](#)

ヨハネは聖霊(聖なる方、つまりキリストから送られた)を油注ぎと呼び(ヨハネ  
14-16参照)、個人的な役割である教える役割を聖霊に帰しました。これは、  
神の言葉が油注ぎであるという考えよりも好ましいように思えます。[\[182\]](#)ヨハネ  
は以前、イエス・キリストを命として語っています(1:2)。すべての信者の中に  
聖霊が臨在することによって、信者は福音の真理を認識し、真実と誤りを区  
別できるようになります(ヨハネ 14:26; 16:13)。

もちろん、神から与えられた能力、悪魔の盲目、人間の教師の影響、人生に  
おける罪などのせいで、クリスチャンの中には他のクリスチャンよりも多くの知

覚を持っている人もいます。ヨハネが読者が持っていると信じていた知識は、文脈から見て明らかにキリストの人柄と働きについての真実の知識でした。

2:22-23 反キリストが嘘をつくのは、イエスがキリストであり、神の子であり、私たちの救い主であることを否定するからです(ヨハネ11:25-27参照)。これは、イエスをメシアとして拒否したユダヤ人だけでなく、ヨハネが別の場所でほめかした他の偽教師たちも同じ立場だったでしょう。その中には、物質的なものはすべて罪であり、したがってイエスが神の子であるはずがないと信じていたグノーシス主義者もいました。[\[183\]](#)彼らはイエスとキリストを二つの別個の存在として考えました。[\[184\]](#)

教義学者たちは、イエスは真の人間ではないので、私たちの救い主ではありえないと教えました。

グノーシス派の教師であったケリントスの信奉者たちは、イエスは完全な神ではなく、神はバプテスマの時にのみ現れ、その後十字架につけられる前にイエスから去ったと信じていました。[\[185\]](#)

これらの偽教師たちは皆、神から真理を受け取ったと主張しました。しかし、ヨハネは、子と父は一つであるため、人は父をも否定せずに子を否定することはできないと指摘しました(マタイ10:32-33、マルコ8:38、ヨハネ12:44-45、12:44-45、14:10-11参照)。

「…神を知っていると主張しながら、その命令に従わない者は誰でも『偽り者』です(…2:4)。しかし、イエスがキリストであることを否定する人は、典型的な偽り者と見なされなければなりません…」[\[186\]](#)

「…私たちと神との適切な関係を否定することによって、私たちは神を否定することになります。」[\[187\]](#)

一部の読者は、23節の最初の部分を、父を持つ真のクリスチャンにとって、御子を否定することは決して不可能であるということの意味していると解釈しています。この解釈は他の聖書(第二テモテ2:12)や人間の経験と矛盾しているように思えます。たとえば、真のクリスチャンの中には、殉教を避けるためにキリストを否定する人もいます。その文脈で、ヨハネは神との単なる救いの関係ではなく、永続する神との関係について書いたのです。

したがって、第二の説明は、ヨハネが言いたかったのは、御子を否定する者には御父が内に住んでいないということです。この見解によれば、御子を否定する者は御父との永続的な関係を持たないこととなります。これは、神のうちに住んでいない信者だけでなく、すべての不信者も表しています。

3番目の説明は、ヨハネが典型的なことを説明しているということです。いくつかの例外はあるかもしれませんが、通常、御父を持つ人々は御子を否定しません。しかし、この節の「誰でも」という広義の用語は、ヨハネが書いたことがすべての人に当てはまることを暗示しているように思えます。私個人的には2番目の見解を好んでいます。

23 節の後半は、前半の必然的な帰結です。御子に告白することは、御子を否定することと反対です。御子の告白をすることで、御父が告白した者の内に宿ることになります。御子の告白には、単に御子への救いの信仰を行使するだけではなく、御子への信仰を公に告白することが含まれます(ローマ 10:9-10、第二コリント4:13参照)。心の中で信じることは義とみなされることになり、口で告白することは救い、つまり秘密にして告白しない信者であることによる結果からの解放をもたらします。

不忠実なクリスチャンは、たとえキリストを信じていても、キリストを告白しないかもしれません。キリストを否定することも、キリストを告白することも、キリストへの信仰を個人的に証言することに関係します。それらは救いを決定するものではありません。したがって、キリストを否定しても永遠の救いが失われることはありませんし、キリストを告白しても永遠の救いを得ることができません。

ヨハネが、本物のクリスチャンは誰も御子を否定できないと言っているのであれば、当然の結果として、本物のクリスチャンはみな御子を告白しなければならないということになります。そうすれば、キリストを信頼することに加えて、キリストを公に告白することが救いの条件になりますが、これには聖書の裏付けがありません。

要約すると、ヨハネは、イエスがキリストであることを否定する人々の教えがもたらす、神との親密な交わりに対する危険について読者に警告しました。もし彼らが御子を拒絶したなら、御父との親密な関係を期待することはできません。

「現代の多くの第一ヨハネ研究における混乱の主な原因は、著者が警告している本当の危険を認識していないことにある。読者層の永遠の救いが危険にさらされているわけではない。著者に関する限り、疑いはない。しかし、世界とその反キリスト教の代表者による誘惑は、直面しなければならない真の脅威である。」[\[188\]](#)

### 光の中で生きている証 2:24-25

ヨハネは今、読者に、神との交わりに留まることができるようにするために、イエス・キリストの真の教義に留まるように呼びかけました。

2:24 クリスチャンは、最初から聞いて救いをもたらした自分たちが信じた真理を拒否すべきではありません(ヘブル人への手紙の警告箇所を参照)。そのような忠実さによって、私たちは神との交わりに留まり続けることができます。ヨハネは、イエスが二階の部屋の談話で使用したのと同じ意味で「残り」(とどまる)を使用しました。永続的とは、神との親密な関係を指し、それは私たちが神の御心の光の中でどの程度歩むかによって決まります。永続すること、交わり、そして神を知るとは同じことを指しており、私たちは交わりを完全に経験するか全くしないかではなく、段階的に経験します(ヨハネ15:1-8)。ヨハネの読者が本当に神と神の真理を知っていると主張したことは、偽教師たちに抵抗するという彼らの決意を強めたでしょう(12-14、21節)。

2:25 当時も今も反キリストの一部がそう示唆しているように、イエスが救い主であると信じる時、私たちの永遠のいのちには疑問がありません。それは「御子を信じる者は永遠のいのちを持っている」(ヨハネ3:36; 6:47など)という神の約束に基づいているので安全です。ヨハネがすべての著作の中でギリシャ語のエパゲリア(約束)を使用したのはこの時だけです。

### 信仰を貫くことの大切さ 2:26-27

2:26 ここでの「これらのこと」はおそらく主にヨハネが書いたばかりのことを指していると思われます(18-25節)、手紙全体における彼の懸念の1つは偽教師について読者に警告することでした。

「著者は偽教師たちへの攻撃を、信者たちへの警告と激励の言葉で締めくくっている。」[\[189\]](#)

「あなた」という言葉は、信者が偽りの教えに騙される可能性があることを示唆している。」[\[190\]](#)

ジェームズ・オールマンは、この聖句が5章13節と並行して、ヨハネがこの手紙を書いた目的、つまり「信頼できる教師を見分ける方法を読者に示し、信者の信仰を確認する方法」を明確に表現していると信じました。[\[191\]](#)

2:27 油注ぎは聖霊です(20節参照)。読者たちの内には聖霊が宿っていて、その働きは信者をすべての真理に導き、神が啓示されたことを教えることです(ヨハネ14:26;16:13)。したがって、彼らは他の人間の教師、特に偽教師に依存することはありませんでした。

この聖句から、クリスチャンの中には人間の教師の言うことを聞くべきではないと結論付ける人もいます。それはヨハネが言いたかったことではなく、言っ

たことでもありません。彼は、聖霊が彼らの真の教師であり、究極の照明の源であることを読者に思い出してもらいたかったのです。彼は、聖霊が教育において働かれる中等教師を排除していたわけではありません。もしそれが彼の見解であったなら、彼は自分自身が読者に教えるこの手紙を書かなかったでしょう。

ヨハネが言いたかったのは、学習の究極の源として他の人間に目を向けるべきではないということでしたが、偽教師たちはそのような態度を奨励していました。聖霊は神の言葉を教科書のように用いて私たちに教えられます(ヨハネ 16:14-15)。ですから、ヨハネは聖書を捨ててもよいと言っているではありません。未熟な信者には人間の教師が必要です(ヘブル5:12)。しかし彼らは人間の教師に完全に依存していいわけではありません。ヨハネの読者は明らかに信仰においてかなり成熟していたといえます。神は人間の教師をご自身の教会への贈り物として与えられました(エペソ4:11、第一コリント12:28、ローマ 12:7参照)。

「ヨハネはここで明らかにちよつとした皮肉を使っている。…ヨハネが言いたいのは、自分が彼らに訴えていることはかなり自明のことだ…」

[192]

読者の油注ぎは本物です。偽教師たちはおそらく神が自分たちにインスピレーションを与えたと主張しましたが、神はそのように実際にはしていませんでした。ヨハネは、イエス・キリストや使徒たちが教えた以上の啓示を主張する偽教師について読者に警告していました。私たちはただ神のうちに留まり、私たちに対する聖霊の働きに積極的に応答する必要があるだけです(ヨハネ 15:4-7参照)。

ヨハネの最初の読者は神との歩みにおいて順調でした。ヨハネは、自分の手紙のこの部分(2:12-27)を、彼らの健康な霊的状态(2:12-14)を確認することから始めました。それからイエスは彼らの霊的な敵(2:15-27)、すなわちこの世の誘惑(2:15-17)と偽教師の誘惑(2:18-27)について警告されました。

ヨハネが書簡のこの部分で読者に勧めたことと、モーセがイスラエル人に命じたことには類似点があります。どちらの場合も、神の聖さは、幕屋と教会の中で神と最も密接かつ親密に接触する人々が聖であることを要求しました。モーセは、罪を放棄し、神に従い、世俗性を拒否し、モーセの律法、契約法(出エジプト記 20 - 23 章、25 - 31 章)、祭司法典(出エジプト記 35 - レビ記 16 章)、および聖なる掟(レビ記 17:10-25:55)への信仰を保つことを主張しました。ヨハネも同様に、罪を放棄し(1:8-2:2)、神に従うように(2:3-11)、世俗性を拒否し(2:12-17)、信仰を保つように(2:18-27)と勧めました。どちらの場合も、預言者の関心は、神が聖であるように、彼らの元で世話をされている信者たちも聖なるであろうということ

した(レビ記11:44-45;19:2;20:7;第一ペテロ1:15-16)。聖性は神の民にとって、聖なる神を知り、知り、聖なる神と交わることに不可欠です(ヘブル12:10-14参照)。

#### IV. キリストの裁きの座を期待して生きる 2:28-4:19

「反キリスト、あるいは我々が彼らを修正主義者と呼んだ人々に対する警告は、今や終わった。使徒の責務は、読者たちの高い霊的資質を肯定し、彼らに『永遠の』生活を送り続けるよう促すことであった。修正主義者の誤った教えに直面して、彼らは最初から聞いた真実にしがみつき、その真実が自分たちの内面を形作るべきである。反キリストの方向に進むことは、御子と御父のうちにとどまることが可能にする豊かな経験すべてを失うことだ。だが、その永遠の経験とは正確にはどのようなものだろうか?ヨハネはすでにそれがキリストのような歩みを伴うことを指摘したが(2:6)、その正確な性格についてはほとんど述べていない。しかし、それが互いに愛しなさいという命令への従順を伴うことはすでに明らかである(2:7-11参照)。この手紙のこの時点から、愛が支配的かつ最優先のテーマになる。」<sup>[193]</sup>

私たちの前の箇所(2:28-4:19)がこの手紙の本文を構成します。それがユニットであることは、構造的包含から明らかです。<sup>[194]</sup> この単元をまとめている2章28節の「主の来臨に……確信を持つことができるように」と4:17の「裁きの日に確信を持つことができるように」という言葉に注目してください。

「1:5から2:27まで、聖ヨハネは、「光の中」に住み、歩くという概念の下で、イエス・キリストによってもたらされたメッセージを通して実現される、神との、そして神における交わりについての概念を練り、広げてきました。…しかし、この段落[2:28-3:3]からは魂の交わりが進み、神はより親密な性格、より鮮やかな色、そしてより温かい調子を帯び、神に対する子としての愛と人間に対する兄弟としての愛へと開かれていくのです。」<sup>[195]</sup>

#### A. 自信を持ってキリストと向き合い続ける 2:28

ヨハネは、読者に神との親密な交わりを育み続けるよう動機づけるために、信者が死、または歓喜の際にイエス・キリストと出会うという新しい考えを導入しました。イエスに会うという見通しは、4章19節までずっとヨハネの指示の土台でした。28節は、この手紙の主要な部分で続く内容の議題を設定しているため、テーマ節です。この聖句は、前のセクションを要約する後方と、<sup>[196]</sup>次のセクションを導入する前方の2つの方向を向いたヤヌス(Janus)でもあります。ヤヌスはローマの始まりと終わりの神で、門口を守ったとされています。彼には二つの顔があり、一つは前頭部、もう一つは後頭部にありました。1月(January)の名前は彼に由来しています。昨年を振り返り、新たな年を迎える月です。



Remain (abide、ギリシャ語 meno) は 2:12-27 で少なくとも 7 回登場します。ここ 28 節の「とどまりなさい」という勧めは、2章12節から27節での「とどまる」というヨハネの配慮の結果です。「もし」は、いつでも翻訳したほうがよいかもしれませんが。たとえその時が定められていないとしても、主が現れるという事実は確かです。[\[197\]](#)ヨハネが言いたかったのは、「キリストが現れるとき、私たちは自信を持って…を撤回しないだろう」という意味で、キリストがご自身のもとに再臨されるのは、彼の読者がまだ生きている間に起こるかもしれないということです。[\[198\]](#)

キリストの再臨が差し迫っていることを教えている他の聖句としては、第一コリント 1:8; 4:5; 15:51-52; 16:22; ピリピ人への手紙 3:20. 4:5; 第一テサロニケ1:10. 第二テサロニケ1:10-12. テトス 2:13. ヤコブ 5:7-9. および黙示録 3:11. 22:7, 12, 17, 20. 自信(ギリシャ語 parresia)は、明確な良心の結果として得られる言論の自由または大胆さと言う意味です。ヨハネの考えは、今私たちが神との交わりの中に歩んでいけば、いつ神に会っても恥ずかしがることはない、というものでした(マルコ8:38参照)。近いうちにイエス・キリストにお会いできるという見通しは、私たちが今イエス・キリストのうちに留まる動機となるはず(ヤコブ5:8参照)。

「あなたがキリストの御前に立って自分の業について語るという知識ほど、あなたの人生に影響を与えるものはない。」[\[199\]](#)

「私たちは、この本に掲載されるであろう記録に恥じないよう、監査に目を光らせながら日々努力しなければなりません。」[\[200\]](#)

「永遠の救いは決して失われることのない完全に無償の賜物であるが、新約聖書は、信者はキリストの御前で自分のクリスチャンとしての生活を説明しなければならないことを明らかにしている(第二コリント5:10、ローマ14:10-12を参照)。先ほど引用した本文と第一コリント3:11-15 に示されているように、この判決は単に私たちの善行を審査するものではなく、『善と悪』の両方を包含する包括的な審査である(第二コリント5:10)。したがって、裁きの席では恥をかくことは明らかに起こり得る。当時のクリスチャンは永遠の体を持っていたので、これはなおさら真実である。したがって、主に喜ばれなかった地上の生活の中で罪はもはやそれらのことについての適切な後悔や当惑を妨げることはない。」[\[201\]](#)

「わたしたち」とはヨハネや他の使徒たちを指すのでしょうか、それともキリスト教徒全体を指すのでしょうか？ヨハネが使徒たちのことを言っているのであれば、読者がキリストのうちに留まり続けるなら、使徒たちはキリストの裁きの座で恥じることはない、ということを意味していました。[\[202\]](#)彼がすべてのクリスチャン一般について言及しているのであれば、信者はキリストのうちに留まり続けるなら恥じることはない、ということを意味していました。どちらの場合でも、要点は明らかです。キリストのうちにとどまっていれば、キリストが現れたときに恥をかかなくても済みます。

## B. 神の子供たちを認識することを学ぶ 2:29—3:10A

ヨハネは、恥じることなく主に会う準備をするというテーマを発展させるために、新しい考え方を始めました。このテーマは、ギリシャ語本文では接続詞(アシンデトン)がないことによって示されています。この箇所のテーマは顕現の概念であり、2:28 で始まり、3:10a (含意) で終わります。

2:29 神は義であるため、神の子どもは皆、通常、義にかなった行動を示します(「義を实践する者は皆、神から生まれました」)。義にかなった行動は、すべての子どもたちが肉体的な親を真似ようと努めるのと同じように、神がすべての忠実なクリスチャンの中に再現する父のしるし(明らかなしるしまたは家族の特徴)なのです。私たちは聖書から神が義の方であることを知的に知っています。しかし、私たちは、ある人々が行う正しい行いによってクリスチャンであることを経験的に知るようになります。一部の不義な人々が義に行動し、一部の義人が邪悪に行動するという事実によって、この点を破壊することはありません。

「私たちはこの聖句に、実際以上のことを語らせてはなりません。ヨハネは確かに、『義を行わない者は神から生まれたのではない』とは言っていません。それはヨハネの発言によって決して正当化される推論ではありません。ヨハネはここで、人が救われるかどうかをどのように判断できるかについて話しているものではありません。人が信じていることがわかれば(第一ヨハネ5:1を参照)、私たちはそれを知ることができます。彼は救われました。しかしここで、ヨハネは明らかに、神が正義であることを知っている場合に私たちが行うことができる演繹に関心を持っています。それが知られているなら、神の義なる本性をある程度再現する人は実際にその本性を表しており、それができるといふことになります。神から生まれたものとして認識されるのは当然です。」

[203]

「この聖句は、神から生まれたすべての人が義を实践していると言っているわけではありません。信者は暗闇と罪の中を歩む可能性があります(1:6, 8; 2:1)。ここで重要なのは、子どもが自分の性質を示すとき、ということです。父親であれば、彼または彼女は父親の子どもとして認識されます。」[204]

真に神から生まれた人にとって、義を实践することは正常なことです。避けられないものではありません。そのような行動は、その人がクリスチャンであることを示します。[205]しかし、義にかなった行動を实践する人全員がクリスチャンであるわけではありません。クリスチャンでない人でも義にかなった行動ができる一方で、クリスチャンは暗闇の中を歩む可能性があるからです。した

がって、私たちは人の救いをその人の行動によって判断すべきではありません。

3:1 聖霊がクリスチャンの中に正しい行動を生み出すことは、私たちに対する神の大きな愛の証拠です。ヨハネは、他の新約聖書の著者よりも、第一ヨハネ(46回)と福音書(44回)で愛の言葉を頻繁に使用しました。パウロはエペソ人への手紙で3番目に頻繁にこの言葉を使用しました(20回)。[\[206\]](#)聖書は私たちを神の子(ギリシャ語 tekna)と呼んでいます、それは神が私たちをそのように造られたからです。名前は単純に現実を表しているのです。

「ここで考えられているのは、発展の見通しを持った自然共同体に関するものであり(teknon、comp.第二ペテロ1:4)、特権的な立場(huios)に関するものではありません。」[\[207\]](#)

ヨハネは、クリスチャンと神との関係を説明するのに、息子よ、huiosという敬称を決して使いませんでした。彼はイエスと神の関係を説明するためにhuiosを留保しました(3:2、10; 5:2を参照)。

未信者は神の子を完全に理解することができません。この認識の欠如の理由は、彼らが神を完全に理解できないことにあります。彼らは親を知らないの、子どもたちのことも知りません(ヨハネ1:12-13;5:37;7:28; 16:3 参照)。

「著者は読者に、世から承認されることは恐れるべきものであり、望むものではないことを知ってほしいと願っています。世から嫌われることは不愉快なことかもしれませんが、最終的には、信仰共同体のメンバーに、自分たちは神に愛されているという安心感を与えてくれるはずで、それは世界の憎しみよりもはるかに重要です。」[\[208\]](#)

「…世は、イエスを憎んだのと同じように(ヨハネ 15:18f.)、神の子どもたちを憎んでいる(3:13)。なぜなら、彼らはこの世に属していないからだ。まさにこの事実が、読者が子どもであることのさらなる証拠だ。神の側であることを世界が認めないということは、彼らが神のものである証拠である。」[\[209\]](#)

3:2 「使徒は私たちの現在の尊厳について語った後、私たちの将来の運命について語り続けます。」[\[210\]](#)

私たちは現在神の子どもですが、まだ自分たちが思うように完全には神の御姿を反映できていません。しかし、(もしそうでなければ、別の三流の状態ではなく)イエス・キリストが現れ、私たちが彼を見ると、私たちは完全な変容

を経験し、彼のようになる(つまり、栄光を受ける)でしょう。明らかに、イエス・キリストを見るだけで、私たちは肉体的にも霊的にも完全に変わられます(第一コリント13:12参照)。

「イエスに会うこと以上に素晴らしいことは思い当たりますか？ 私たちはイエスについて歌い、伝え、学び、主とコミュニケーションをしてきましたが、何よりも素晴らしいクライマックスは私たちがイエスに会った時でしょう。」[\[211\]](#)

「神の子は、確かに、今、ここにいます。それは、内部はクリスタルのように白いが、まだカットされておらず、反射をうけた面から輝かしい光を放たないダイヤモンドのようです。」[\[212\]](#)

「彼はこれから先も本質的に何も変わらないだろう。しかし私たちの想像力をはるかに超えた本質的にさらに完全な現在の姿になっていくのである。」[\[213\]](#)

2:28 と 3:2 でのヨハネの出現への言及は、2:29 と 3:1 での新生への言及を構成しています。すべての真のクリスチャンはこの出現に入っています。

3:3 その間、私たちはイエス・キリストを完全に見て知ることを期待しており、その期待(「希望」)は今、私たちに清めの効果をもたらしています(2:1、6、29; 3:7、16; 4:17; マタイ 5:8 参照)。 [\[214\]](#) 同様に、将来、キリストを見て知ることは、私たちに完全な清めの効果をもたらすでしょう(第二コリント 3:18 参照)。

「ヨハネは、クリスチャンが清くあるべき理由を2つ述べている。1つは神の過去の働きに関係しており、2番目は将来の働きに関係している。」[\[215\]](#)

「[神との]関係は変わらない。[神との]交わりが変わるのである。」[\[216\]](#)

3:4 「前の箇所ではヨハネは、キリストのうちに留まり続けること、正しいことを行うこと、そしてキリストの到来に備えて自分を清めることの重要性を強調してきました。これから先は、これらすべてのマイナス面、つまり信者が何かを控える必要性と罪と彼らがそうする可能性についてより詳しく扱っていきます。」[\[217\]](#)

「現在の聖句、3:4-9 は 6 つのストロフィ [セクション] を形成しており、それぞれが大体ふたつに分かれています。ストロフィの 2 つの半分は互いにバランスをとっています。聖句の 2 番目の部分は最初の

部分の展開をサポートしています。その一部(4、5、7節)、あるいはそれとの平行部分(6、9節)、または対比(8節)。」[\[218\]](#)

罪は純粹さと対立します。さらに、罪は非常に深刻です。「不法」(アノミア)と訳されるギリシャ語の使用には、邪悪な意味合いが含まれています(マタイ 7:23; 13:41; 24:12; 第二テサロニケ2:7 参照)。それは、単に特定の法律を破るのではなく、最も広範な範囲での法律の拒否、神に対するあからさまな反対を意味します。

「[不法行為をする人]は抑制なしに行動する。罪とは、法の抑制や他人の権威の抑制なしに行動し、自分の意志で行動することだからである。」[\[219\]](#)

偽教師たちは罪に対して甘い見方をしていたようです(7-8節参照)。

3:5 信者が知っているさらに2つの事実は、罪の深刻さを浮き彫りにしています。それは、イエス・キリストは罪を取り除く(取り除く)ために受肉しましたが、イエス・キリストには罪がありませんでした。これはイエスに全く罪がないことを強く主張しています。

(2:1; 3:3; マタイ 3:14; ヨハネ 8:31-59; 10:30; 17:22; 使徒 2:27; 3:14; 4:30; 7:52; 第二コリント 5:21; ヘブル 4:15; 第一ペテロ 1:19; 2:22参照)。

「イエスは聖であり、罪がなかった。これがイエスのうちにとどまる人々の性質である(ヘブル2:10—4:16、5:9参照)。」[\[220\]](#)

「ここで支配的な考えは、キリストの自己犠牲ではなく、あらゆる形の罪に対するキリストの徹底的な敵意である。」[\[221\]](#)

3:6 多くの解釈者が信じているように、神のうちに留まる(残る)ことがクリスチャンであることと同じである場合、[\[222\]](#)この聖句はヨハネが1章8節と10節で書いたことと矛盾しているように見えます。そこでヨハネはクリスチャンは罪を犯していると言いました(2:1、15、3:18、5:16、21参照)。また、本物のクリスチャンは実際に罪を犯しているため、これは個人的な経験と矛盾しているように思えます。

この言葉を理解する鍵は、ヨハネがこの聖句の中で使用した他の用語、つまり「残る(とどまる)」、「見たことがある」、「知っている」にあると私は信じています。ヨハネはこの手紙全体を通して、神との親密な交わりの中に歩む信者を指すためにこれらの言葉を使いました(1:7; 2:3、10)。それでも、この見方は、罪人、さらにはクリスチャンの罪人の墮落についてヨハネが言ったことと矛盾しないでしょうか(1:8)?

ヨハネは、クリスチャンは神との親しい交わりの中で歩んでいる限り、罪を犯さない、と主張していたのだと思います。堅固な信者は、キリストのうちに留まっている限り、神の律法や意志に反することをして、自分に対する神の権威を決して否定しません。もしそうすれば、神との交わりは損なわれてしまいます。そのような人はもはや親密な意味で神を知らないのです。彼は光から闇の中に移ってしまったために、もはや神を見ることができないのです。

「このようにヨハネは、(ギリシャ語を直訳すると)『自分(イエス)のうちに住んでいる人は皆、罪を犯さない』と言っている。そしてこれによって彼は、キリスト(ho en auto menon、「彼の中に生きている」、現在形を使用)は、罪を犯すことから遠ざけるのである…」[223]

「キリストのうちにとどまっている限り、彼はすべての罪から解放される。これがクリスチャンの理想である。」[224]

「…彼[ヨハネ]は、罪からの自由は本当にキリストとの交わりの中にあり、実際にキリストを見て知っている人の特徴であると言うために6節を形作っている。」[225]

イエス・キリストには何の罪もありませんでした(5節)。彼は一貫して御父のうちに住んで(御父にしたがって)いました(ヨハネ14:9参照)。罪のない人のうちに一貫して住むクリスチャンは罪を犯しません(6節)。もし私たちが阻害されることなくキリストのうちに留まることができるならば、私たちは罪を犯すことがないでしょう。しかし残念ながらそれは不可能なのです。

キリスト教徒の中には、キリスト教徒には罪がなく完全であるという理論を支持するためにこの聖句を使用する人もいます。聖書と経験はこの立場に矛盾しています(例:1:8-9;et al.)。クリスチャンは常習的に罪を犯さないことを教えるためにこの言葉を使った人もいます[226]が、これも経験と同じ聖書に反しています。この2番目の見解の支持者は通常、ギリシャ語の動詞(harmartanei)の現在形でこの見解を支持し、これは罪を犯し続けることを意味すると考えています。

「現代では、第一ヨハネ3章6節と9節で認識されている困難に対処するための一般的な手段は、ギリシャ語の現在形の使用を訴えることである。そして、この時制は『神から生まれた者は罪を犯し続けることはない』、または『罪を続けて犯すことはない』というような訳が必要であると主張されている。このような解釈から導き出される推論は、キリスト教徒は多少は罪を犯すことがあっても(どの程度罪を犯すかは決して特定されていない)、定期的または継続的に罪を犯すことはないであ

ろうということだ。しかし、言語的であろうと釈義的であろうと、あらゆる理由から、このアプローチは弁護の余地がない。」[227]

「…この見解には困難がないわけではない。訳者は新約聖書の他の箇所でない方法で動詞の現在進行形を強調する必要がある。」[228]

「複数の有能なギリシャ学者が指摘しているように、現在形への訴えは激しい疑惑を招く。修飾語の助けを借りずにギリシャ語現在形がこれほどの意味を持ち得る文書は他に引用できない。実際、ギリシャの作家や講演者が、ある行動が継続的であるか継続的ではないことを示したいとき、それを表現するための特別な言葉があった。」[229]

「ギリシャ語の完了時制は状況を意味する。それはその出来事の過去の出来事ではなく、その現実、その存在に関係している。」[230]

「ここでの完了形は、信者であっても罪を犯すので、人を救われるか救われないかに分類することを意図したものではない(1:8)。代わりに、この声明は、すべての罪を、永続しないことだけでなく、罪を犯した結果として非難することを意図している。神に対する無知と盲目である。」[231]

現在形もある 1:8 と 5:16 をそれぞれ「罪を犯し続けるな」と「罪を犯し続ける」と訳すと、これらの節は3:6と矛盾します。神から生まれた者は誰でも罪を犯し続けるわけではないので(3:6)、私たちが絶えず罪を犯していないと言うのは自己欺瞞ではありません(1:8)。さらに、神から生まれた人が罪を犯し続けていないのであれば(3:1)、クリスチャンは自分の兄弟クリスチャンが罪を犯し続けているのを見ることができますか(5:16)？

ヨハネ14章6節の現在形を同じように訳してみましよう。「わたしを通してでなければ、絶えず父のもとに来る者は誰もいません。」これは、時折誰かが別の方法で神のもとに来る可能性があることを意味します。正統派の翻訳者であれば、これをヨハネ 14:6 の解釈として受け入れられるものとして提示する人はいないでしょうし、第一ヨハネ 3:6 でも受け入れられません。

「…注釈者がヨハネの教えを骨抜きにして、単に信者の常習的な罪からの解放に言及しようとしたのは驚くべきことではない。しかし、私たちはこの聖句を司牧的な理由で誤解してはならない。適切に解釈すれば、この聖句は依然として慰めの源である。」[232]

他の解釈者は、ヨハネを、キリストのうちにとどまる者には罪を犯す力がない、あるいは肯定的に言えば、キリストのうちにとどまるクリスチャンには罪を犯さ

ない力がある、という意味だと解釈しています。<sup>[233]</sup>しかし、これは読者がこの節の中に取り入れなければならない考えです。キリストにとどまるクリスチャンには罪を犯さない力があるのは事実ですが、これはヨハネがここで言いたかったことではないようです。彼は、留まることと罪を犯さないことを、より直接的な原因と結果の関係を結びつけて考えていました。

この聖句は、真の信者は習慣的に罪を犯さないことを意味していると言う人たちは、世間知らずか、人間の墮落の深さをほとんど理解していないかのどちらかであるように私個人的に思います。正直に聖なる生活を送ろうとしている感受性の強いクリスチャンなら誰でも、自分が毎日繰り返し罪を犯していることを認めるでしょう。すべてのクリスチャンは、意図的な罪だけでなく、不作為、動機、無知の罪を犯しています。

本物のクリスチャンは、長期間にわたって重い罪を習慣的に行っていると告白したことさえあります。すべてのクリスチャンは常習的に罪人であり、主が私たちに栄光に導いてくださるまで、私たちはそうなるでしょう。明らかに、これは私たちが罪を犯してもよいという意味ではありません(2:1、ローマ6:1参照)。私たちは罪と戦わなくてはなりません(エペソ6:10-18参照)。しかし、私たちがこの世でその墮落的な影響から完全に自由になることは決してありません。

4節では罪の本質的な性質が述べられ、5節ではそれがキリストの人柄と働きに、6節ではそれが人類全体に関連付けられています。

3:7-8 明らかに偽教師たちは、使徒ヨハネがここで教えたことと反対のことを言ってヨハネの読者を欺く危険にさらされていました。ヨハネの論点は2つの側面から構成されていました。行動は霊的な関係を表します(2:29参照)、そして神は罪を憎まれます(5節参照)。罪人の罪の根源は悪魔にありますが、それは悪魔が直接の根源ではなく、最終的な根源であるということです。

「(6節が示唆する意味で)断固とした罪人である人は『悪魔に属している』』と言うことで、ヨハネはまず第一に、第3世代(1-15節)の背景を描いています。悪は女性(そして彼女を通して男性)を誘惑して神に従わないように誘惑する蛇として表されます(12節のカインとアベルへの言及は、旧約聖書のこの部分がここで念頭に置かれているという示唆を裏付けています)。<sup>[234]</sup>

「しかしながら、ヨハネは、『神から生まれた』』というように『悪魔から生まれた』』とは言っていない。なぜなら、『悪魔は何も生まないし、何も生み出さない。しかし、悪魔を真似する者は誰でも神の子になる』から



だ。悪魔は、正しい生まれによってではなく、悪魔を模倣することによって生まれたのである」[アウグスティヌス、トラクト、4. 10]。[235]

明らかにヨハネは、クリスチャンは罪を犯す(1:7-10)と以前に書いているので、人が罪を犯すことによって自分が救われていないことを示すという意味ではありません。

3:9 多くの英語翻訳は、ギリシャ語の現在形を、6節にあるように、クリスチャンは常習的または継続的に罪を犯さないと書いていると解釈しています。しかし、以前に指摘したように、ギリシャ語の現在形は常に習慣的な行為を示しているわけではありません。[236] 多くの場合、それは絶対的な行動を表します。新欽定訳聖書はギリシャ語現在形をこのように解釈し、「神から生まれた者は誰でも罪を犯さない」という条項を訳しています。NET2聖書には一貫性がありません。6節は「罪を犯さない」と訳されていますが、9節は「罪を實踐しません」と訳されています。ヨハネは以前、クリスチャンは常習的に罪を犯していると書いているので(1:6-10;2:1参照)、クリスチャンは常習的に罪を犯していないという考えは受け入れられません。[237]

「…第一ヨハネ3章9節の『緊迫した解決策』は、現在の文献の中で崩壊しつつある。これは1946年の解説でC・H・ドッドによって抜け目なく疑問視され、S・クボは次のタイトルの記事で大きな打撃を与えた。『第一ヨハネ3:9: 絶対的か習慣的か?』1969年出版。[238]それは、久保の記事以降に出版された3つの主要な批判的解説によって放棄されています。すなわち、I.Howard Marshall (1978)、Raymond E. Brown (1982)。およびスティーブン S. スモーリー(1984)。第一ヨハネ3章9節に適用されている『緊迫した解決策』が、その時代が到来し、そして過ぎ去った考えであることは、極めて明白であるように思われます。』[239]

神から生まれた人が罪を犯さない理由は、その人が神から生まれたからです。ヨハネは、罪のない親がクリスチャンを生み出したので、この意味でクリスチャンは罪がないと言えます。クリスチャンは新生を経験するとき、神の神聖な罪のない性質にあずかる者となります。クリスチャンが罪を犯すのは、彼らにも罪深い人間性があるからです。しかし、この聖句でヨハネは、私たちが内在するキリストの罪のない性質だけを見つめていました。イエスはニコデモに、人々は第二の誕生を経験する必要があると言われました(ヨハネ3:5-7)。すべてのクリスチャンは二度生まれています。一度は肉体的に、もう一度は霊的にです。ヨハネは第一ヨハネ3:9で私たちの第二誕生の結果について考察していました。

「私たちは全体的な人間として罪を犯しており、罪から自由であるとは決して主張できないが、再生された私たちの『内なる自己』は罪を犯さない。」[\[240\]](#)

「罪はクリスチャンの中に確かに存在するが、キリストが完全で神聖なキリストが住まわれる再生された内なる自己にとって異質で無関係である。ヨハネの言葉で言えば、キリストは永遠のいのちであるため(第一ヨハネ 5:20)、そのいのちを所有する者は神から生まれたために罪を犯すことはできない。」[\[241\]](#)

「神の子には新しい性質が与えられており、その新しい性質は罪を犯さないし、これからも罪を犯さない。放蕩息子が豚小屋に留まることのできなかつた理由は、彼が豚ではなかつたからである。彼は父の息子で、彼は父の家を待ち望んでいたのだ。」[\[242\]](#)

「神の命の芽は私たちの魂に植え付けられ、それは成長する。段階的なプロセスであり、時折遅れることもあるが、確実に、最後には完全な結実を達成する。信者が罪に陥るのは、天候の偶然のようなものである。種子の成長を妨げる。生きている種子の成長は一時的にチェックされるかもしれないが、成長がなければ生命は存在しない。」[\[243\]](#)

「種」とはおそらく聖霊を指しているのでしょう(2:27、3:24参照)。[\[244\]](#)

繰り返しになりますが、もし私たちが中断されることなくキリストのうちに留まることができたなら、私たちは決して罪を犯さないでしょう(6節参照)。キリストの罪のない本性が永続するクリスチャンを支配するのに対し、罪深い人間の本性は永続しないクリスチャンを支配します(ローマ 6:16 参照)。

「つまり、罪は決して私たちの永続する経験の産物ではない。それは決して再生する自己そのものの行為ではない。それどころか、罪は神に対する無知と盲目の産物である[cf. 3:6b]。」[\[245\]](#)

「罪を、キリストにあつて再生された私たちにとって本質的に異質なものとみなすことは、罪に対する霊的な勝利への第一歩を踏み出すことである。」[\[246\]](#)

「使徒の包括的な主張には、明らかにある種の理想主義が含まれている。9節の彼の言葉は、絶対的な真実において、キリスト・イエスにおける『完全な人』に当てはまる。」[\[247\]](#)

ヨハネは、クリスチャンが神のうちに住むとき、彼は天の父として行動し、他の人も彼が神の子であることを認識するだろうと言った。[\[248\]](#)

「誰かが『祭司は淫行を犯してはならない』と言うなら、人としてそれを犯すことができることを否定することはできないが、祭司は司祭として機能しているので、そのようなことはしない。

聖書でも同様の言葉が使われており、「良い木が悪い実を結ぶことはない」(マタイ7:18)。もちろん、良い木が悪い実を生むこともあるが、それは本来の良い木の結果としてではない。またイエスは、新郎新婦と一緒にいる間、人は断食を『できない』と言われた(マルコ2:19)。彼らは断食することもできるが、そうするのは違和感があり、不自然である。』[\[249\]](#)

「同様の概念はパウロの思想にも見られる。パウロはこう言う。『私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。今私が肉において生きているのちは、私を愛し、私のためにご自分を与えてくださった、神の御子に対する信仰によるのです。』(ガラテヤ2:20)もしクリスチャンが罪を犯したとしても、その罪はその人の本当の人生を表すものではない。なぜなら、彼の本当の人生は彼の中におられるキリストの人生だからである。[ローマ 7:20-25 参照]。』[\[250\]](#)

「…クリスチャンが罪を犯すとき(そしてヨハネはクリスチャンは罪を犯すことがあると信じている、第一ヨハネ2:1)、その行為において彼はサタンの子のように振る舞っていることになる。彼が実際に誰であるかは明らかにされていない。パウロの言葉を借りれば、次のようになります。彼は『ただの人』のように歩いている(第一コリント3:3)。』[\[251\]](#)

「…再生された神の子が犯したいかなる罪も、神から生まれた新しい人から来るものではない。代わりに、再生された人が犯すすべての罪は、その人の古い罪の性質から来ている。』[\[252\]](#)

他の一般に信じられている説明は、ヨハネが以前に書いたこと(1:6-10;2:1)と経験の両方とも矛盾しますが、次のとおりです。

「改心していない者と偽物だけが、自己追求と自己主張をする罪の生活を実践することになる。』[\[253\]](#)

9 節の円環論法の構造に注目してください。6 節と 9 節も包含を形成しています。

”A 主のうちにとどまる者は誰も罪を犯さない (6a)

B 罪を犯した人は皆… (6節)

A 正しく行動する人(7節)

B 罪を犯す者(8節)

A 神から生まれた者は誰も罪を犯さない(9節)。」[\[254\]](#)

ヨハネは、読者が罪を犯すべきではない5つの理由を説明しました。(1) 主に会う準備ができています(3節)。(2) 罪は違法であるからです(4節)。(3) それは非キリスト教的なものだからです(5-7節)。(4) それは極悪非道だからです(8節)。(5) それは神の子としては不自然だからです(9節)。[\[255\]](#)

3:10a 信者の人生における罪の有無は、その信者と神とサタンの両方との関係の証拠となります。それは、私たちが人生の特定の時期に誰の権威の下で生きているかを示します。ヨハネは世界を2つの階級に分けました。その血統が神聖なものであるか、悪魔的なものであるかです。悪魔に属する者は、救われているかどうかにかかわらず、真理に反対して悪魔の働きをします(マタイ 13:38、16:23、ヨハネ 8:44、使徒13:10、第二ヨハネ9参照)。真実に反対する一つの形態は、真実を無視することです。救われた人々は、悪魔に属していませんが、時々悪魔の導きに従ってしまうことがあり、その働きを行うという意味で悪魔に属しています。悪魔に属する者の例は、ヨハネが以前に警告した反キリスト(複数形)です(2:22-23)。イエスは不信者のユダヤ人を「あなたがたの父である悪魔」の子どもたちと呼びました(ヨハネ8:44)。

「ここでのキーワードは『はっきりする』である。罪を犯したクリスチャンは、罪を犯したときに自分の本当の性格を隠し、聖さによってのみそれを明らかにする。一方、サタンの子は、罪によって自分の本当の性格を明らかにする。」[\[256\]](#)

クリスチャンは、義にかなった行動によって他のクリスチャンを識別することができますし、実際にそうしています。これは、すべての真のクリスチャンは例外なく良い行いをするだろうと言っているのと同じではありません(ヨハネ 15:1-8参照)。神のうちにとどまっているクリスチャンは良い行いを生み、他の人は彼らの敬虔な行動によって彼らをクリスチャンであると認識することができます。罪のない行動が生み出され、明らかになったのは、神の愛の現れです(1節)。ヨハネは、私たちの行動が救いを試すものであると言っているのではありません。彼の唯一の救いの試練はイエス・キリストへの信仰です(5:1、9-13)。彼はここで、神の子供たちがどのようにしてそのように現れるかについて話していました。

10節の最初の部分で、顕現に関するこれまでの議論が終わります。10 節は、もう 1 つのヤヌスの節です (2:28 参照)。前後の 2 つの方向を見つめた節です。

### C. **クリスチャンの愛を認識することを学ぶ 3:10B-23**

ヨハネは、クリスチャンであるかどうかはその人の義にかなった行動によって識別できることを明らかにしました。クリスチャンは、彼らに罪がないということでは識別されません。彼は決してそんなことは言いません。ヨハネが答え始めた次の質問は、「義」をどのように識別できるかというものでした。ヨハネの答えは次のとおりでした。それは道徳の中に見られるのでありません。不信者でも道徳的になれるからです。しかし彼らの道徳は兄弟愛の中ではみることができないのです。この箇所では、前後の箇所と同様に、兄弟愛というテーマが箇所の始まりと終わりを示し、別の包含を形成しています。

#### 1. **愛ではないもの 3:10b-15**

ヨハネは、愛とは何なのかを説明することから議論のこの部分を始めました。

3:10b 人生において義にかなった行動が欠けているということは、神との親密さが欠けていることを示しています。そのような人は神の命を現しているのではなく、悪魔の命を現しているのです。同様に、クリスチャンの兄弟や姉妹に対する愛がないということは、愛していない人には神との交わりがほとんどないことを示しています。愛は義にかなった行動の最も重要な具体的な現れです(ヨハネ 13:34-35; マタイ 22:37-39 参照)。ヨハネはこの特性についてさらに詳しく議論しました。

「福音の全体的な目的は、創造と愛を強めることです。[257]

「ここでの NIV の訳文『正しいことをしない者は神の子ではない』は、神学的動機に基づいた翻訳の暴走の典型的な例である。本文を言い換えているだけでなく、同時に誤った解釈をしている!」[258]神の子どもではないことについてここでは一つも記述されていません。まずそのようなことはあり得ません。兄弟を忌み嫌う前にその人は神の子どもです。救われていない人を忌み嫌うクリスチャンの兄弟はいないはずです...

愛のないクリスチャンは、神が彼のしていることに命を吹き込んでいないという意味で、神から出た者ではありません。この信者は神の側にいません。彼は神の働きではなく悪魔の働きをしているのです。

3:11 ヨハネとその忠実な追随者たちが最初から聞いていたメッセージは、イエスが弟子たちを愛したように互いに愛しなさいというイエスの命令でした(ヨハネ13:34-35; 15:12)。

3:12 カインが弟アベルを殺害したことは、神ではなくサタンによる支配を証明しました。カインはアベルの義のために嫉妬し、それが彼に弟を殺す動機を与えました(創世記 4:3-8; ヨハネ 8:40、42、44 参照)。

「妬みの定義を教えてください。『他人の優秀さや幸運を見て不満や不安を抱き、ある程度の憎しみと同等の利点を持ちたいという願望を伴うもの』。』」[\[259\]](#)

多くの場合、私たちはプライドのせいで、自分より正義の人たちを嫌うように誘惑されます。なぜなら、彼らと比べて罪悪感を感じるからです。これはヨハネの書簡の中で旧約聖書に言及している唯一のものであり、神の名前を除いてヨハネ第一書にある唯一の固有名詞です。愛と憎しみは、それぞれ正義と罪の典型的な表現です。[\[260\]](#)

「コミュニティ内で意見の相違が生じると、その結果として辛い感情が生まれる可能性があります。』」[\[261\]](#)

カインは救われていなかったから、ここには救われていない人物が登場しているに違いない、ということはいままでありません。聖書はカインが救われなかったとは言っていません。さらに、クリスチャンはカインがしたように殺人を犯しました(第一ペテロ4:15参照)。クリスチャンは、あらゆる種類の重大な罪を犯す可能性があります。真の信者が自分の兄弟や姉妹のクリスチャンを憎むことがあるのは明らかです。

3:13 わたしたちがクリスチャンとして互いに愛ある気遣いを感じたり、それを示したりするのであれば、不義な人々が自分たちよりも義人であるという理由でわたしたちを憎んだとしても驚くべきことではありません。どうやら、ヨハネの最初の読者は、ヨハネが「驚かないでください」と書いていたため、なぜ世が彼らを嫌うのか理解できなかったそうです。クリスチャンは世にとって、カインにとってのアベルと同じであり、つまり彼らよりも義人であるため、世が私たちを憎んでいても驚くことはありません。たとえば、私たちに対して怒っている未信者は、私たち個人に対してではなく、私たちの内なる神に対してもっと反応していることがあります。

「クリスチャンが世の憎しみにさらされたときに勝利するために最も重要なのは、憎しみが正義に対する罪深い世の自然な反応であるという認識です。』」[\[262\]](#)

「著者は、世界が常に信者を憎んでいるとは言っていません。世界は常にイエスを憎んでいるわけではありません。しかし、信仰共同体が世界の貪欲、強欲、憎しみ、邪悪を暴露するために行動するときはいつでも、それを期待しなければなりません。そしてイエスが神殿でなさったように、もしそれがその邪悪な行為にまで介入した場合には、苦しみと残酷な死が予想されるかもしれません(ヨハネ15:18-19、25、17:14参照)。」[\[263\]](#)

3:14 彼のクリスチャンへの愛は、私たちの中にキリストの新しい(永遠の)いのちが存在していることを示しています。愛は、神の約束に基づいて、私たちがそのいのちを持っていることを確信するための二次的な根拠です(5:13参照)。死と生は、存在の大きく異なる2つの領域です。このコントラストは、信者の人生に起こった大きな変化を示しています。全く愛さない人は、永遠のいのちではなく死の中に留まっている人です。明らかに、未信者の中には非常に愛情深い人もいますが、彼らの行動は彼らの本性に反しています。ヨハネは自分の主張を明確にするために極端な例を取り上げました。彼のコントラストは死と生、憎しみと愛、闇と光です。

3:15 「すべての人」にはクリスチャンも含まれます。殺人は憎しみの究極の外面的表現です(マタイ 5:21-22 参照)。この聖句を締めくくる言葉の鍵は、「彼の中に留まる(とどまる)」という言葉です。ヨハネは、永遠のいのち(すなわち、イエス・キリスト;1:2)が自分を制御し、神との交わりのうちに歩んでいるクリスチャンは誰も殺人を犯さない、ということを書いたかのように思われます。信者の中には殺人を犯した人もいますが、そのとき彼らは忠実な信者ではありませんでした(ヨハネ15:4参照)。NIVの言い換え「いかなる殺人者もその中に永遠のいのちを持っていない」は、信者は殺人を犯すことができないことを暗示しているため、誤解を招きます。

## 2. 愛とは何か 3:16-18

兄弟クリスチャンに対する憎しみが愛の対極であるなら、真のクリスチャンの愛とはどのようなものでしょうか? ヨハネは説明を続けました。

3:16 殺人者カインの行為とは対照的に、私たちはイエス・キリストが私たちのために命を捨ててくださったことに愛を感じます(ヨハネ10:11参照)。これはカインがしたように、他人の命を奪うこととは逆の行為です。イエス・キリストは一度命を捨てましたが、ギリシャ語の動詞の時制が示すように、私たちは自己犠牲の愛において繰り返し命を捨てる必要があります。

「ほとんどの人はキリスト教を愛せよという命令と結びつけており、その教えを自分自身の愛の概念に基づいて理解すると、キリスト教につい

ですべてを知っていると考えます。ヨハネは、愛とは何を意味するのかを読者に明確に説明する必要があると感じました。[264]

『命を捨てる』のは簡単である。殉教は英雄的で爽快だ。誰にも気づかれず、誰にも称賛されない些細な犠牲や自己否定に日々直面しながら、小さなことをすることは難しい。[265]

「愛とは、他の人のために何でもする用意があることを意味する。[266]

3:17 私たちには、兄弟の代わりに死んで兄弟の命を救う機会がないかもしれません。それにもかかわらず、私たちは次善の策、つまり物質的な必要があるときに彼の命を維持することができますし、そうすべきです。困っている兄弟や姉妹に自分を生かしてくれるものを与えるとき、私は主イエスの自己犠牲的な愛の模範に従いました。

「神に対する私たちの愛は従順によって表されるが、他のクリスチャンに対する私たちの愛は犠牲によって表される。[267]

3:18 本物の愛の証拠は口先からの言葉ではなく、重要な行為、つまり空虚な言葉ではなく具体的な行為です(第一コリント13:1、ヤコブ2:15-16参照)。

「この聖句の主な関心は、ヨハネ教会に忠誠を主張したすべての人々の従順で積極的な愛を奨励することである。[268]

### 3. 愛が信者にもたらすもの 3:19-23

兄弟たちに対するそのような自己犠牲的な愛の実践は、私たちが祈るとき、そして将来、神の裁きの座で神の前に立つときに、神の御前で大胆さを与えることができます。

3:19-20 「そうすることによって」とは、ヨハネが17-18節で言ったことを指します。兄弟たちへの愛を目に見える形で示すことは、信者の真の性格、つまりその人の義を示します。これらの愛の行為は、私たちがもっと必要を満たしていないことに罪悪感を感じるときに慰めとなるはずですが、それは私たちがどれほど寛大であっても感じる可能性のある状態です。[269]

「確信は、信者の通常の経験と特権となるように設計されている。[270]

ギリシャ語のペイトは「安心する」と訳され、「静かにする」という意味もあります。[271]その意味は、愛を示すことによって(17-18節)、私たちは真理の中を歩んでいるという確信を得て、もっと何もしなかった罪があると非難されても心を静めるということです。



私たちは、私たちの罪の心よりも偉大な神が私たちの本当の動機(「すべて」)を知っていることを思い出すことによって、誤った罪悪感(「心が私たちを非難する場合」)を克服することができます。 私たちが自分自身を判断して非難するように、神は外見に基づいて判断しません。

「この言葉[御前、19節]は、裁きの日(4:17)、人の心を予感で満たす機会に神の御前に立つことを指しているのかもしれませんが。しかし、ここでの文脈は祈りの1 つ: 神の前に罪悪感を感じているなら、自分の願いを持って神に近づいてみましょう。全体的には、これがヨハネの心の中にある可能性の方が高いようです (第一テサロニケ 1:3; 3:9[-10] 参照) ] その後、スムーズに 21 節に移ります。[272]

3:21-22 自己犠牲の行為によって示される兄弟たちへの真の愛によって、信者はイエス・キリストが現れるときはいつでも、恥じることなく、自信を持ってイエス・キリストと向き合うことができます(2・28参照)。ヨハネはここで、明確な良心の重要性を再度強調しました(1:7;2:2;ヘブル人への手紙9:9、14;10:2、22;第一テモテ1:19参照)。恥を知らないこと(明白な良心)は、今でも祈りのうちに神の恵みの御座に近づく適切な大胆さを私たちに与えてくれます(ヨハネ8:28-29参照)。それが神の御心であれば、私たちは自分の願いを聞き入れます(「私たちが求めるものは何でも神から受け取ります」)。ヨハネはこの条件についてここでは述べませんでした、後で言及しました(5:14-15)。

「祈りには機械的なものや魔法的なものは何もない。祈りが効果的であるためには、とりなし者の意志が神の意志と一致している必要がある。そして、そのような意志の一致は、信者がキリストのうちに生きている場合にのみもたらされる。」[273]

「従順は、その祈りが神の子によって捧げられた場合、祈りが聞かれるための第一の条件だ。関連する第二の条件は、進んで奉仕することだ。つまり、神が喜ばれることを常に『行う』(ポイウメン、プレゼントする)という決意である。」[274]

3:23 イエスは使徒たちに、イエスを信頼し、互いに愛し合うように教えました。これは神の教えを抽出したものです。特にイエスは、彼らが御父に祈るとき、イエスの御名の効果的な力を信じるようにと教えられました(ヨハネ 14:12-15;16:24)。これは祈りに対するさらなる確信の根拠となります。

「この手紙とヨハネ13章から17章のイエスの言葉との間には頻繁に接点がある。」[275]

この聖句を信じるということは、クリスチャンになってから信じるということではなく、おそらく永遠の救いを信じることを指しているのでしょう。ギリシャ語の動詞(アオリスト)の時制は、信仰の対象、つまり御子イエス・キリストの名前と同様に、これを示しています。

「イエス・キリストの御名を信じるということは、イエス・キリストをありのままに受け入れることである。」[\[276\]](#)

「兄弟を憎むクリスチャンは、神と完全に乖離した行動をとり、カインの殺意を体現し、死の領域に『とどまっている』のです(10b-15節)。対照的に、愛情深いクリスチャンは、ご自身を犠牲にされたイエスの愛を自分自身が実際に行なうことによって、また真理に従うこととして捉えています。(16-18節) そうすれば、罪悪感に苛まれた心を静め、祈りの中で神の前に最高の確信を得ることができ、そして、彼が神を喜ばせているからこそ、彼の祈りが答えられることを期待できるのです(19-23節)。」[\[277\]](#)

#### **D. 愛の神を認識することを学ぶ 3:24-4:16**

もう1つの包含は、この箇所のテーマを特定するのに役立ちます。それは、神が信者のうちに宿っておられることです(3:24; 4:16)。神が私たちのうちに住んでいること、そして私たちが神のうちに住んでいることは、私たちがキリストの裁きの座を待ち望むときに自信を持つために不可欠です(2:28; 4:17-18)。キリストの裁きの座を予期して確信を持つことが、この手紙の本文の主題です(2:28-4:19)。

##### **1. 神が内在することが確認される 3:24**

従順は相互に存続することになります。神は人間の中にあり、人間は神の中にあります。神は、ご自身の臨在、交わり、力、祝福をもってすべての従順な信者のうちにとどまっておられますが(ヨハネ15:10-11、14参照)、神はすべての信者の内に住んでおられます(ローマ 8:9、第一コリント12:13参照)。神が私たちの内に宿っておられるという証拠は、私たちの内に、また私たちを通して神の御霊が現われることです。これは、第一ヨハネの中で聖霊について初めて明確に言及されたものです。

「したがって、この判決は、従うことの定義です。従うことは、彼の戒めを守ることです。」[\[278\]](#)

##### **2. 神の霊が認められる 4:1-6**

3章24節の聖霊についての言及により、ヨハネは警告するために少し立ち止まりました。神の霊はこの世に現れる唯一の霊ではありません。霊的な存在の現れは単に聖霊の兆候に違いないと考える人もいます。使徒は、世界で働いている他の霊と聖霊を区別する方法を説明しました。

「第 3 章では、神の子と悪魔の子という 2 つの家族の対比を学んだ。ここでは、キリストの霊と反キリストの霊という 2 つの霊の対比が見られる。」[\[279\]](#)

4:1-3 ヨハネはこう書きました:信じるのはやめなさい。彼の最初の読者の中には、明らかに誤った教えを信じていた人もいたようです。

「軽信とはだまされやすさを意味しており、一部の信者は精神主義的なごまかしの最近の流行に簡単に騙されてしまう。」[\[280\]](#)

多くの偽預言者が世に出ているため、神の霊を偽りの霊(つまり、偽りを主張する霊)から区別する必要があります(2:18-27参照)。[\[281\]](#) 偽りの霊(キリストに反対する霊に触発された発言や人物)は、偽りの教えを生み出します。ヨハネはここで偽預言者について、将来の事柄を予告する者としてではなく、彼らに靈感を与えた霊の代弁者として語っていました。[\[282\]](#)

『霊を試す』とは、競合する主張の中から選択をすることだ。[\[283\]](#)

神の霊が人に取り憑いているのか偽りの霊が取り憑いているのかを判断できるヨハネのテスト質問は、次のとおりです。「その人はイエス・キリストについて何を信じているか?」ある人がイエス・キリストの受肉(受肉して来られたということ)を否定する場合、それは偽教師たちがヨハネの最初の読者の間で宣伝していた異端でした。その人は反キリストの霊を持っています(2:18-27参照)。つまり、使徒たちが教えたキリストの教義の否定、正統なキリスト論からの逸脱、イエス・キリストに反対する精神の証拠です。

「私たちは、現代の思想によって、悪を『誤り』、文明の『成長痛』、または単に説明のつかない問題とみなすことに慣れすぎているため、神自身の説明である事実を容易に受け入れられないのです。世界にはびこる悪霊です。」[\[284\]](#)

「神聖な御霊の臨在を試すのは、受肉した者の告白、あるいはより正確には、受肉した救い主の告白である。福音は、ある人物(イエス)を中心に据えており、その人物に関するいかなる真実も、たとえその人物に関する最も偉大な真実であってもその中心に置かれることはない。」[\[285\]](#)

ヨハネは、彼らの働きによって偽りの霊が見分けられるとは言っていないことに注意してください。彼らの言葉によって、彼らが偽りの霊であることが分かった彼は言いました。これは、旧約の下での偽預言者に対する厳しい試練でもありました(申命記 13:1-5)。

「主イエスによれば、偽預言者は『その実によって』試される(マタイ 7:16-20 参照)。一般的な解釈に反して、これは偽預言者がその行いによって試されるという意味ではない。それどころか、マタイ 12:33-37 が証明しているように、彼らの実は彼らの言葉なのです。実際、主ご自身が言われたように、彼らは「羊の皮をかぶってあなたのところに来る」ので、実際には「貪欲な狼」であるにもかかわらず、羊のように見えるのです(マタイ7:15)彼らの行動ではなく、メッセージによって羊から識別されるのです。」[\[286\]](#)

ヨハネは、イエスを否認するすべての霊ではなく、イエスを告白しないすべての霊であると言いました(3節)。多くの場合、異端的な教えは、重要な聖書の真実を単に肯定しないことによって、真実からの逸脱を隠しています。彼らはイエスがキリストではないと宣言するのではなく、イエスがキリストであることを断言できません。

4:4 ヨハネの読者はこれまで、イエス・キリストに敵対するこれらの人々に内住する聖霊によって彼らを克服してきました(「あなたがたのうちにおられる方」3:24、4:2、13参照)。聖霊はサタン(「世にいる者」)よりも強い(「偉大な」)のです。神の言葉を疑い、否定し、無視し、従わないというサタンの誘惑に抵抗するとき、私たちはサタンとその手先、そしてその影響力に打ち勝つのです(第一ペテロ5:9、創世記3章、マタイ4章参照)。「あなたは神から来たのです」は、2節から6節を包含する視交錯の中心です。[\[287\]](#)

4:5 反キリストの教えは世の人々の心に訴えるものがあります。なぜなら、それらは世から来たものであり、世の観点を共有しているからです(ヨハネ3:31参照)。多くの宗教運動は主に偽りの教義に魅力を感じる救われていない人々で構成されているため、異端派は正統派よりも大きな魅力を持っています。

「私はあなたの教会に数千人が来るかどうかは気にしません。それは重要なことではありません。それよりも私はメッセージに興味があります。神の言葉は伝えられていますか？その言葉は神の御霊が受けとり使うことができるように聖霊の力によって与えられていますか？」[\[288\]](#)

「競争を合言葉とする人間が、奉仕を基調とする倫理をどのようにして理解できるのでしょうか？」[\[289\]](#)

『世界』(コスモス)という用語は、おそらく2つの方法で理解されるべきです。1つはキリスト教の信仰に対置される思想体系として、もう1つは偽教師によって誤った方向に導かれた共同体メンバーの説明とし

てです。コミュニティは福音の真実を放棄するよう簡単に説得されましたが、信者を当惑させてはなりません。』[\[290\]](#)

『世界』という言葉には、いくつかの意味のニュアンスがあります。3節では、人間が住む地域を意味しますが、4節では、むしろ罪深い人類を指します。一方、5節では、そのような人々に見られる罪深い原理に重点が置かれています。』[\[291\]](#)

4:6 「わたしたち」と「私たち」は、おそらく1章 1-4 節にあるように使徒の目撃者を指しますが、おそらくすべての信者も含まれます。神をよく知っている信者たちは使徒の教えに積極的に反応します。

「神は単に何かを教えるために聖書を与えたのではなく、私たちを何かにするために聖書を与えたのです。』[\[292\]](#)

教えを使徒の教義と比較することによって、私たちはその教えが真実なのか誤りなのか、つまりその源が聖霊にあるのか、それとも世界を動かす霊であるサタンにあるのかを判断することができます。真実と誤りを区別する方法は、その教えを聖書の教えと比較することです。ヨハネはここで、ある教師を別の教師と比較しています。[\[293\]](#)

「人々がイエスが肉体となって来られたと告白するとき、神が御子の福音で彼らに語られるのを聞いてそれに従順であるとき、そのとき『真理の霊』が存在し、活動していることとなります。人々が福音を否定するとき、彼らはそれを神の言葉として聞かず、イエス・キリストが肉となって来られたことを告白しないでしょ、そのときは『偽りの霊』が働いているのです。』[\[294\]](#)

「ヨハネは偽教師たちに騙されないよう読者に警告しているので(2:24; 第二ヨハネ7-11)、真の信者が道を誤る可能性を考慮していたようです。』[\[295\]](#)

「使徒は、神の子と神の子ではない人々を区別するためではなく、次の言葉から明らかなように、真理の霊と誤った霊を区別するために試練を与えているのです。そして、これについて彼は次のように言っています。真理の教師の場合、神を理解する人々には彼らの話は聞き入れられますが、神から出ていない人々には拒否されます。』[\[296\]](#)

### 3. 神の内在が認められる 4:7-16

ヨハネは、読者が聖霊と間違える可能性のある偽の霊、つまり信者を世の道に誘惑する霊についての警告を残しました。彼は自分の中心テーマの一つである兄弟たちへの愛に立ち

返りました。第一コリント13 章には神の愛に関するパウロの偉大な言葉が含まれているように、第一ヨハネ 4:7-16 にはヨハネの言葉が含まれています。

「聖ヨハネの議論はすべて一つの結論に達し、彼の訴えは一つの意図を持っている。『愛する人よ、私たちは互いに愛し合しましょう』。』[\[297\]](#)

「…この箇所は、すべての信者に要求される愛の性質を正確に説明しているので、2:3-11 と3:10-24 に含まれる教えの延長として見ることができます。これより前に、ヨハネは愛の命令をすでに輝いている「真実の光」(2:8, 10)と関連づけ、また愛によって証明される(3:14-15)「永遠のいのち」とも関連づけています。ここで、ヨハネはクリスチャンの愛に必要なものと神ご自身の本質そのものを結びつけています。私たちは神ご自身の愛、そしてキリストと教会において神の愛ある行いに応えるために愛していくべきなのです。』[\[298\]](#)

この潜望鏡には、真実の愛の性質を包括的に扱うことが含まれています。

「霊を欺くことに気をつけるという警告の直後にヨハネが相愛を呼び掛けるところには、かなりの司牧的知恵がある。読者が心に留めておられるように、ヨハネは自分の勧告が及ぼす可能性のある有害な影響を予期しなければならないことを知っていたのである。』[\[299\]](#)

## 愛の源 4:7-10

4:7 愛と信仰(つまり、キリストの真の教義を認めること、1-6節)は神の御霊の産物です。神を知っている(つまり、神と親密な交わりを持っている)信者(神から生まれた人)は愛する人たちです(2:3-5参照)。この節と次の節(8-14節)の「わたしたち」と「わたしたち」は、やはり使徒たちとともに読者を指しています。

「新約聖書が課している愛には、他者の幸福を求める激しい情熱が含まれており、この愛の源泉は神にあります。』[\[300\]](#)

「ある男の子は、幼稚園の初日から帰ってくると、母親に何を学んだのかと尋ねられました。その子は、『僕が好きじゃない友達と遊ぶことを教わった』と答えました。おそらくこれは、この子どもが学ぶ最も重要な教訓の1つでしょう。…信者の中に、幼稚園時代に戻らなくてはいい人もいるのではないのでしょうか？ 彼らは、嫌いな人を愛する方法についてのこの貴重な教訓をまだ学んでいません。』[\[301\]](#)

この聖句は、この手紙全体の主張を簡潔に要約したものです。

4:8 愛の欠如は、愛していない人が神との親密な交わりを持っていない(神を知らない)ことを示しています。それは必ずしも彼が決して神から生まれたわけではないことを示しているわけではありません。神は光であるため、神のうちにとどまる者は神の光の中を歩みます(1:5, 7)。神は義なる方ですから、神のうちにとどまる者は義を行うのです(2:29)。まさにそのとおり、神は愛であり、神のうちに住む者は神の愛に満ちた性質を現します。神はまた、光(1:5)、霊(ヨハネ 4:24)、そして火(ヘブル12:29)でもあります。これらはすべて、神の特定の特徴を理解するのに役立つ比喻です。

『神は愛である』と主張する使徒は、神が愛でありそれ以上のものではないということを意味しているのではありません。この性質は無数の合計を構成するものではありません…」[\[302\]](#)

「神の活動はすべて愛に満ちた活動である。神が創造するなら、愛によって創造される。神が統治されるなら、愛によって統治される。神が判断を下すなら、愛によって判断される。神の行うことはすべて、神のご性質の表現、つまり愛することである。」[\[303\]](#)

『神は愛である』は、この手紙の中で神の啓示の最高峰の一つとして正しく認識されています。論理的には、この記述は『神は光である』(1:5)および『神は霊である』(ヨハネ4:24)と平行しています。) 神の性質の3つの偉大な表現の1つとして…「神は霊である」は彼の形而上学(現実の基本となる性質を研究する哲学)的な性質を説明し、「神は光である」と「神は愛である」は特に神が自分自身を人々に明らかにしたときの彼の性格を扱っています。」[\[304\]](#)

「神は愛である(英語でGod is love)に冠詞Theが欠けていることによって、愛が単に神が持っている特質ではなく、愛が神の本性そのものであることを示している。さらに、神は愛であるため、神が示す愛は、外部の原因によるものではなく、神ご自身だけによって表されるものである。神という言葉の前に冠詞が付いているが、これは、この発言が可逆的ではないことを意味しており、『愛は神である』とは読めない。」[\[305\]](#)

「ヨハネは愛が神であるとは言っていない。彼は神は愛であると言っているのだ。」[\[306\]](#)

4:9 人々に対する神の愛の証拠は、神が私たちに永遠のいのちを与えるために、ご自分の独り子(直訳:ただ生まれた者)を送ったことです(ヨハネ1:14, 18, 3:16参照)。[\[307\]](#) 私たちに対する神の愛を疑うことがあるなら、この偉大な聖句について落ち着いて考えてみる必要があります。「私たちが

彼を通して生きるため」には、今の命の満ち足りた状態(ヨハネ10:10参照)と永遠の永遠のいのちの両方が含まれると私は考えています。

4:10 私たちに対する神の愛は、人間の神への愛に応えたものではありませんでした。まず初めに神が私たちに手を差し伸べてくださいました(10節)。イエス・キリストは「贖いの犠牲」(NIV)、つまり「私たちの罪のためのなだめの物」となりました。

#### 愛の励まし 4:11-16

4:11 神によって示された愛は、私たちが他の人に愛を示す模範なのです。神が当時、イエス・キリストを遣わすことによって私たちの間で愛を明らかにされたように、今も私たちが互いに愛し合うように、私たちの間でご自身の愛を明らかにされています(12-13節)。

「全人類の中で救い主の犠牲の死を超える者は誰一人としていない。すなわち兄弟や姉妹の誰も私たちの犠牲の愛を超えることはできない。」[\[308\]](#)

4:12 何らかのフィルターなしで神の純粋な本質を見た人は誰もいません(ヨハネ1:18参照)。聖書の著者が人々が神を見たと言ったのはテオフィニー、つまり人間または天使の姿をした神の顕現であると述べた例(創世記 18:1-22; 出エジプト記 33:18-23 など)。[\[309\]](#)

私たちが互いに愛し合うときはいつでも、神が私たちと緊密な交わりに留まることが可能になります。さらに、神の愛は私たちの内に豊かさと深さをもたらしますが、それは私たちが互いに愛し合う場合にのみ可能です。そのとき、それは最大限の力を発揮します(19節)。

ヨハネ第一書には神の愛の3つの段階があります。これらの段階は、世に表わされる愛(4:9)、神の家族に与えられる愛(3:1)、そしてこの家族内のより小さなグループ(つまり、神のうちに住む人々)の中で完成される愛です(4:12)。神の愛は、それ自体を超えた愛の対象を見つけるまでは完全には達しません。そのとき、誰も見たことのない神が、この愛の実証において明らかになるでしょう。

「私たちに対する神の愛は、それが私たちの中で、あるいは(それが意味するかもしれないが)キリスト教徒の交わりの中の『私たちの間で』再現されるときにのみ完全になる。」[\[310\]](#)



人間の家族でも同じ現象が起こります。子どもが親の一人と同じように何かを言ったり、行ったりするとき、私たちは子どもの行動の中から親を見ることができます(3:9 参照)。

「神の民に示された神の愛は、神がこの世で持つ最も強い弁証である。」[\[311\]](#)

ヨハネは、クリスチャンは兄弟を愛していると主張しました。この点を強調した理由の1つは、間違いなく、読者の福祉に対する彼の司牧的配慮でした。もう一つは、信者たちが互いに愛し合うことで、目に見えない神を世界に見えるようにするという事かもしれません。

4:13 信者が神のうちにとどまること、そして神がその人のうちにとどまることは、神の御霊から来る愛の実証によって明らかになります。聖霊は私たちの従順の源であるのと同じように、変わらぬ信者の愛の源です(3:23-24 参照)。

「彼[神]は私たちには見えません。神は私たちの中でなにか神の臨在を証しをしてくださいましたか?神は私たちを聖霊にあずかるということで、そのような証しを与えてくださいました。」[\[312\]](#)

4:14 神の臨在は、互いに愛し合うクリスチャンの生活の中に見ることができます。神はその愛を生み出します。ヨハネの読者のほとんどは、使徒たちのようにイエス・キリストを実際に見たことはありませんし、私たち全員も見ることがありません。しかし、私たちも神を見ることができ、神がイエス・キリストを救い主として世に遣わされたことを使徒たちに証しすることができます。私たちは使徒たちの経験を共有することができます。ヨハネはそれがこの手紙を書く目的であると言いました(1:3-4)。クリスチャンが互いに愛し合うのを見るとき、私たちは神の愛の現れとその愛の背後にある神の命の両方に神を見ることができます。したがって、この聖句はヨハネの議論の重要なポイントです。

ヨハネの手紙の中で救い主という用語を使用したのはここだけです。また、彼の福音書にも一度だけ登場します(ヨハネ 4:42)。

教会がイエスの救いについて世界に証しするためには、弟子たちの交わりの中で救い主の愛を再び示すこと以上に効果的な方法はありません。」[\[313\]](#)

「第一ヨハネの手紙の中で、この聖句ほど重要な聖句はない。」[\[314\]](#)

4:15 イエスが神の子であると告白することだけが、神のうちに住むための唯一の条件ではありません。それは誰かが住んでいるかもしれないという一つの証拠です。とどまっていな人の中でも、この告白をする人と、しない人がいます。告白は最後の段階であり、証言する段階です(1:9、2:23、4:3、ローマ10:9-10参照)。

「神が誰かの中に『住んでいる』という概念は、ヨハネの福音書と豊かな関連性を持っており、そこでメノが30回以上出てきます。この言葉は単にどこかに住むことを意味することもあります。人の本拠地はその人が『住んでいる』場所です(ヨハネ1:38、39a ; 2:12; 4:40 [2x]; 7:9; 8:35 [2x]; 10:40; 11:6、54)。しかし、そこにより完全な意味があります。バプテスマのヨハネによれば(1:32、33)、神の霊が降りてイエスの上に『とどまった』のです。御霊はイエスの常に伴侶でした。イエスの教えに『留まる』または『とどまる』ことは、イエスの真の弟子であることです(8:31)。弟子は知らされ、イエスが命じ、教えたすべてのことによって導かれました。父なる神は、地上の日々の間、イエスとともに『留まりました』、またはイエスとともに『住んでいました』(14:10)。御父はまさにイエスが語られた言葉の源であり、イエスは絶えず父の愛の中に『留まり』ました。父の愛(15:10b.『永続する』は父、子、聖霊が関わる現実を描写しています。)」[315]

4:16 この聖句は、この本のこの部分を要約しています(3:24-4:16; ヨハネ6:69 参照)。ヨハネは、親密な知識(知るようになる)と親密な交わり(残る)について話していました。「私たち」には使徒とともに読者も含まれます。「私たちにとって」とは、9節にあるように「私たちの間(または中に)」であるべきです。

「信者の集団は、互いに愛し合うことによって神の愛をどれだけ表わすかによって、実際に強くなることはありません。」[316]

「この時点でのヨハネの思考の段階が今明確に現れています。信仰(イエスを神の子として認める、15節、そして神が私たちに対して持っている愛に信頼する、16節a)は、神と信者の間に相互の内住をもたらします。そのようなものです。その結果、個人的な関係は「愛に生きる」ことによって表現され、永続するのです(16節b)。信者の神と他の人々(または他の人々の中の神への愛、12節参照)に対する愛は、活性的かつ持続的なものでなければなりません。」[317]

ヨハネが言いたいのは、使徒たちが神を見たのと同じような感覚で、読者も個人的に神を見てきたということです。使徒たちは、御子イエス・キリストの中に神を見たのです。神はイエス・

キリストを通して使徒たちに愛を明らかにされました。読者は、互いに愛し合う神の霊の内住の信者たちの中に神を見たのです。その結果、ヨハネの読者も使徒たちと同じように真理を証しすることができ、使徒たちと同じように神との親密な交わりを楽しむことができたのです。

「今日、あまりにも多くの『証し』は単なる口先だけです。人々は愛の表現を必要としています。」[\[318\]](#)

### E. キリストの裁きの座で大胆に行動する 4:17-19

ヨハネは、信者が神のうちにとどまることの重要性について、自分が書いたものから結論を導き出しました。それは彼がこの書簡の本文のテーマ節で紹介した結論です。「さあ、子どもたち、キリストのうちにとどまりなさい。そうすれば、キリストが現れるとき、私たちは確信を持つことができ、来臨のときに御前で恥じることはありませんを。」(2:28)。

「信者は、御父への愛が全うされていることをどうやって知ることができるでしょうか？ 第一ヨハネのこの段落[4:17-5:5]は、4つの証拠[つまり、自信(4:17-19)、誠実さ(4:20-21)、喜びに満ちた従順(5:1-3)、そして勝利(5:4-5)]を示しています。」[\[319\]](#)

4:17 私たちの愛は、裁きの日(つまり、キリストの裁きの座での私たちの行いの評価; 第一コリント3:12-15; 第二コリント5:10; ローマ14:10-12)の日を待ち望むときに自信を持てるという意味で、完全になります(「完全になっている」)。ここで見られる神とクリスチャンの特徴は私たちの愛です。クリスチャンは、他の人に愛を示したなら、キリストの裁きの座を恐れる必要はありません。神と他の人を愛することによって、私たちは義なる裁判官であるイエス・キリストに似ていることを示します。したがって、愛を与えることは大胆さ(自信)を獲得することです。

ここでヨハネは、神の愛は私たちに対して完全に達する(ギリシャ語 *meth hamon*)と言いましたが、4:12では神の愛は私たちの中で完全に達する(ギリシャ語 *en hamin*)と書きました。それが私たちの中で完全に達すると、他者との適切な関係が存在します。つまり、憎しみは存在しません。それが私たちにとって完全に達すると、神との適切な関係が存在します。つまり、恐れがなくなるのです。

イエスが御父のうちにとどまり、その結果、試練や死に直面しても自信を持ったように、私たちもキリストのうちにとどまり、世の敵意にもかかわらず自信をもつことができます。神のうちにとどまることはイエスに自信を与え、それは私たちにも自信を与えます。

「イエスは目に見えない世界におられ、私たちの任務はイエスを見えるようにすることです。イエスにとって私たちは、イエスが肉体を持って

いた時代に父にとってそうであったのと同じです。「Dei in aspectu aspectabilis imago」[「目に見えない神の目に見える像」]。】[\[320\]](#)

4:18 私たちが他人を愛するとき、キリストの裁きの座を待ち望む時、恐れる必要はありません(ローマ8:15、ヘブル2:15参照)。愛する人とは、もちろん、神が支配的な影響力を行使している人(つまり、とどまっているクリスチャン)です。他人を愛さない信者は罪悪感を感じ、おそらく意識的ではないにしても潜在意識的に、裁きに直面することを恐れます。この恐怖は罰です。彼の罪の意識がそのひとに罰を与えるのです。

「罰を予期することによって恐怖が、今もなお残っており、罰の予感に耐え、それを経験します…」[\[321\]](#)

「…恐怖は、クリスチャンが実際には神との交わりの可能性をすべてまだ実現していないという観察の産物です。彼らにはまだ救われていない状態がたくさんあります。」[\[322\]](#)

キリストが私たちのために死なれたことで、私たちは白い御座の裁きでの罪に定められる恐怖から解放されます(ローマ8:1)。私たちの永遠の生活は、キリストの裁きの座における恥の恐怖から私たちを解放します(2:28参照)。

他人を愛するクリスチャンは他の恐れを抱くかもしれませんが、キリストの裁きの座を恐れる必要はありません。彼が他人を愛しているという事実は、彼と神との関係が本質的にあるべきものであることを示しています。

ヨハネは、この手紙の他の場所で行ったのと同じように、ここでも神と他の人々への愛を用いていました(例えば、2:3-11)。それが神との適切な関係の最も重要な現れであり、唯一の現れではない、と彼は言いたかったのです。ヨハネは手紙のこの部分全体を通して、ギリシャ語のアガペ(愛、つまり、相手にとって最善のことをする)という言葉を使用しました。

人間のレベルでは、他人を完全に受け入れることだけが、愛における恐怖を取り除くことができます。例えば、結婚において、恐怖のない愛の関係とは、相手を全面的に受け入れるという決意を持った関係のことです。完全な赦しは、透過的な関係のためにも必要です(エペソ 4:31-32)。

4:19 私たちの愛する能力と愛を实践することは、どちらも私たちに對する神の愛から来ています(「神は最初に私たちを愛した」)。私たちは裁判官の前に立つことを恐れる必要はありません。なぜなら、私たちは神を愛しており、神も私たちを愛してくださっているからです。この聖句はこの手紙の本文のクライマックスです。

「キリスト教の確信(裁きの日の確信を含む、17節)の究極の根拠は、たとえ『完全な』ものであったとしても(18節)私たちの愛の中に見出されるのではなく、私たちに対する神の以前の愛の中から見出されるのです…」[\[323\]](#)

「愛の試合では、神は常に先手を打つのです。」[\[324\]](#)

内燃機関を搭載した自動車がガソリンで動くように作られているのと同じように、人間も愛で動くように作られており、愛以外ではうまく機能しない、と誰かが言っていました。

ヨハネはこの短い手紙の中で、愛という言葉のさまざまな形を合計 46 回使用しました。[\[325\]](#)

自信は、神との親密な交わりから得られる大きな成果の一つです。私たちは今も自信を持つことができますし、またイエス・キリストが私たちのために戻って来られるとき、あるいは死ぬときにもイエス・キリストに出会うという自信を持つことができます(2:28)。私たちは地上での祈りに確信を抱くことができ(3:21-22)、神の裁きの座の前に立って自分の管理責任について説明するときに確信を抱くことができます(4:17-19)。

## **V. 従順に生きる方法を学ぶ 4:20-5:17**

「ヨハネは間違いなく、自分の手紙を各会衆の成員全員に向けて公に読むことを意図していました——たとえ、第一ヨハネの宛先となった読者が、この手紙が送られてきた教会の長老や指導者だったとしてもです。この公の朗読は、第一に、それは地方指導者の権威を強化し、彼らが修正主義者に対してより効果的に対抗できるようにするだろう。著者は使徒であったため、彼らの教義と個人的資質の両方を支持する(2:12-14参照)ことは極めて重要でした。しかし第二に、この手紙は、それを聞いたすべてのキリスト教徒にとって、そして後にそれを読み、研究し、説教を聞くことになる数え切れないほどの何百万もの人々にとって、教育手段となるだろう。」[\[326\]](#)

「使徒ヨハネは間違いなく、教会がこれまでに経験した中で最も偉大な教師の一人であったため、彼が説明した経験のレベルが、聴衆の中の未熟な人たちにとっては難しいことを十分に承知していたに違いありません。これまでのすべての結論としての役割を果たすこの書簡で、著者はキリスト教の経験に関する彼の教えが引き起こす可能性のある実際的な懸念に言及しています。」[\[327\]](#)

### **A. 兄弟愛の意味 4:20-5:3A**

ヨハネはさらに、兄弟たちをどのように愛するべきかを明確にしました。その過程で、彼は彼らを愛さないことの潜在的な言い訳に対処しました。

4:20 神を愛しているという主張は、兄弟たちの真の愛に代わるには不十分です。19 節では、そのような主張の可能性が残されています。したがってヨハネは、神を愛していると主張することは真の愛の証明ではないことを明確にしました。ヨハネの誇張的な言葉遣いでは、愛することができないということは憎むことを意味します。目に見えない神への真の愛は、目に見える兄弟たちへの愛として表現されます。目に見えない人を愛するより、目に見える人を愛するほうが簡単です。ここにもう一つの虚偽の主張があります(1:6、8、10; 2:4、6、9、22参照)。

「目は常に心に影響を与えます。目に見えないものが心を捕らえることは少なく、それによって心も捕われます。」[\[328\]](#)

これは、この書簡に含まれる7つのテストのうちの最後のテストです。

「最初の[1:6]では、宗教専門家は他人に対して正直ではありません。2番目の[1:8]では、彼は自分自身に対して正直ではありません。3番目の[1:10]では、彼は神に対して正直ではありません。4番目[2:4]ではキリストに対して正直ではありません。5番目 [2:6] では世に対して正直ではありません。6 番目 [2:9] ではクリスチャンの兄弟に対して正直ではありません。7番目[4:20]彼は暗黙的に(よく考えてみてください)すべての人に対して偽っています。」[\[329\]](#)

4:21 さらに、神は私たちに、神だけを愛するのではなく、神と兄弟姉妹の両方を愛するようにと命じられました(2:3; 3:23-24; 5:3)。

「キリストの人に対する献身的な言葉による表現の多くは、キリストの民に対する著しく非キリスト教的な態度と共存する可能性がある…」  
[\[330\]](#)

「互いに愛し合う義務を認識しないような、ある種の神への愛を抱くのは簡単です。そのような神への愛は、神の戒めに従わないので、神への真の愛には程遠いのです。」[\[331\]](#)

5:1 この聖句の最初の部分は、人が救われるために何をしなければならぬかを聖書の中で最も明確に述べているものの一つです(ヨハネ 20:31参照)。ヨハネがクリスチャンを定義したのはこれ以外にありません。私たちはナザレのイエスがキリスト(つまり、神が世の罪の身代わりの犠牲として与えると約束した油注がれた者)であることを信じなければなりません。クリスチャンを定義するのは、ライフスタイルでも善行でも神への従順でもなく、イエス・キリストへの信仰です。

信仰における私たちの兄弟姉妹は、イエスがキリストであると信じる人たちです。クリスチャンの中には共通点がほとんどなくても、同じ親を持ち、同じ家族の一員であるため、それでも彼らを愛することができるのです。

特定の人を愛することができないときに、他のクリスチャンを愛することができるのでしょうか？ 鍵となるのは愛の意味です。兄弟たちを愛するということは、彼らにとって最善のことにすることを意味します(アガペー神)。それは相手に対して愛情を感じるという意味ではありませんが、愛情の感情は、相手のために最善を尽くすという決意に伴うことがよくあります。神は私たちがすべての兄弟に対して平等に愛情を抱くことを求めておられるわけではありませんが、彼らにとって最善のことにすることを私たちに求めておられます。

5:2           私たちは神の戒めに従って他のクリスチャンを愛さなければなりません。神を心から愛する人は神の戒めに従います。この愛は感情だけでなく行動にも表れます。私たちが他のクリスチャンを最も愛するのは、神に従うときです。

5:3a           私たちが神と人々を愛していることの基本的な証拠は、神の言葉に従うことです。これには、兄弟のために喜んで犠牲を払う気持ちが含まれなければなりません(3:10-17参照)。神への愛を試すのはとても簡単です。私たちは神のご意志に完全に従うことにどの程度取り組んでいるのでしょうか？それが私たちの愛の尺度です。<sup>[332]</sup> ここでの神の愛とは、私たちの神への愛(客観的属格)を指しており、私たちに対する神の愛(主観的属格)ではありません。

この聖句における神と神の子供たちへの愛は、本質的に神の命令への従順によって定義されています。神や他の信者についてどう感じるかというよりも、彼らとどのように関わるかが重要です。

## **B. 兄弟愛の強化 5:3B-15**

兄弟たちへの愛が本当に神の戒めを守ることに尽きたら、どうすればそれができるでしょうか？それは難しい、あるいは不可能にさえ聞こえます。ヨハネはこの懸念に応え続けました。

5:3b           すべての信者は従順に不可欠な神への信仰をすでに実践しているため、神の命令は重荷ではありません(愛を打ち砕くほどの圧迫的なものです)(マタイ11:30、第一ヨハネ4:4参照)。

「神の戒めが重くないのは、神からの新生に伴う力だからです。」<sup>[333]</sup>

5:4 すべてのクリスチャンは、イエス・キリストへの初めの信仰によって世を克服しました。これは 3:9 の良い面です。神から生まれた者は誰も罪を犯しません。世、肉、悪魔に打ち勝ち続けるために、私たちがしなければならないのは、神への信仰を働き続けることだけです(ローマ8:37、第一コリント 15:57 参照)。ですから、聖霊が私たちが神に従うことを可能にしてくれるので、神の戒めは抑圧的なものではないのです。

「ヨハネが(AVの中で)『誰でも』ではなく『何でも』(ギリシャ語でゲゲンネメノン、中性の性別)と言っているのは印象的だ。これは、神から生まれたという経験そのものに、本質的に世界を征服するような何かがあることを示唆している。わたしたちは今、これが何であるかをすぐに告げられる。『そしてこれが世界に打ち勝った勝利、すなわちわたしたちの信仰です』。[334]

5:5 クリスチャンにとって、自動的に克服し続けることはできません。すべてのクリスチャンが世に打ち勝ち続けるわけではありません(第二テモテ4:10参照)。信仰によって生き続ける人(つまり、日々神を信頼し、従う人)だけが打ち勝つのです。しかし、イエスが神の子であると信じない限り、誰もこの世に打ち勝つことはできません。ヨハネがここで勝利者について言及しているのはこの意味です。すべてのクリスチャンが克服できるのは、本質的にイエス・キリストを信じているからなのです。

5:6 この聖句の水は、おそらくバプテスマのヨハネがイエスに水でバプテスマを受けたことを指していると思われます。この血はおそらく十字架による贖いの死を意味していると思われます。[335]

「どうやら異端者たちはイエスのバプテスマをある程度重視していたようである。[336]

「ヨハネは、聖霊がイエスのバプテスマの時に降ったが、死ぬ前にイエスから去ったと主張した偽教師ケリントスを正している(4:2、3参照)。[337]

別の見方は、水は神の言葉を指し、血はキリストの死を指すというものです。[338] 第三の見解は、水は神の命の受け入れと御言葉による道徳的な清めを指し、血はキリストの流された血を通してクリスチャンに神の前での立場を与える司法的な清めを指すというものです。[339] 4番目の見解は、水はイエスのバプテスマの働きを指し、水はイエスの救いの働きを指すというものです。[340] さらに別の見方としては、水と血はキリストの受肉、イエスが十字架につけられたときに側から流れ出たもの、そしてバプテスマと主の晩餐を指しているというものです。



「…バプテスマは、私たちが清められ、洗われたことを証明し、聖体の晩餐は、私たちが贖われたことを証明します。水では浄めが表され、血では満たしが表されます。これら二つは、ヨハネが言うように、「…誰」というキリストの中に見出されます。「水と血で来た[第一ヨハネ5:6]、つまり、洗うためと、あがなうためです。」[\[341\]](#)

初代教会の一部の偽教師は、例えばケリントスや他のグノーシス主義者のように、神聖なキリストはバプテスマの際に人間のイエスの上に降臨したが、十字架につけられる前にイエスから去ったと教えました。[\[342\]](#)ヨハネはこの聖句でこの教えに言及しました。彼はこの教えは真実ではないと考えました。一人のイエス・キリストは、初臨の際に水のバプテスマを経験するためだけでなく、死ぬために来られました。

「イエスの本当の正体は、その終わりを含む彼の生涯全体を見ることによつてのみ発見される、と作家は言っているようだ。」[\[343\]](#)

5:7 聖霊は、今述べた証人に加えて、さらなる証人です。彼はバプテスマの際にイエスが神の子であることを証しました(マタイ 3:17)。ケリントスは、聖霊は神聖なキリスト、つまり当時イエスに降臨した神の油注ぎであると教えました。[\[344\]](#)ヨハネは、聖霊がイエスの身分の証人であり、聖霊はキリストではないと指摘して、この間違いを正しました。ヨハネはさらに、主が御霊であることを読者に思い出させ、御霊の証しの信頼性を強調しました(6節)。イエスがバプテスマを受けたときのイエスの正体についての御霊の証言は真実でした。なぜなら、御霊ご自身が真理であり、神ご自身であるからです(ヨハネ 14:6、15:26、16:14 参照)。

5:8 実際、真理についての証人は 3 人います(申命記 19:15、マタイ18:16、ヨハネ8:17-18参照)。これらの証人は次のとおりです。イエスのバプテスマの際の聖霊、そしてその後の使徒や預言者を通しての聖霊。イエスのバプテスマの水。そして彼の十字架の血。ヨハネはこの節で後者の二人を証人として擬人化しています。イエスのバプテスマの水は、イエスの真の人間性と人類との同一性を証明しました。イエスの十字架の血は、イエスが御父に完全に服従したことを証明しました。目撃者や預言者の証言、そして歴史上の出来事の証言は、イエス・キリストの神性と人間性を裏付けています。

「水と血の中に、私たちの浄めと救いの証しがあります。しかし、第一の証人である御霊が、私たちにそのような証しを確信させてくれるのです。この崇高な神秘は、キリストの十字架の中で見事に示されており、そのとき、キリストの神聖な脇腹から水と血が流れ出しました[ヨハネ 19:34]。』[\[345\]](#)

ヨハネ第一の後期のいくつかの写本では、「証言する」と「御霊」という言葉の間に他の証言が挿入されています。エラスムスはギリシャ語新約聖書の版にこれらの証人を含め、AV の翻訳者も彼の例に倣いました。[\[346\]](#)追加部分(斜体で強調表示)は次のようになります。「…天で証しなさい-父、御言葉、聖霊-そしてこれらの三つは一つである。そして地上で証しするのは三つある:御霊……」

「14世紀以前に三位一体論の追加を含む写本は一つもなく、教会時代の最初の450年間、三位一体論をめぐる論争でこの聖句が引用されることは一度もなかった。」[\[347\]](#)

5:9 神はイエスのバプテスマの時(マタイ3:17)、十字架につけられた時(マタイ27:51-53)、そして使徒たちを通して(ヨハネ19:35-37)、御子に関する証をされました。使徒たちの証言は最終的には神からのものでした。

5:10 ヨハネはイエスに対する神の証人の性格について話し(6-9節)、その証しの結果について話し始めました(10-12節)。証し(「神が与えられた証し」)は、内住聖霊が与えるイエス・キリストについての真実です。これは聖書の客観的な証しかもしれないし、あるいは信者の心の中の御霊の客観的な存在(「自分自身の中の証し」)かも知れません。御霊は両方の方法で証言しますが、私は後者の説明の方が好ましいと思います。誰かが御霊の証言を信じないなら、その人は神が嘘をついたと言っていることになります(1:10参照)。ヨハネは、福音を拒否することの意味を厳しい言葉で明確にしました。

「したがって、著者は、反対者たちと同じように神への信仰を公言しながら、御子に対する神の証言を拒否することを許すことはできない。そのような拒否を無知を理由に許すことはできません。証拠はあまりにも明白で、あまりにも重大である。むしろ、それは意図的な不信仰であり、その性質が最終的に神の存在そのものと性質を非難するものである。もしイエスが肉体を持った神自身の子でないなら、神はもはや真理ではない。彼は嘘つきである。」[\[348\]](#)

神の子を信じることは、イエスがキリストであると信じることと同じです(1節、ヨハネ3:15-16、18、20:30-31参照)。

「ここには『頭か心の信仰』や『単なる知的な同意に反して神に屈する信仰』などについては何も書かれていない。聖書は信仰をそのように複雑にはしていない。メッセージを理解したとき、次の問題が出てくる:それは本当なのか、それとも嘘なのか? 私たちはそれを信じるのか、信じないのか?」[\[349\]](#)

5:11-12 神の証言の内容は次のとおりです。永遠のいのちは神からの贈り物であり、イエス・キリストという人格から切り離すことはできません。偽教師の中には、永遠のいのちをキリストから引き離そうとした人もいます(2:25-26参照)。イエス・キリストと永遠のいのちはともに、神から与えられた一つの贈り物です。

「『永遠』のいのちは量的なものではなく、質的なものです。それは、時間に関係なく、神が信者がイエスとの関係の中でそれを分かち合えるようにする、最高の霊的および道徳的な聖活です。」[\[350\]](#)

「数年前、西アフリカのラゴスでアフリカ人から血液検体が採取されました。その結果、それ以来、世界中で何百万人もの人々が黄熱病から守られてきました。生産された黄熱病ワクチンはすべて、このアフリカ人から得られたこのウイルスの原株に由来しており、多くの国で何百万人もの人々に免疫を与えています。黄熱病から救うためには、一人の男性から作られたワクチンの適用を受けなければなりません。神の裁きを受けるためには、神の子だけが流した比類のない貴重な血の適用を受けなければなりません。」[\[351\]](#)

12節は、ヨハネ 20:30-31 のような永遠のいのちの申し出ではなく、次の節で検証されるように、神が読者に何をしてくださったかを確認するものです。

5:13 「これらのこと」という言葉は、明らかにヨハネの手紙全体ではなく、ヨハネが書く直前に書いた神の証しについてを指しているようです(6-12節)。1:4 の「これらのこと」は、1:1-3 で以前に書かれたことを指し、2:1 の「これらのこと」は、同様に、1:5-10 の直前のことを指し、「これらのこと」は、2:26の「もの」は、2:18-25 の直前のことを指します。[\[352\]](#)ヨハネはこの手紙全体の目的を1章3-4節で述べています。[\[353\]](#)

「この主張[つまり13節]は、非常に頻繁に、そして誤って、この手紙全体の目的の表明として受け取られます。…しかし、これは著者の用法に反しています。」[\[354\]](#)

私たちの救いの確信は神の証し、つまり神の約束に基づいています(12節)。それは私たちの生活の中に霊的な実が存在するかどうか依存するものではありません(ヨハネ15:8参照)。それは人間の行いではなく、神の言葉に基づいています。したがって、イエス・キリストを信じていれば、「それを知っている」ならば)私たちは永遠のいのちを持っていると確信できます。[\[355\]](#)

一部の解釈者は、クリスチャンの救いの保証は、聖書における神の客観的な約束と、信者の行いの主観的な証拠の両方に基づいていると信じています。[\[356\]](#)ある注釈者からの次の引用は、主観的な証拠のみに基づいて私たちの保証を根拠付けているようです。

「永遠のいのちの約束にしがみついているけれども、キリストの聖さには何の関心も持たない人々には、何の保証もありません。そのような人々は本当に信じていないのです。彼らが公言しているキリストへの『信仰』は全くの見せかけか、単に騙されているかのどちらかです。彼らは確かにキリストに希望を抱いており、キリストが聖いお方であるように、自分たちも聖められるでしょう(3:3)。」[\[357\]](#)

「完全な正直さで自分自身を見つめようとする人は、自分の救いを確信するよりも、それを疑う根拠を多く見つけます。この不確かさは健全なことだと教える人さえいます。しかし、これは使徒ヨハネが読者に彼らに永遠のいのちがあることを期待していたという事実を考慮したものではありません。皮肉なことに、第一ヨハネが主張しているように、ひとたびクリスチャンの経験が確信の根拠とされると、この聖句の中で知っているというヨハネの発言は完全に不可能になってしまうのです！」[\[358\]](#)

「しかし、私たちが永遠のいのちを持っているのであれば、それを知っておくのは確かに良いことです。それはキリストにある者の当たり前で適切な経験です。」[\[359\]](#)

5:14-15 祈りは、信者のイエス・キリストへの信頼と神の前での確信のもう一つの表現です(3:21参照)。他人の名において何かをすることは、その人の権威に従って行動することを意味します(ヨハネ5:43、10:25参照)。

「祈りは戦いではなく、応答です。祈りの力は、私たちの意志を神に向かって引き上げることにあり、神の意志を私たちに降ろそうとすることではありません…」[\[360\]](#)

「イエスは私たちに、『御心が変えられますように』ではなく、『御心が行われますように』と祈るように教えておられます。」[\[361\]](#)

前述の文脈の主題は主に神の意志への従順についてです(3節b-13節)。ヨハネが言いたいのは、助けが必要なとき、特に神に従う上で助けが必要なときはいつでも、自信を持って祈りでそれを求めることができるということです(2:28、3:21、4:17参照)。彼はその約束に、「何でも」(15節)と「御心に従って」(14節)と条件付けしました。もちろん、神はすべてをご存じなので、すべての

祈りを聞いてくださいます。しかし、私たちは神のご意志を行うために助けを求めている神の子であるため、神は好意的に聞いてくださるという意味で祈りを聞いてくださるのです。彼はそんな願いを必ず叶えてくれます。[362]

「彼はいつも耳を傾けます。彼は人間のようなものではなく、しばしば夢中になって聞くことができなかったり、不注意で聞かなかつたりするものではありません。」[363]

「真の信者であり神の子である私たちが決して神に面と向かって神の意志に反するものを尋ねることはないという事実は、ある意味自明のことです。したがって、祈りに関するイエスの約束の多くにも、3章21、22節にもそのことは言及されていません。」[364]

私たちは聖書を通して神の意志の最も重要な側面を知っています。

「神の意志が私たちの意志ではない限り、私たちは信仰に留まっておらず、私たちの祈りは受け入れられません。」[365]

「しかし、祈りが神の御心に従って行われるのであれば、そもそもなぜ祈る必要があるのでしょうか？ 私たちがそれが成るように祈るかどうかに関係なく、神の御心は確かに成就されるのでしょうか？ そのような言葉で話すことは、神の御心があると思込むことです。聖書は、私たちが特定の方法で、特定の時間に祈るという事実も含めて、これから起こることよりも前から、あたかも神が事前に細かな計画を立てているかのように、静的な方法で理解されなければなりません。確かに世界に対する神の計画と目的について語っていますが、そのような決定論的な言葉で語ることは、聖書自体が神の子どもたちに与えている自由と矛盾しており、神とその子どもたちの間に存在する個人的な関係についての聖書の考え方に大きな混乱をもたらします。」[366]

したがって、イエス・キリストへの信頼は、永遠のいのちを得るのと同じように、クリスチャン生活を成功させるための基本です。

### **C. 兄弟愛の結果 5:16-17**

イエス・キリストを信じる者として、私たちには自分自身の従順に気を配る権利と義務がありますが、兄弟たちの従順にも気を配らなければ、真に兄弟を愛することはできません。神の御心にかなった祈りは、私たちが互いに愛し合うのに役立つだけでなく、兄弟姉妹の信仰や必要に応じて助けを得ることができる手段でもあります。

「今述べた祈りに関する自信と、兄弟愛というキリスト教の極めて重要な原則を合わせてみましょう。そして、私たちは当然のこととして、過ちを犯した兄弟のためにとりなす義務と実践を守ります。」[\[367\]](#)

5:16 ヨハネは、祈りは他の人の必要にまで及ぶべきであると説明しました(第一テモテ2:1参照)。彼がこれを行ったのは、兄弟を愛することが何を意味するのかをさらに明確にするためでした。この聖句の一般的な主題は、罪を犯したクリスチャンのための祈りです。「死」という言葉のそれぞれの前に「時期尚早の身体的」という言葉を挿入することによって、この節と次の節の意味を明確にすることができます。

一部の作家は、死の想定される修飾語は永遠であるべきだと書きました。[\[368\]](#) この解釈は、視野にある兄弟たちが最初から救われなかったか、あるいは救いを失ったかのどちらかであるという誤った結論をもたらす可能性があるかと私は信じています。

他の解釈者は、「神がこれらの罪人に命を与えてなさることは、彼らの傷つき衰退しつつある霊的生活を強化することである…」と信じています。[\[369\]](#) この場合、その死は霊的な死となるようです。しかし、クリスチャン兄弟が霊的に(永遠に)死ぬことがあり得ますか？彼は霊的に病気になるかもしれませんが、霊的に死ぬことはありません。レンスキーはアルミニウス派として、信者は救いを失う可能性があるかと信じていました。

この聖句は、一部の罪は神の迅速な裁きをもたらし、罪人の早すぎる肉体的な死をもたらすことを教えていると私は信じています(例、使徒5:1-11、第一コリント5:5、11:30)。他の罪はこのような劇的な結果をもたらしません。今日の私たちにとって、これらの種類の罪を区別することは不可能ではないにしても非常に難しいという事実は、区別が存在しないと結論づけるべきではありません(ヘブル6:4-6;10:26-29参照)。

「旧約聖書は、軽度の(計画的ではない)罪とより大きな(故意の)罪の違いをすでに認識しています(民数記15章30節以降と対照的に、レビ記4章2節以降、5章1節以降、民数記15章22節以降を参照)。大罪とはもともと肉体的な死の刑罰を伴う罪を意味していました(民数記18:22; イザヤ書 22:14 参照)。[\[370\]](#)

永遠の死の見解によれば、死に至る罪はキリストを信じないことを指します(ヨハネ 3:18-19; 8:24; 9:39参照)。[\[371\]](#) 永遠の死に至らない罪とは、人が天罰を受けることのない罪のことです。なぜなら、神はとりなし者の祈りに応えてその罪人に永遠の命を与えるからです。永遠の死に至らない罪とは、信者を神から取り返しのつかない形で引き離すことができない罪を指す場合もあり、そ

の罪については赦しが可能です。キリストを信じないことが永遠の死をもたらすのは事実ですが、それがこの聖句で視野に入れられている死に至る罪とは私には思えません。

「魂を殺す方法は2つある。(1) 霊的な訴えを無視し、霊的な衝動を抑圧するという、麻痺させて頑なな実践…(2) 決定的な背教、意図的な拒絶。これは、あの異端者の場合だった。彼らは[ キリストを放棄し、反キリストに従った。]」[\[372\]](#)

古いモーセの契約の下では、その契約を放棄した罪人は肉体的に滅びました。なぜなら、彼らの放棄はヤハウエの権威に対する重大な拒否を意味するからです。ヘブル人への手紙の著者は、新しい契約を破棄すれば、避けられないより厳しい裁き(肉体的な死と、信者への報酬の喪失や不信者への第二の死などの何らかの形の霊的な死)をもたらすだろうと読者に警告しました。一悔い改めの可能性はなく(ヘブル6:4-6;10:26-27)。新しい契約の否認には、イエス・キリストの拒否が含まれます。それがヨハネがここで言いたかった死に至る罪なのかもしれません。

「初代教会は、人が救いの望みを超えて罪を犯す可能性を、私たちよりもずっと真剣に受け止めていました。」[\[373\]](#)

早すぎる肉体の死につながる罪の場合、ヨハネは祈りによってその罪の結果を回避できないことを明らかにしました。したがって、このような状況で祈っても役に立ちません。しかしヨハネは、こうした状況について祈ることを控えるべきだとは言いませんでした。[\[374\]](#)ある罪が神によって早死に裁かれる罪であるかどうかは、私たちは分からないかもしれません。そのような場合、私たちは神が罪を犯したクリスチャンのためにご自身の意志を実現してくださるよう祈ることができます。[\[375\]](#)

「私たちがすべきことは祈ること、そして神が選別をしてくださいます。」[\[376\]](#)

エレミヤは兄弟たちへの愛から、反抗的な不信者のイスラエル人のために祈り続けました。神がエレミヤに、彼らの運命は決まっているので祈りは御心を変えることはないと言われたにもかかわらずでした(エレミヤ 7:16; 11:14; 14: 11-12)。

「…罪に対するヨハネの警告と正統な信仰の維持の失敗(2:24; 第二ヨハネ8-9)は、ヨハネが読者に神の子として光の中を歩むことを期待していたことを示している(1:7;18節-19)、彼は、自分のコミュニティの

一部の信者だが異端的な傾向のある人々が背教者になる可能性を無視しなかった。」<sup>[377]</sup>

多くのクリスチャンは、たとえクリスチャンの間であっても、罪を犯すことは常に何らかの死につながることを理解していません(ローマ6:23)。クリスチャンが第二の死(神からの永遠の別れ)を決して経験しないのは事実ですが、私たちは通常、罪を犯したことによる肉体的および霊的な結果(交わりの喪失)を経験します。携挙された者を除いて、私たち信者は皆、肉体的に死ななければならないという事実がその証拠です。繰り返しますが、例外は、主イエスがご自身のために戻ってこられたときに天の御国にあげられるクリスチャンです。

「さらなる問題は、真に神の子である人々が死に至る罪を犯し得るかということである。……多くの学者は、これがヨハネの意味するところではあり得ないことを示そうとしている。したがって、この質問者は単に信者を装っただけで、イエスを真に信じたことは一度もなかったのだと議論されてきた。結果として死に至る罪は、原則として信者が犯し得ない不信者の罪として理解されるべきである。<sup>[378]</sup>しかし、この点には疑問が残るはずだ。罪を犯し、真理とキリストの教義を貫き通さなくなる可能性について読者に警告する必要があったという事実(2:24; 第二ヨハネ7-11)は、ヨハネが罪を犯す可能性を完全には排除しなかったことを示唆している。人は信仰から離れて背教に陥ることもあり得る[cf.ヘブル6:4-6; 10:26-31]。それにもかかわらず、読者が信仰から離れずに信仰を持ち続けることを彼は明らかに期待していた。」<sup>[379]</sup>

「神の子がここで主を辱め続けるなら、主は彼を脇に置くか、死んで家に連れ帰るかのどちらかだと思います。神はそんなことを気にしません。多くの場合、そうされると思います。」<sup>[380]</sup>

5:17 兄弟や姉妹が早死にに至らない罪を犯した場合、教会の私たちはその人のために祈るべきです(1:9参照)。罪を犯したクリスチャンのための祈りは、その兄弟や姉妹への愛を具体的に示すものです(3:23)。

これらの聖句は、ローマカトリック神学でこれらの用語が使用されているように、大罪(赦されない)と小罪(赦され得る)を区別していません。

「人が心の中で罪を憎み、罪を犯している自分自身を憎んでいる限り、自分が罪を犯していると知っている限り、その人は決して悔い改めのプロセスを通ることはなく、したがって、赦しを経験することは決してない。しかし、一度罪に浸り、罪を自分の人生の計画的な方針にしてしまうと、人は罪の恐ろしさとすさまじさ、そして自己嫌悪の感覚を完



全にうしない、死への道を進んでいることになる。それは悔い改めという考えが頭に決して入ることができない状態であるからである。」[\[381\]](#)

次の図は、今説明した 2 つの観点をまとめたものです。

目に見える霊的な死	目に見える肉体的な死
犯人は兄弟	犯人は兄弟
死に至らない罪とは、キリストへの不信仰以外のあらゆる罪	死に至らない罪とは、人の命を縮めない罪
神は祈りに応えて罪を犯した者に霊的な命を与える(祈りは決して永遠の命を保証するものではない)	神は祈りに応えて罪を犯した者に肉体的な寿命の延長を与える(神はヒゼキヤ王のためにこれをした。ヤコブ 5:15 参照。)
死に至る罪は不信仰	死に至る罪とは、肉体の寿命を縮める重大な罪
ヨハネは不信仰の罪を犯した人のために祈りを勧めなかった(彼がそれを称賛すると思う人もいるだろう;ローマ 10:1 参照。)	ヨハネは、肉体の寿命を縮める罪を犯した人のために祈ることを推奨しなかった(明らかに彼は、そのような祈りは無駄だと信じていたようだ。エレミヤ 7:16 参照。)

わたしたちは彼らのために祈ることによって、自分自身の従順だけでなく、他の人の従順に対する関心を示すべきです。私たちが自分自身の従順について本当に心配するようになると、兄弟たちの従順についても心配するようになります。神は私たちに永遠のいのちを与えますが、信者である私たちは、いくつかのケースでは、祈りの中で神に憐れみを求めるとき、他の人に延長された肉体の命を与えることができます。

## VI. キリスト教の確信 5:18-21

ヨハネは、読者のためにそれを強化し再検討するために、彼が提示した主要な考えを要約してこの手紙を締めくくりました。イエスが教えたこととヨハネが教えたことの結果として、私たちは多くのことを「知って」います。

「ここでの著者の基本的な考えは、読者が彼が言及する真実を認識すれば、周囲の偶像崇拝的な異教の慣習の誘惑に対する強化がなされるだろう、ということである。」

[\[382\]](#)

5:18 「知っています」と言う表現はこの聖句と次の2つの聖句を指しています。ヨハネはおそらく、「私がこの手紙に書いたことを、私たち使徒は知っており、読者の皆さんも知っている」と言いたかったのでしょう。

3:9 にあるように、ヨハネは、神を霊的な親とする人の基本的な性質は罪を犯さないことであると断言しました。[\[383\]](#)生まれ変わった人は、いかなる罪も犯すことができないのです。[\[384\]](#)

「その新しい人は神から生まれたので、罪を犯すことはできません。神は義人であり、神から生まれたものは罪を犯すことができません。また、邪悪な者は神から生まれた者に触れることができません。」[\[385\]](#)

一つの解釈は、キリストにある新しい人は内住しているキリストの罪のない性質を持っているので、ヨハネはキリスト(「神から生まれた人」)が彼を罪から守ってくれていると言えるというものである(ヨハネ17:12、黙示録3:10参照)。別のより良い見方は、「神から生まれた人」とは、自分を罪から守る信仰者を指すということです。[\[386\]](#)この手紙の他の箇所でも、「神から生まれた」という表現は信者を指します(3:9; 4:7; 5:1、4)。

さらに、サタンは彼に触れることはできません(「邪悪な者は触れません」)。これは、サタンが霊的で忠実なクリスチャンを攻撃したり、物理的に傷つけたりできないという意味ではありません(ヨブ参照)。それは、彼または彼女の信仰と証において霊的で不変なクリスチャンを破壊することはできないことを意味します。人は通常、自分がそう信じていることに調和して行動するため、ヨハネがこの基本的な真理を改めて述べたのは明らかです(箴言23:7参照)。私たちが自分を悪魔の子ではなく神の子として見るとき、クリスチャンとしての私たちの行動はより神聖になります(3:10参照)。

5:19 さらに、信者は神の子であるため、サタンが支配する世界システムとは違う世界を生きています(5:9-13)。私たちは反キリストの世俗的な教えを受け入れる必要もありませんし(3:7-8)、世俗的な欲望に屈服する必要もありません(2:15-17)。

5:20 最後に、私たちは聖霊による油注ぎの結果として霊的な理解を得ることができます。その結果、私たちは神を親しく知ようになり、神、そしてまことの神であり永遠のいのちである御子イエス・キリストのうちに住むことができるようになります(ヨハネ14:6参照)。ダービーは、この聖句の最後の部分がこの書簡の鍵であると考えました。[\[387\]](#)「御子イエス・キリスト」という完全なタイトルは、この手紙の1章3節とここにのみ現れており、ヨハネが書いたものの締めくくりとなっています(別の包含)。この節には、新約聖書の中で

イエス・キリストの神性が最も明確に表明されているものの一つが含まれています。

「ヨハネにとって、永遠のいのちは父と子との関係です。それは人がイエス・キリストを信じるようになった現在に始まりますが、来るべき時代まで途切れることなく続きます。」[\[388\]](#)

フィンドレーは、私たちが知っている三つのことを「使徒信条」として18-20節で要約しました。「私は聖性を信じます。」「私は再生を信じています。」「私は神の子の使命を信じています。」[\[389\]](#)

5:21 ヨハネは最後の忠告で締めくくりました。真の神とその教えから離れることは偶像崇拝となります。神に反することは神を嘘つき呼ばわりすることと同じです(1:10)、神から離れることは偶像礼拝に相当します。神から離れることには、使徒の教えや実践から離れること、神の子ではなくサタンの子のように振る舞っているという意味が含まれます。

「偽りの教えは究極的には『真の信仰からの背教』です。それに追随することは、偶像崇拝者以上の何ものでもありません。それが神についての自分の概念の真実の問題である場合は特にです。著者は率直に述べています。偽教師たちは、御子イエスによって知らされた真の神ではなく、偽りの神、つまり彼ら自身で作上げた偶像を崇拝することを勧めています。」[\[390\]](#)

この節は、神が十章でイスラエル人に与えた最初の戒め(出エジプト記 20:3-5; 申命記 5:7-9)をクリスチャン向けに新約聖書で再記述したものです。

「高貴な出生には高貴な忍耐が求められる[Noblesse oblige.]」[\[391\]](#)

## Bibliography

- Alford, Henry. *The Greek Testament*. 4 vols. New ed. Cambridge: Deighton, Bell, and Co., 1883, 1881, 1880, 1884.
- Allman, James E. "First John 1:9: Confession as a Test, but of What?" *Bibliotheca Sacra* 172:686 (April–June 2015):203–21.
- \_\_\_\_\_. "*hilaskesthai*: To Propitiate or to Expiate?" *Bibliotheca Sacra* 172:687 (July–September 2015):335–55.
- \_\_\_\_\_. "Suffering in the Non–Pauline Epistles." In *Why, O God? Suffering and Disability in the Bible and the Church*, pp. 195–205. Edited by Larry J. Waters and Roy B. Zuck. Wheaton: Crossway, 2011.
- Archer, Gleason L. *An Encyclopedia of Bible Difficulties*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1982.
- Bailey, Mark L., and Thomas L. Constable. *The New Testament Explorer*. Nashville: Word Publishing Co., 1999. Reissued as *Nelson's New Testament Survey*. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1999.
- Baker's Dictionary of Theology*. Edited by Everett F. Harrison. 1960 ed. S.v. "Theophany," by Wick Broomall, pp. 520–21.
- Barclay, William. *The Letters of John and Jude*. The Daily Study Bible series. 2nd ed. Edinburgh: Saint Andrew Press, 1962.
- Barker, Glenn W. "1 John." In *Hebrews–Revelation*. Vol. 12 of *The Expositor's Bible Commentary*. 12 vols. Edited by Frank E. Gaebelein and J. D. Douglas. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1981.
- Baxter, J. Sidlow. *Explore the Book*. 1960. One vol. ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1980.
- Baylis, Charles P. "The Meaning of Walking 'in the Darkness' (1 John 1:6)." *Bibliotheca Sacra* 149:594 (April–June 1992):214–22.
- Bigalke, Ron J. "Identity of the First Epistle of John: Context, Style, and Structure." *Journal of Dispensational Theology* 17:50 (Spring 2013):7–44.

Blair, J. Allen. *The Epistles of John: Devotional Studies on Living Confidently*. Neptune, N.J.: Loizeaux Brothers, 1982.

Boice, James Montgomery. *The Epistles of John*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1979.

Brindle, Wayne A. "Biblical Evidence for the Imminence of the Rapture." *Bibliotheca Sacra* 158:630 (April–June 2001):138–51.

Brooke, A. E. *A Critical and Exegetical Commentary on the Johannine Epistles*. International Critical Commentary series. Edinburgh: T. & T. Clark, 1912.

Brown, Raymond. *The Epistles of John*. Anchor Bible series. Garden City, N.Y.: Doubleday, 1982.

Bruce, F. F. *The Epistles of John*. London: Pickering & Inglis Ltd., 1970; reprint ed., Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1986.

Calvin, John. *The First Epistle of John*. Calvin's New Testament Commentaries series. Translated by T. H. L. Parker. Reprint ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1959–61.

\_\_\_\_\_. *Institutes of the Christian Religion*. The Library of Christian Classics series, volumes 20 and 21. Edited by John T. McNeill. Translated by Ford Lewis Battles. Philadelphia: Westminster Press, 1960.

Candlish, Robert S. *The First Epistle of John*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, n.d.

Carson, Donald A., and Douglas J. Moo. *An Introduction to the New Testament*. 2<sup>nd</sup> ed. Grand Rapids: Zondervan, 2005.

Chafer, Lewis Sperry. *Systematic Theology*. 8 vols. Dallas: Dallas Seminary Press, 1947–48.

Colson, Charles W. *Loving God*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1983.

Constable, Thomas L. *Talking to God: What the Bible Teaches about Prayer*. Grand Rapids: Baker Book House, 1995; reprint ed., Eugene, Oreg.: Wipf & Stock Publishers, 2005.

\_\_\_\_. "What Prayer Will and Will Not Change." In *Essays in Honor of J. Dwight Pentecost*, pp. 99–113. Edited by Stanley D. Toussaint and Charles H. Dyer. Chicago: Moody Press, 1986.

Cook, W. Robert. "Harmartiological Problems in First John." *Bibliotheca Sacra* 123:491 (July–September 1966):249–60.

Crain, C. *Readings on the First Epistle of John*. New York: Loizeaux Brothers, n. d.

Darby, John Nelson. *Synopsis of the Books of the Bible*. 5 vols. Revised ed. New York: Loizeaux Brothers Publishers, 1942.

Deissmann, Adolf. *Light from the Ancient East*. 4th ed. Translated by Lionel R. M. Strachen. Grand Rapids: Baker Book House, 1965.

Derickson, Gary W. "What Is the Message of 1 John?" *Bibliotheca Sacra* 150:597 (January–March 1993):89–105.

Dillow, Joseph C. *The Reign of the Servant Kings*. Miami Springs, Fla.: Schoettle Publishing Co., 1992.

Dodd, C. H. *The Johannine Epistles*. Moffatt New Testament Commentary series. New York: Harper and Row, 1946.

Eaton, Michael. *No Condemnation: A New Theology of Assurance*. Downers Grove, Ill.: InterVarsity Press, 1995.

Ehrman, Bart D. *A Brief Introduction to the New Testament*. New York and Oxford, U.K.: Oxford University Press, 2004.

\_\_\_\_. *The New Testament: A Historical Introduction to the Early Christian Writings*. 3<sup>rd</sup> ed. New York and Oxford, U.K.: Oxford University Press, 2000, 2004.

Eusebius. *The Ecclesiastical History of Eusebius Pamphilus*. Twin Brooks series. Popular ed. Grand Rapids: Baker Book House, 1974.

Findlay, George G. *Fellowship in the Life Eternal*. London: Hodder and Stoughton, 1909.

Fruchtenbaum, Arnold. "Who Is the Antichrist?" In *The Gathering Storm: Understanding Prophecy in Critical Times*, pp. 210–39. Edited by Mal Couch. Springfield, Mo.: 21<sup>st</sup> Century Press, 2005.

Gaebelein, Arno C. *The Annotated Bible*. 4 vols. Reprint ed. Chicago: Moody Press, and New York: Loizeaux Brothers, 1970.

Gaster, Theodor H. *The Dead Sea Scriptures*. Revised and enlarged edition; Garden City, N.Y.: Doubleday & Co., Anchor Books, 1964.

Gillquist, Peter E. *Love Is Now*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1970.

Glasscock, Ed. "Forgiveness and Cleansing in 1 John 1:9." *Bibliotheca Sacra* 166:662 (April–June 2009):217–31.

Goodman, G. *The Epistle of Eternal Life*. London: Pickering & Inglis, 1936.

Graystone, Kenneth. *The Johannine Epistles*. New Century Bible Commentary series. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., and London: Marshall, Morgan & Scott, 1984.

*A Greek–English Lexicon of the New Testament*. By C. G. Wilke. Revised by C. L. Wilibald Grimm. Translated, revised and enlarged by Joseph Henry Thayer, 1889.

Guthrie, Donald. *New Testament Introduction: Hebrews to Revelation*. 2nd ed. reprinted. London: Tyndale Press, 1962, 1966.

Hanna, Kenneth G. *From Gospels to Glory: Exploring the New Testament*. Bloomington, Ind.: CrossBooks, 2014.

Harris, W. Hall. "A Theology of John's Writings." In *A Biblical Theology of the New Testament*, pp. 167–242. Edited by Roy B. Zuck. Chicago: Moody Press, 1994.

Henry, Matthew. *Commentary on the Whole Bible*. One volume ed. Edited by Leslie F. Church. Grand Rapids: Zondervan Publishing Co., 1961.

Hiebert, D. Edmond. "An Expository Study of 1 John." *Bibliotheca Sacra* 145:578 (April–June 1988):197–210; 579 (July–September 1988):329–42; 580 (October–December 1988):420–35; 146:581 (January–March 1989):76–93; 582 (April–June 1989):198–216; 583 (July–September 1989):310–19; 584 (October–December 1989):420–36; 147:585 (January–March 1990):69–88; 586 (April–June 1990):216–30; 587 (July–September 1990):309–28.

\_\_\_\_\_. *An Introduction to the New Testament, Vol. 3: The Non–Pauline Epistles and Revelation*. Chicago: Moody Press, 1977.

Hodges, Zane C. "1 John." In *The Bible Knowledge Commentary: New Testament*, pp. 881–904. Edited by John F. Walvoord and Roy B. Zuck. Wheaton: Scripture Press Publications, Victor Books, 1983.

\_\_\_\_\_. *The Epistles of John: Walking in the Light of God's Love*. Irving, Tex.: Grace Evangelical Society, 1999.

\_\_\_\_\_. "Fellowship and Confession in 1 John 1:5–10." *Bibliotheca Sacra* 129:513 (January–March 1972):48–60.

\_\_\_\_\_. "The First Epistle of John." In *The Grace New Testament Commentary*, 2:1191–1229. Edited by Robert N. Wilkin. 2 vols. Denton, Tex.: Grace Evangelical Society, 2010.

\_\_\_\_\_. *The Gospel Under Siege*. Dallas: Redencion Viva, 1981.

\_\_\_\_\_. "Is God's Truth in You? 1 John 2:4b." *Grace Evangelical Society News* 5:7 (July 1990):2–3.

*The Holy Bible: New International Version*. Colorado Springs, et al.: International Bible Society, 1984.

*The Holy Bible: New King James Version*. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1982.

Houlden, J. L. *A Commentary on the Johannine Epistles*. Harper's New Testament Commentaries series. New York: Harper and Row, 1973.

Jamieson, Robert; A. R. Fausset; and David Brown. *Commentary Practical and Explanatory on the Whole Bible*. Reprint ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1961.

Kennedy, George A. *New Testament Interpretation through Rhetorical Criticism*. Chapel Hill, N.C.: University of North Carolina Press, 1984.

King, Guy H. *The Fellowship*. London: Marshall, Morgan & Scott, 1954.

Kistemaker, Simon J. *Exposition of the Epistle of James and the Epistles of John*. New Testament Commentary Series. Grand Rapids: Baker Book House, 1986.

Koch, Kurt E. *Between Christ and Satan*. Translated by Yolanda N. Entz. Berghausen Bd., Germany: Evangelization Publishers, 1961.



Kruse, Colin G. *The Letters of John*. The Pillar New Testament Commentary series. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., and Leicester, Eng.: Apollos, 2000.

Kubo, Sakae. "1 John 3:9: Absolute or Habitual?" *Andrews University Seminary Studies* 7 (1969):47–56.

Ladd, George Eldon. *A Theology of the New Testament*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1974, 1979.

Lange, John Peter, ed. *Commentary on the Holy Scripture*. 12 vols. Reprint ed. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1960. Vol 12: *James—Revelation*, by J. P. Lange, J. J. Van Oosterzee, G. T. C. Fronmuller, and Karl Braune. Enlarged and edited by E. R. Craven. Translated by J. Isidor Mombert and Evelina Moore.

Law, Robert. *The Tests of Life: A Study of the First Epistle of St. John*. Edinburgh: T. and T. Clark, 1909.

Lenski, Richard C. H. *The Interpretation of the Epistles of St. Peter, St. John and St. Jude*. 1945. Reprint ed. Minneapolis: Augsburg Publishing House, 1961.

Lloyd-Jones, Martyn. *Fellowship With God: Studies in 1 John*. Vol. 1 of Life in Christ series. Wheaton: Crossway Books, 1993.

Louw, J. P. "Verbal Aspect in the First Letter of John." *Neotestamentica* 9 (1975):98–104.

MacArthur, John F., Jr. *Faith Works: The Gospel According to the Apostles*. Dallas: Word Publishing, 1993.

\_\_\_\_\_. *The Gospel according to Jesus*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1988.

Malatesta, E. *Interiority and Covenant. A Study of einai en and menein en in the First Letter of Saint John*. Anchor Bible 69. Rome: Biblical Institute Press, 1978.

Marshall, I. Howard. *The Epistles of John*. New International Commentary on the New Testament series. Reprint ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1984.

McGee, J. Vernon. *Thru the Bible with J. Vernon McGee*. 5 vols. Pasadena, Calif.: Thru The Bible Radio; and Nashville: Thomas Nelson, Inc., 1983.

McLean, John A. "An Exegetical Study of 1 John 5:18–21." *Bibliotheca Sacra* 169:673 (January–March 2012):68–78.

McNeile, Alan Hugh. *An Introduction to the Study of the New Testament*. 2<sup>nd</sup> ed. revised by C. S. C. Williams. Oxford: Clarendon Press, 1927, 1953.

Merkle, Benjamin L. "What Is the Meaning of 'Idols' in 1 John 5:51?" *Bibliotheca Sacra* 169:675 (July–September 2012):328–40.

Mitchell, John G. *An Everlasting Love*. Portland: Multnomah Press, 1982.

\_\_\_\_\_. *Fellowship: Three Letters from John*. Portland: Multnomah Press, 1974.

Morgan, G. Campbell. *An Exposition of the Whole Bible*. Westwood, N.J.: Fleming H. Revell, 1959.

\_\_\_\_\_. *Living Messages of the Books of the Bible*. 2 vols. New York: Fleming H. Revell Co., 1912.

\_\_\_\_\_. *The Unfolding Message of the Bible*. Westwood, N.J.: Fleming H. Revell Co., 1961.

Morris, Leon. *The Apostolic Preaching of the Cross*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1965.

*The Nelson Study Bible*. Edited by Earl D. Radmacher. Nashville: Thomas Nelson Publishers, 1997.

*The NET2 (New English Translation) Bible*. N.c.: Biblical Press Foundation, 2019.

*The New American Standard Bible*. La Habra, Cal.: The Lockman Foundation, 2020.

*The New Scofield Reference Bible*. Edited by Frank E. Gaebelin, William Culbertson, et al. New York: Oxford University Press, 1967.

Olson, C. Gordon. *Beyond Calvinism and Arminianism: An Inductive Mediate Theology of Salvation*. 3<sup>rd</sup> ed. Lynchburg: Global Gospel Publishers, 2012.

Pentecost, J. Dwight. *The Joy of Fellowship*. Grand Rapids: Zondervan Publishing House, 1977.

Pfeiffer, Robert H. *History of New Testament Times With an Introduction to the Apocrypha*. London: Adam and Charles Black, 1949, 1963.

Philips, J. B. *Your God Is Too Small*. New York: The Macmillan Co., 1952.

Plummer, Alfred. *The Epistles of S. John*. Cambridge Bible for Schools and Colleges series. 1883. Reprint ed. Cambridge: Cambridge University Press, 1938.

Pond, Eugene. "1 John." In *Surveying Hebrews through Revelation*, pp. 85–104. 2<sup>nd</sup> ed. Edited by Paul D. Weaver. Learn the Word Bible Survey series. N.c.: Learn the Word Publishing, 2019.

Radmacher, Earl D. *Salvation*. Swindoll Leadership Library series. Nashville: Word Publishing, 2000.

Richardson, Alan. *An Introduction to the Theology of the New Testament*. New York: Harper & Row, 1958.

Roberts, J. W. *The Letters of John*. Living Word Commentary series. Austin, Tex.: R. B. Sweet, 1968.

Robertson, Archibald Thomas. *Word Pictures in the New Testament*. 6 vols. Nashville: Broadman Press, 1931.

Ross, A. *The Epistles of James and John*. New International Commentary series. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1954.

Ryrie, Charles Caldwell. *Biblical Theology of the New Testament*. Chicago: Moody Press, 1959.

\_\_\_\_\_. "The First Epistle of John." In *The Wycliffe Bible Commentary*, pp. 1463–78. Edited by Charles F. Pfeiffer and Everett F. Harrison. Chicago: Moody Press, 1962.

Schnackenburg, Rudolf. *The Johannine Epistles*. Translated from the 7<sup>th</sup> ed. of *Die Johannesbriefe* (1984) by Reginald and Ilse Fuller. New York: Crossroad Publishing Co., 1992.

Sloyan, G. S. *Walking in the Truth: Perseverers and Deserters: The First, Second, and Third Letters of John*. Valley Forge, Penn.: Trinity, 1995.

Smalley, Stephen S. *1, 2, 3 John*. Word Biblical Commentary series. Waco: Word Books, 1984.

Smith, David. "The Epistles of St. John." In *The Expositor's Greek Testament*, 5 (1910):151–208. 4<sup>th</sup> ed. Edited by W. Robertson Nicoll. 5 vols. London: Hodder and Stoughton, 1900–12.

Spurgeon, Charles Haddon. *12 Sermons on the Second Coming of Christ*. Grand Rapids: Baker Book House, 1976.

\_\_\_\_\_. *An All Round Ministry*. Reprint ed. London and Carlisle, Pa.: The Banner of Truth Trust, 1900, 1972.

Stanton, Gerald B. *Kept from the Hour*. Fourth ed. Miami Springs, Fla.: Schoettle Publishing Co., 1991.

Storms, C. Samuel. *Reaching God's Ear*. Wheaton: Tyndale House Publishers, 1988.

Stott, John R. W. *Basic Introduction to the New Testament*. 1<sup>st</sup> American ed. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1964.

\_\_\_\_\_. *The Epistles of John*. Tyndale New Testament Commentaries series. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1964.

Swindoll, Charles R. *Come before Winter ... and Share My Hope*. Portland: Multnomah Press, 1985.

\_\_\_\_\_. *The Swindoll Study Bible*. Carol Stream, Ill.: Tyndale House Publishers, 2017.

Tan, Randall K. J. "Should We Pray for Straying Brethren? John's Confidence in 1 John 5:16–17." *Journal of the Evangelical Theological Society* 45:4 (December 2002):599–609.

Tenney, Merrill C. *The New Testament: An Historical and Analytic Survey*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1953, 1957.

Thiessen, Henry Clarence. *Introduction to the New Testament*. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Co., 1943, 1962.

Tozer, A. W. *The Knowledge of the Holy*. New York, et al.: Harper & Row Publishers, 1961.

Westcott, Brooke Foss. *The Gospel According to St. John: The Authorised Version with Introduction and Notes*. 1880. London: James Clarke & Co., Ltd., 1958.

\_\_\_\_. *The Epistles of St. John*. 1883. Reprint ed. England: Marcham Manor Press, 1966.

Wiersbe, Warren W. *The Bible Exposition Commentary*. 2 vols. Wheaton: Scripture Press Publications, Victor Books, 1989.

Wilkin, Robert N. "Assurance: That You May Know' (1 John 5:11-13a)." *Grace Evangelical Society News* 5:12 (December 1990):2, 4.

\_\_\_\_. "Do Born Again People Sin? 1 John 3:9." *Grace Evangelical Society News* 5:3 (March 1990):2-3.

\_\_\_\_. "Knowing God By Our Works?" *Grace Evangelical Society News* 3:10 (October–November 1988):3-4.

\_\_\_\_. *Secure and Sure: Grasping the Promises of God*. Irving, Tex.: Grace Evangelical Society, 2005.

Wuest, Kenneth S. *Word Studies in the Greek New Testament*. Reprint ed. 16 vols. in 4. Grand Rapids: Wm. B. Eerdmans Publishing Company, 1966.

Yarbrough, Robert W. *1-3 John*. Baker Exegetical Commentary on the New Testament series. Grand Rapids: Baker Academic, 2008.

Yarid, John R., Jr. "Reflections of the Upper Room Discourse in 1 John." *Bibliotheca Sacra* 160:637 (January–March 2003):65-76.

---

[1]E.g., Irenaeus, Clement of Alexandria, and Tertullian.

[2]See Charles C. Ryrie, "The First Epistle of John," in *The Wycliffe Bible Commentary*, pp. 1464-65, for a concise discussion of views of authorship; and see Henry Alford, *The Greek Testament*, 4:1:159-65, for a longer discussion.

[3]Robert W. Yarbrough, *1-3 John*, pp. 16-21. See also Alford, 4:1:169.

[4]Colin G. Kruse, *The Letters of John*, pp. 4, 8, 15.

[5]Rudolf Schnachenburg, *The Johannine Epistles*, p. 23.

[6]Stephen S. Smalley, *1, 2, 3 John*, p. xxiv. Paragraph division omitted.

[7]See Zane C. Hodges, "1 John," in *The Bible Knowledge Commentary: New Testament*, p. 882; idem, "The First Epistle of John," in *The Grace New Testament Commentary*, 2:1192.

[8]E.g., B. F. Westcott, *The Epistles of St. John*, pp. xxx-xxxii; F. F. Bruce, *The Epistles of John*, p. 31; and Yarbrough, p. 17.

[9]Cf. Smalley, pp. xxii, xxxii; Donald A. Carson and Douglas J. Moo, *An Introduction to the New Testament*, pp. 676-77; and G. G. Findlay, *Fellowship in the Life Eternal*, p. 49.

[10]David Smith, "The Epistles of St. John," in *The Expositor's Greek Testament*, 5:154.

- [11] See also Donald Guthrie, *New Testament Introduction*, 3:205–6.
- [12] See D. Edmond Hiebert, *An Introduction to the New Testament*, 3:191–97.
- [13] A. T. Robertson, *Word Pictures in the New Testament*, 6:200. Cf. Findlay, pp. 59, 69.
- [14] J. Sidlow Baxter, *Explore the Book*, 6:321.
- [15] *Ibid.*, 6:324.
- [16] Adolf Deissmann, *Light from the Ancient East*, p. 401.
- [17] Kruse, p. 31.
- [18] See Zane C. Hodges, *The Epistles of John*, pp. 31–33, who followed George A. Kennedy, *New Testament Interpretation through Rhetorical Criticism*.
- [19] A chiasmus is a rhetorical or literary figure in which words, grammatical constructions, or concepts are repeated in reverse order, in the same or a modified form.
- [20] Ron J. Bigalke, "Identity of the First Epistle of John: Context, Style, and Structure," *Journal of Dispensational Theology* 17:50 (Spring 2013):43.
- [21] Baxter, 6:329.
- [22] See the tables of corresponding expressions in John's Gospel and his First Epistle in B. F. Westcott, *The Gospel According to St. John: The Authorised [sic] Version with Introduction and Notes*, pp. lxi–lxiii.
- [23] Quotations from the English Bible in these notes are from the *New American Standard Bible* (NASB), 2020 edition, unless otherwise indicated.
- [24] Adapted from G. Campbell Morgan, *Living Messages of the Books of the Bible*, 2:2:177–93.
- [25] I. Howard Marshall, *The Epistles of John*, p. 99. Cf. Carson and Moo, p. 669.
- [26] William Barclay, *The Letters of John and Jude*, p. 17.
- [27] Kruse, p. 53.
- [28] Schnachenburg, p. 57.
- [29] Findlay, p. 86. Docetist believed that some things only seemed to be real.
- [30] J. Vernon McGee, "The First Epistle of John," in *Thru the Bible with J. Vernon McGee*, 5:757.
- [31] Bruce, pp. 16–17.
- [32] Ryrie, p. 1464. Cf. Robertson, 6:200.
- [33] Findlay, p. 70.
- [34] D. Edmond Hiebert, "An Expository Study of 1 John," *Bibliotheca Sacra* 145:578 (April–June 1988):203.
- [35] Westcott, *The Epistles ...*, pp. 6–7; C. H. Dodd, *The Johanne Epistles*, pp. 3–6; J. L. Houlden, *A Commentary on the Johanne Epistles*, pp. 50–52; Findlay, p. 83.
- [36] G. Goodman.
- [37] Smalley, p. 10.
- [38] Westcott, *The Epistles ...*, p. 4.
- [39] Glenn W. Barker, "1 John," in *Hebrews–Revelation*, vol. 12 of *The Expositor's Bible Commentary*, p. 307.
- [40] John G. Mitchell, *Fellowship*, p. 14. Cf. Robert Jamieson, A. R. Fausset, and David Brown, *Commentary Practical and Explanatory on the Whole Bible*, p. 1495; G. Campbell Morgan, *The Unfolding Message of the Bible*, p. 363–64; *idem*, *An Exposition of the Whole Bible*, p. 527; Kenneth S. Wuest, *Word Studies in the Greek New Testament*, 4:1:59–60; Hodges, *The Epistles ...*, pp. 34, 50; *idem*, "The First ...," 2:1192, 1194; Ryrie, p. 1466; Schnachenburg, pp. 63–64; Kenneth G. Hanna, *From Gospel to Glory*, p. 451; Eugene Pond, "1 John," in *Surveying Hebrews through Revelation*, p. 88.
- [41] Schnachenburg, pp. 63–64.
- [42] D. Martyn Lloyd–Jones, *Fellowship With God: Studies in 1 John*, p. 77. Cf. Findlay, p. 134.
- [43] Alfred Plummer, *The Epistles of S. John*, p. 20.
- [44] Hodges, "1 John," p. 883. See 3:24.
- [45] Yarbrough, p. 29.

- [46] Findlay, p. 91.
- [47] Marshall, p. 107–8.
- [48] *Ibid.*, p. 105.
- [49] Yarbrough, p. 46. See also Smalley, p. 15; and Gary W. Derickson, “What Is the Message of 1 John?” *Bibliotheca Sacra* 150:597 (January–March 1993):89–105.
- [50] Mitchell, p. 21. Cf. Hodges, “1 John,” pp. 883–84.
- [51] *Idem*, *The Epistles* ⋯, p. 57.
- [52] Richard C. H. Lenski, *The Interpretation of the Epistles of St. Peter, St. John and St. Jude*, p. 382.
- [53] Barker, p. 309.
- [54] Baxter, 6:323.
- [55] Schnachenburg, p. 71.
- [56] Yarbrough, p. 46.
- [57] Findlay, p. 97.
- [58] Lenski, p. 384.
- [59] Dodd, pp. 18–19; John R. W. Stott, *The Epistles of John*, p. 70; Theodor H. Gaster, *The Dead Sea Scriptures*, pp. 46, 49–51; Schnachenburg, p. 73.
- [60] Hiebert, “An Expository ⋯,” 145:331.
- [61] Barker, p. 310. See Westcott, *The Epistles* ⋯, pp. 16–17 for a good discussion of God being light.
- [62] Jamieson, et al., p. 1497.
- [63] Marshall, p. 110. Cf. Barker, p. 310.
- [64] Smith, 5:171.
- [65] Yarbrough, p. 59.
- [66] E.g., Lloyd–Jones, pp. 130, 142.
- [67] Charles P. Baylis, “The Meaning of Walking ‘in the Darkness’ (1 John 1:6),” *Bibliotheca Sacra* 149:594 (April–June 1992):214–22.
- [68] Zane C. Hodges, “Fellowship and Confession in 1 John 1:5–10,” *Bibliotheca Sacra* 129:513 (January–March 1972):52.
- [69] *Idem*, *The Epistles* ⋯, pp. 60–61. Paragraph division omitted.
- [70] Lewis S. Chafer, *Systematic Theology*, 3:101.
- [71] Barker, p. 310; Westcott, *The Epistles* ⋯, p. 20.
- [72] Smalley, p. 24.
- [73] Westcott, *The Epistles* ⋯, p. 21.
- [74] Ryrie, p. 1467.
- [75] Bruce, p. 44.
- [76] McGee, 5:762.
- [77] E.g., Smalley, p. 29.
- [78] Robert Law, *The Tests of Life: A Study of the First Epistle of St. John*, p. 130; Robertson, 6:208.
- [79] Westcott, *The Epistles* ⋯, p. 23
- [80] A. Ross, *The Epistles of James and John*, p. 146.
- [81] E.g., Peter E. Gillquist, *Love Is Now*, p. 64.
- [82] *The New Scofield Reference Bible*, p. 1342.
- [83] Hodges, *The Epistles* ⋯, p. 67. For further discussion of this verse see Ed Glasscock, “Forgiveness and Cleansing in 1 John 1:9,” *Bibliotheca Sacra* 166:662 (April–June 2009):217–31.
- [84] Robertson, 6:208.
- [85] Mitchell, p. 42. Italics omitted.

- [86] See James Allman, "First John 1:9: Confession as a Test, but of What?" *Bibliotheca Sacra* 172:686 (April–June 2015):203–21.
- [87] Hodges, "Fellowship and . . .," p. 48.
- [88] *Ibid.*, p. 60. Cf. Warren W. Wiersbe, *The Bible Exposition Commentary*, p. 482.
- [89] Matthew Henry, *Commentary on the Whole Bible*, p. 1956.
- [90] Smith, 5:173.
- [91] Yarbrough, p. 70.
- [92] McGee, 5:765.
- [93] See John R. Yarid Jr., "Reflections of the Upper Room Discourse in 1 John," *Bibliotheca Sacra* 160:637 (January–March 2003):65–76.
- [94] Lenski, p. 398.
- [95] McGee, 5:766.
- [96] Smalley, pp. 35–36.
- [97] Smith, 5:173.
- [98] See Leon Morris, *The Apostolic Preaching of the Cross*, pp. 125–85; W. Hall Harris, "A Theology of John's Writings," in *A Biblical Theology of the New Testament*, p. 215; Yarbrough, pp. 77–81; and James E. Allman, "hilaskesthai: To Propitiate or to Expiate?" *Bibliotheca Sacra* 172:687 (July–September 2015):335–55.
- [99] See Kruse, p. 74.
- [100] Hodges, *The Epistles . . .*, p. 71. See also Yarbrough, p. 80.
- [101] Smalley, p. 42.
- [102] Law, p. 209.
- [103] Barker, p. 315.
- [104] *Ibid.*
- [105] J. Allen Blair, *The Epistles of John*, p. 59. Paragraph division omitted.
- [106] Barclay, p. 64.
- [107] Hodges, *The Epistles . . .*, pp. 75–76. Paragraph division omitted.
- [108] *Ibid.*, p. 77. See also *idem*, "The First . . .," 2:1198.
- [109] Marshall, p. 122.
- [110] Smalley, p. 45.
- [111] See Zane C. Hodges, "Is God's Truth in You? 1 John 2:4b," *Grace Evangelical Society News* 5:7 (July 1990):2–3.
- [112] Yarbrough, p. 85.
- [113] Robert N. Wilkin, "Knowing God By Our Works?" *Grace Evangelical Society News* 3:10 (October–November 1988):3.
- [114] Alford, 4:2:434.
- [115] Smalley, p. 59.
- [116] Bruce, p. 51; Stott, p. 91; Dodd, p. 31; Kruse, p. 80.
- [117] Alford, 4:2:435.
- [118] Hodges, "The First . . .," 2:1199. Bold highlighting omitted.
- [119] *Ibid.*, 2:1198.
- [120] Smalley, p. 52.
- [121] Stott, p. 92.
- [122] Mitchell, p. 60.
- [123] Yarbrough, p. 90.
- [124] See Hodges, "The First . . .," 2:1199.
- [125] Ryrie, p. 1468.



- [126]Hiebert, "An Expository ...," 145:422.
- [127]Barker, p. 317; Hodges, *The Epistles ...*, p. 86.
- [128]Ibid., p. 87.
- [129]Hyperbole is exaggeration to make a point but not meant to be taken literally.
- [130]Smalley, p. 62.
- [131]Jamieson, et al., p. 1500.
- [132]Westcott, *The Epistles ...*, p. 56.
- [133]Yarbrough, p. 105.
- [134]Smith, 5:176.
- [135]Hodges, *The Epistles ...*, p. 93.
- [136]Idem, *The First ...*, 2:1200.
- [137]Westcott, *The Epistles ...*, p. 57.
- [138]Bruce, p. 58; McGee, 5:772.
- [139]Smalley, pp. 69–70. Cf. Barker, p. 319; ll, p. 64; Yarbrough, p. 114–21; Findlay, p. 178–91; Kruse, p. 93.
- [140]Marshall, p. 138; Dodd, pp. 37–39; Westcott, *The Epistles ...*, p. 59; James M. Boice, *The Epistles of John*, pp. 72–73; Hodges, *The Epistles ...*, p. 94.
- [141]Smalley, p. 71; Marshall, pp. 136–37; Hodges, *The Epistles ...*, p. 95.
- [142]Mitchell, p. 66.
- [143]Hodges, "The First ...," 2:1201.
- [144]Bruce, p. 59.
- [145]See Smalley, p. 75; Jamieson, et al., p. 1500; and E. Malatesta, *Interiority and Covenant. A Study of einaí en and menein en in the First Letter of Saint John*, pp. 168–69.
- [146]See, for example, Raymond Brown, *The Epistles of John*; John Calvin, *The First Epistle of John*; D. Edmond Hiebert, *The Non-Pauline Epistles and Revelation*; idem, "An Expository Study of 1 John," *Bibliotheca Sacra* (April 1988–July 1990); Law; John F. MacArthur Jr., *The Gospel according to Jesus*; Marshall; Stott; Westcott; Dodd; Boice; Bruce; Barker; and Wiersbe.
- [147]Zane C. Hodges, *The Gospel Under Siege*, pp. 47–48. Paragraph division omitted. Other commentators who hold that 1 John offers tests of fellowship rather than tests of life are J. Dwight Pentecost, *The Joy of Fellowship*; Mitchell; idem, *An Everlasting Love*; Joseph C. Dillow, *The Reign of the Servant Kings*, pp. 156–75; Guy H. King, *The Fellowship*; Charles C. Ryrie, *Biblical Theology of the New Testament*; idem, "The First ...," p. 1466; J. W. Roberts, *The Letters of John*; and Karl Braune, *The Epistles General of John*, in *Lange's Commentary on the Holy Scriptures*, 12:15.
- [148]Findlay, p. 195.
- [149]Schnachenburg, p. 119.
- [150]Smalley, p. 89.
- [151]Findlay, p. 197.
- [152]Ryrie, "The First ...," p. 1469. See also Schnachenburg's excursus on the "world" in verses 15–17, pp. 125–28.
- [153]Smalley, p. 87.
- [154]Mitchell, *Fellowship*, p. 69.
- [155]Yarbrough, pp. 128–37.
- [156]Robertson, 6:214; Schnachenburg, p. 120.
- [157]Kenneth Grayston, *The Johannine Epistles*, p. 75.
- [158]Henry, p. 1957.
- [159]Hodges, "The First ...," 2:1202.
- [160]Westcott, *The Epistles ...*, p. 62.

- [161] Schnachenburg, p. 122.
- [162] Barker, p. 322.
- [163] Findlay, p. 207. Cf. Ryrie, "The First ...," p. 1470.
- [164] Jamieson, et al., p. 1501.
- [165] Schnachenburg, p. 123.
- [166] Hodges, *The Gospel ...*, p. 49. Cf. Eph. 4:1; Col. 3:12–13.
- [167] *The Nelson Study Bible*, p. 2148.
- [168] Ibid.
- [169] Hodges, *The Epistles ...*, p. 105.
- [170] Findlay, p. 215.
- [171] See Kruse, pp. 99–100, for a chart of the major New Testament antichrist passages.
- [172] Stott, pp. 104–5; Plummer, p. 107; Barclay, p. 73.
- [173] Cf. McGee, 5:776.
- [174] Robertson, 6:215.
- [175] Mitchell, *Fellowship*, p. 71. Cf. Findlay, p. 218.
- [176] Mitchell, *Fellowship*, p. 72.
- [177] Smalley, p. 101.
- [178] Ibid., p. 103. Cf. Hodges, *The Epistles ...*, pp. 109–10.
- [179] Wiersbe, p. 499.
- [180] Marshall, p. 152.
- [181] Ryrie, "The First ...," p. 1470.
- [182] This is a view proposed by Dodd, p. 63, but refuted by Hodges, "1 John," p. 892, and Simon Kistemaker, *Exposition of the Epistle of James and the Epistles of John*, p. 279, footnote 55. Marshall, p. 155, proposed a similar view, namely, that the Word applied by the Spirit constitutes the anointing, which Smalley, pp. 106–7, followed. Yarbrough, p. 149, viewed the anointing as the effect of the apostolic message that the readers had received (i.e., the truth).
- [183] For summaries of Gnostic teaching, see Dillow, pp. 158–61; and Barclay, pp. 8–15.
- [184] Ryrie, "The First ...," p. 1471.
- [185] See Eusebius, *The Ecclesiastical History of Eusebius Pamphilus*, 3:28:113–14; Barker, p. 295; and Brown, p. 112.
- [186] Smalley, pp. 110–11. Cf. Stott, p. 111. See Arnold Fruchtenbaum, "Who Is the Antichrist?" in *The Gathering Storm*, pp. 210–39.
- [187] Barker, p. 326.
- [188] Hodges, *The Gospel ...*, p. 55.
- [189] Barker, p. 327.
- [190] *The Nelson ...*, p. 2143.
- [191] Allman, p. 220.
- [192] Yarbrough, pp. 166–67.
- [193] Hodges, *The Epistles ...*, p. 123. Paragraph division omitted.
- [194] An inclusio is a literary device based on a concentric principle, also known as bracketing, bookending, or an envelope structure, which consists of creating a frame by placing similar material at the beginning and end of a section.
- [195] Findlay, p. 231.
- [196] Alford, 4:2:457.
- [197] See Gerald B. Stanton, *Kept from the Hour*, ch. 6: "The Imminency of the Coming of Christ for the Church," pp. 108–37.

- [198] Westcott, *The Epistles* ..., p. 81. See also A. E. Brooke, *A Critical and Exegetical Commentary on the Johannine Epistles*, p. 65; C. H. Spurgeon, *12 Sermons on the Second Coming of Christ*, p. 134; Findlay, pp. 232–33; and Robert S. Candlish, *The First Epistle of John*, p. 213.
- [199] McGee, 5:785.
- [200] C. H. Spurgeon, *An All Round Ministry*, p. 278.
- [201] Hodges, *The Epistles* ..., p. 125.
- [202] Arno C. Gaebelien, *The Annotated Bible*, 4:2:146–47.
- [203] Hodges, *The Epistles* ..., p. 127.
- [204] *The Nelson* ..., p. 2144.
- [205] See Lenski, p. 447.
- [206] See Yarbrough, pp. 174–75 for a graph and a table of the occurrences in all the New Testament books.
- [207] Westcott, *The Epistles* ..., p. 96.
- [208] Barker, p. 330.
- [209] Marshall, p. 171.
- [210] Smith, 5:183.
- [211] Blair, p. 92.
- [212] Lenski, p. 452.
- [213] Westcott, *The Epistles* ..., p. 97.
- [214] See Wayne A. Brindle, "Biblical Evidence for the Imminence of the Rapture," *Bibliotheca Sacra* 158:630 (April–June 2001):149–50.
- [215] Ryrie, "The First ...," p. 1472.
- [216] Mitchell, *Fellowship*, p. 84.
- [217] Marshall, p. 175.
- [218] Smalley, p. 152.
- [219] J. N. Darby, *Synopsis of the Books of the Bible*, 5:511.
- [220] Smalley, p. 158.
- [221] Westcott, *The Epistles* ..., p. 103.
- [222] E.g., Lenski, p. 429.
- [223] Smalley, pp. 158–59. Cf. John 15:5.
- [224] Jamieson, et al., p. 1504.
- [225] Schnachenburg, p. 172.
- [226] E.g., Lenski, p. 458.
- [227] Hodges, *The Gospel* ..., pp. 58–59.
- [228] Marshall, p. 180.
- [229] Hodges, *The Gospel* ..., p. 59. See also Smalley, pp. 159–60; Yarbrough, p. 183; Kruse, p. 131.
- [230] J. P. Louw, "Verbal Aspect in the First Letter of John," *Neotestamentica* 9 (1975):101.
- [231] Hodges, *The Epistles* ..., p. 136.
- [232] Marshall, p. 187.
- [233] Smalley, pp. 161–62, 164, 172.
- [234] *Ibid.*, p. 168.
- [235] Jamieson, et al., p. 1504.
- [236] See also Marshall, p. 180; Dodd, p. 79.
- [237] See Robert N. Wilkin, "Do Born Again People Sin? 1 John 3:9," *Grace Evangelical Society News* 5:3 (March 1990):2–3.
- [238] Footnote 16: Sakae Kubo, "1 John 3:9: Absolute or Habitual?" *Andrews University Seminary Studies* 7 (1969):47–56.

- [239]Hodges, *The Epistles* ..., p. 144.
- [240]Ibid., p. 141.
- [241]Ibid.
- [242]McGee, 5:792. See also Gaebelein, 4:2:149.
- [243]Smith, 5:185. See also Jamieson, et al., p. 1505.
- [244]Findlay, p. 266; Schnachenburg, p. 175.
- [245]Hodges, *The Gospel* ..., p. 60.
- [246]Ibid., p. 61.
- [247]Findlay, p. 267. Cf. Schnachenburg, p. 175.
- [248]See Harris, p. 221.
- [249]Dillow, p. 168.
- [250]Ibid., p. 169.
- [251]Ibid., p. 172.
- [252]Earl D. Radmacher, *Salvation*, p. 109. Italics omitted.
- [253]Gleason L. Archer, *An Encyclopedia of Bible Difficulties*, p. 429.
- [254]Smalley, p. 171.
- [255]Findlay, pp. 254–67.
- [256]Hodges, *The Gospel* ..., p. 62.
- [257]Westcott, *The Epistles* ..., p. 109.
- [258]Hodges, *The Epistles* ..., p. 152. NIV refers to *The Holy Bible: New International Version*.
- [259]McGee, 5:794.
- [260]Dodd, p. 82.
- [261]Yarbrough, p. 197.
- [262]Hiebert, "An Expository ...," 146:302.
- [263]Barker, p. 335.
- [264]Marshall, p. 192.
- [265]Smith, 5:186.
- [266]Marshall, p. 192.
- [267]Mitchell, *Fellowship*, pp. 128 and 136.
- [268]Smalley, p. 199.
- [269]See James E. Allman, "Suffering in the Non-Pauline Epistles," in *Why, O God? Suffering and Disability in the Bible and Church*, pp. 195, 198–200.
- [270]Jamieson, et al., p. 1506.
- [271]Schnachenburg, p. 185.
- [272]Marshall, p. 199.
- [273]Smalley, p. 205.
- [274]Ibid., p. 206.
- [275]Robertson, 6:228.
- [276]Barclay, p. 104.
- [277]Hodges, *The Epistles* ..., p. 169.
- [278]Ryrie, "The First ...," p. 1474.
- [279]Mitchell, *Fellowship*, p. 113.
- [280]Robertson, 6:229.
- [281]See Kurt E. Koch, *Between Christ and Satan*, pp. 183–99.
- [282]Alford, 4:2:484.
- [283]Yarbrough, p. 192.

- [284] J. B. Philips, *Your God Is Too Small*, p. 90.
- [285] Westcott, *The Epistles ...*, p. 140.
- [286] Hodges, *The Epistles ...*, p. 176.
- [287] Smalley, p. 216.
- [288] McGee, 5:803.
- [289] Barclay, p. 113.
- [290] Barker, p. 341.
- [291] Marshall, p. 209, footnote 18.
- [292] Blair, p. 126.
- [293] Alford, 4:2:487.
- [294] Barker, p. 341.
- [295] Marshall, p. 210.
- [296] Alford, 4:2:487.
- [297] Findlay, p. 327.
- [298] Smalley, p. 235.
- [299] Yarbrough, p. 234.
- [300] Bruce, p. 107.
- [301] Blair, pp. 132–33. Paragraph division omitted.
- [302] Findlay, p. 331.
- [303] Dodd, p. 110.
- [304] Marshall, p. 212.
- [305] Ryrie, "The First ...," p. 1475. Bold emphasis omitted.
- [306] Robertson, 6:232. See also A. W. Tozer, *The Knowledge of the Holy*, pp. 104–9.
- [307] For a good explanation of why a loving God allows people to go to hell, see Hodges, *The Epistles ...*, p. 184.
- [308] *Ibid.*, p. 187.
- [309] See *Baker's Dictionary of Theology*, s.v. "Theophany," by Wick Broomall, pp. 520–21.
- [310] Stott, p. 164. Cf. Westcott, *The Epistles ...*, p. 152.
- [311] Bruce, p. 109.
- [312] Alford, 4:2:492.
- [313] Hodges, *The Epistles ...*, p. 192.
- [314] *Idem*, *The First ...*, 2:1218.
- [315] Yarbrough, p. 252.
- [316] Hodges, *The Epistles ...*, p. 197.
- [317] Smalley, p. 256.
- [318] Wiersbe, p. 520.
- [319] *Ibid.*, p. 521.
- [320] Smith, 5:192.
- [321] Alford, 4:2:495.
- [322] Schnachenburg, p. 224.
- [323] Smalley, p. 261. Cf. Dodd, pp. 122–23.
- [324] G. S. Sloyan, *Walking in the Truth*, p. 49.
- [325] *The Nelson ...*, p. 2144.
- [326] Hodges, *The Epistles ...*, p. 209.
- [327] *Ibid.*
- [328] Henry, p. 1961.

- [329]Baxter, 6:328.
- [330]Bruce, p. 115.
- [331]Marshall, p. 226.
- [332]See Charles W. Colson, *Loving God*, p. 40.
- [333]Robertson, 6:238.
- [334]Hodges, *The Epistles* ..., p. 216.
- [335]See Alford, 4:2:501-2; Smith, 5:195; Jamieson, et al., p. 1509; Morgan, *An Exposition* ..., p. 529; Lenski, p. 526; Ryrie, "The First ...," p. 1476; Blair, p. 174.
- [336]Schnachenburg, p. 233.
- [337] *The Nelson* ..., p. 2147.
- [338]McGee, 5:816.
- [339]Mitchell, *Fellowship*, pp. 144-45.
- [340]Kruse, p. 178.
- [341]John Calvin, *Institutes of the Christian Religion*, 4:14:22.
- [342]See Barclay, p. 10.
- [343]Marshall, p. 278.
- [344]See Hodges, *The Epistles* ..., p. 219, footnote 10.
- [345]Calvin, *Institutes of* ..., 4:14:22. Cf. Findlay, pp. 382-88.
- [346]Hodges, "The First ...," 2:1224.
- [347]Ryrie, "The First ...," p. 1477. Cf. Alford, 4:2:504.
- [348]Barker, p. 352.
- [349]Hodges, *The Epistles* ..., p. 224.
- [350]Smalley, p. 287.
- [351]Blair, p. 175. Paragraph division omitted.
- [352]See Robert N. Wilkin, "'Assurance: That You May Know' (1 John 5:11-13a)," *Grace Evangelical Society News* 5:12 (December 1990):2, 4.
- [353]Westcott, *The Epistles* ..., p. 188.
- [354]Hodges, *The Gospel* ..., p. 51. Cf. Wilkin, "Knowing God ...," p. 3.
- [355]See Radmacher, pp. 203-18; Robert N. Wilkin, *Secure and Sure*; Michael Eaton, *No Condemnation*; C. Gordon Olson, *Beyond Calvinism and Arminianism*, pp. 175-87.
- [356]E.g., Calvin, *Institutes of* ..., 3:24:4; and John MacArthur, *Faith Works*, pp. 162-66.
- [357]Ibid., p. 171. The emphasis is his.
- [358]Hodges, *The Epistles* ..., p. 229.
- [359]Findlay, p. 398. See Kruse, pp. 198-200, for "A Note on the Bases of Assurance" in 1 John.
- [360]Smalley, p. 295. Cf. Law, p. 301.
- [361]Barclay, p. 136.
- [362]See Thomas L. Constable, "What Prayer Will and Will Not Change," in *Essays in Honor of J. Dwight Pentecost*, pp. 99-113; and idem, *Talking to God: What the Bible Teaches about Prayer*, p. 170.
- [363]Darby, 5:537.
- [364]Lenski, pp. 532-33.
- [365]Jamieson, et al., p. 1510.
- [366]Marshall, p. 244.
- [367]Alford, 4:2:509.
- [368]Randall K. J. Tan, "Should We Pray for Straying Brethren? John's Confidence in 1 John 5:16-17," *Journal of the Evangelical Theological Society* 45:4 (December 2002):599-609; and Yarbrough, pp. 306-13.
- [369]Lenski, p. 535.

- [370] Schnachenburg, p. 249.
- [371] E.g., Findlay, p. 406.
- [372] Smith, 5:198.
- [373] Marshall, p. 249. See also Westcott, *The Epistles ...*, pp. 209–14.
- [374] Robertson, 6:244.
- [375] See W. Robert Cook, "Hamartiological Problems in First John," *Bibliotheca Sacra* 123; 491 (July–September 1966):257–59; and C. Samuel Storms, *Reaching God's Ear*, pp. 241–53.
- [376] Blair, p. 190.
- [377] Smalley, p. 299. An apostate is a person who has departed from a position or truth that he or she formerly held. Apostates can be believers or unbelievers.
- [378] Footnote 27: Stott, pp. 186–91.
- [379] Marshall, pp. 249–50.
- [380] McGee, 5:820.
- [381] Barclay, p. 143.
- [382] Hodges, *The Epistles ...*, p. 241.
- [383] See John A. McLean, "An Exegetical Study of 1 John 5:18–21," *Bibliotheca Sacra* 169:673 (January–March 2012):68–78.
- [384] See my previous discussion of 3:9.
- [385] Mitchell, *Fellowship*, p. 163.
- [386] See Marshall, p. 252, footnote 37, for further discussion of the options.
- [387] Darby, 5:510.
- [388] Harris, p. 232.
- [389] Findlay, p. 415.
- [390] Barker, p. 357. Cf. Lenski, p. 545; Benjamin L. Merkle, "What Is the Meaning of 'Idols' in 1 John 5:51?" *Bibliotheca Sacra* 169:675 (July–September 2012):328–40.
- [391] Findlay, p. 425. See also Charles R. Swindoll, *Come before Winter*, "Idols," pp. 80–82.